

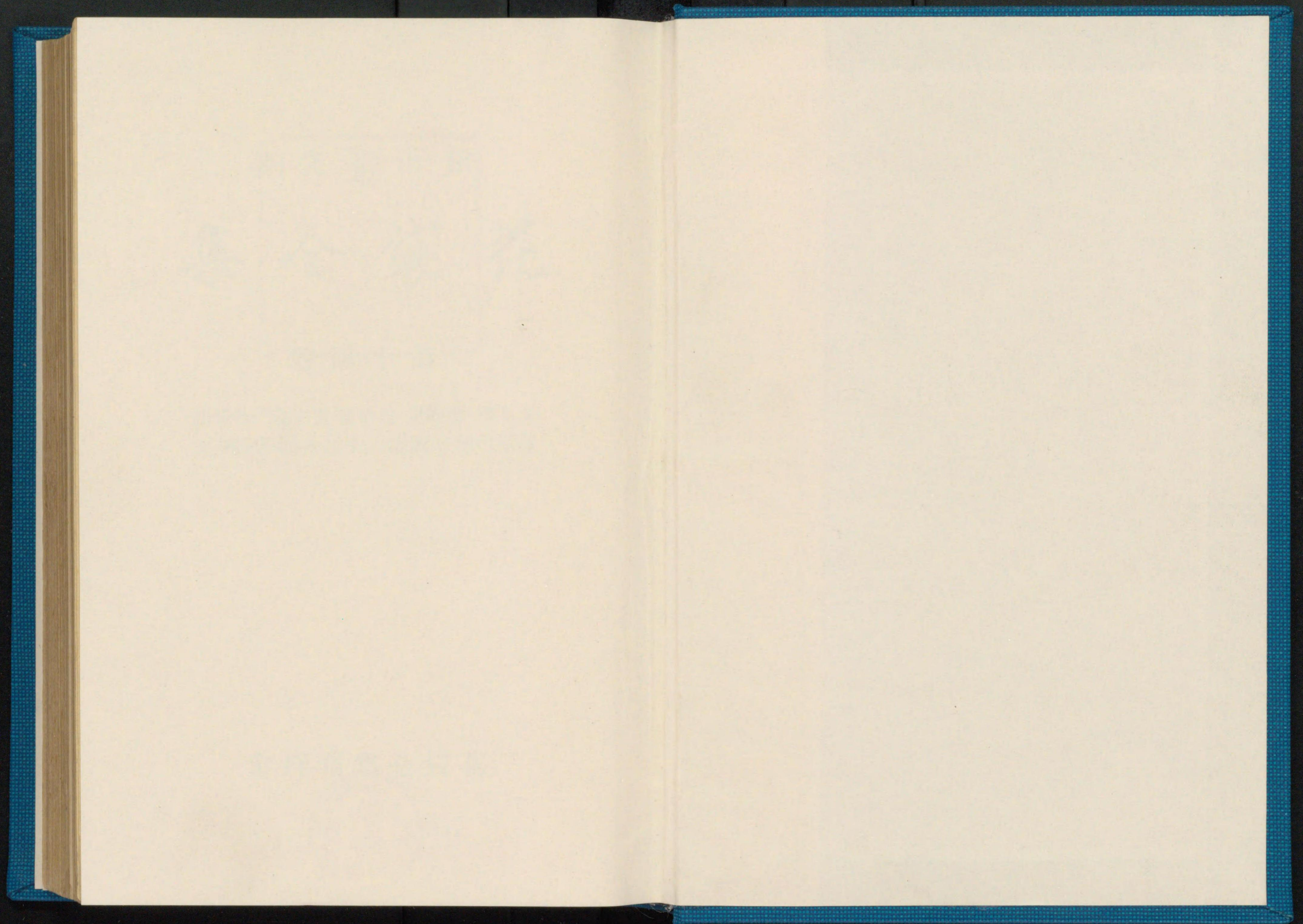
693

693-176



1200501580645

口
複
写



AE/A-26

著 田山花袋

花袋全集

第 十 四 卷

期最の門衛右重・花の野・記梅憶・郷るふ
 女少張名・潮春・屋小山・師教女・梅の屋梅

花袋全集刊行會





(月五年三十正大) 者著 氏江秋松近 氏夫羅武村中
(影撮氏二浩野宇)



693
176

偉大な足跡

佐藤紅緑

若し文學が砂上の樓閣であり、夏雲の奇峰であるなら、誰が人生の眞實を永久に記録するであらう。空想は美しい、併し現實はより以上に美しい。多くの人が醜惡直視するに堪へずとする様な事でも、詩人はじつと眼を据ゑて其れを正視するのだ。其れは科學者が黴菌を見ると同じである。善を讚美し惡を呪咀するのは普通の人の心である。善も惡も美も醜も一樣に認容して、其れが人生にどんな波紋を描くかを、微笑を以て眺めるのは詩人である。詩人の胸は寛やかにして大きい。

恚ういふことが日露戦争當時までは何人も解らなかつた。紅葉や一葉や逍遙は矢張り徳川末期時代の繼承者であり、而も世人が其れ等の作品を文學の至れるものとして賞讃して居たのだ。其の時代に於て全然白窠を脱却して既往の文學を根本から革新し、文學に生新たな生命を與へたのは田山花袋君である。凡て偉大な人物の足跡は即ち獨創の足跡である。今日の文學は花袋君の足跡から出發して居る。自然派といへば何だか悪い意味に歪曲せられて居るが、其れは末派の愚作の飛沫を花袋が受けただけで、花袋君に取つては迷惑至極である。花袋の作品にはどれ一つとして醜惡な感じを起させるものはない。いかに彼が純眞であり卒直であり凡俗の上に超越して居るかは彼の作品を一讀すれば明瞭である。『田舎教師』を讀んだ人は何

人も彼の正義觀念、愛國精神、人と人との間に起る葛藤の眞實に泣かされるであらう。而もそれが彼の素晴らしい人格の現れである。

東京に大地震があつた時に、私は外國漫遊中であつた。急ぎ歸朝して東京に着いた翌日、私は長男の八郎を伴れて花袋君を訪ねた。其時彼は恚う言つた。

『福士君はどうしたかね、君、今度地震の時焼跡へ行つて見ると、向島の荒涼たる灰燼の中に水道の柱が残つて居た、柱から清い水が滴々と滴つて居た、あゝいふことが福士君などが見ると詩になるんだがね』

辭して門を出ると、八郎は私に言つた。

『田山先生はえらい人です』

『うん、解つたか』と私は言つた。
焼跡の灰の中に清い水を滴らす水道の柱、其れは田山君自身
であるまいか。

花袋全集 第十四卷 目次

序	文 (佐藤紅緑)
ふる郷	三
憶梅記	一九
野の花	一八五
重右衛門の最後	三〇七
梅屋の梅	三九一
女教師	四六五
山小屋	五四九
春潮	五八七

目次

名張少女

三七

解説 (佐藤春夫)

六九

ふる郷

ふる郷



夕陽の近きに催されて、御者は烈しく鞭を加へたれば、わが乗れるがたくり馬車は、礫を飛ばし砂塵をあけて、兩側なる綿畑、水車、橋、川、くろき森、遠き山など、殆ど眼眩めくばかりにいと早く移り行きぬ。われは倒れかゝらんとせし身を纒かに傍なる車の柱に支へたるが、此時重苦しき鉛のごとき感は、烈しく強く胸を衝きて、われはつゞきて落ち來れる涙を堰き止むる事能はざりき。これも理なり、わが前には十二年前青雲を望みて潔く門出せし懐しき故郷の地横りて、身は一領の錦衣をすら纏ふこと能はぬはかなき憐れなるさまなるをや。

人誰か錦を着て故郷に歸るを願はざらん。父母閭に迎へ、郷黨門に俟ち、昔は曾て我を冷眼視せし嫂も、今日は目を翳てて仰ぎ見ぬごとき得意なる境を誰か願はざるものかあらん。この身も一度は漢の高

祖が大風の歌をうたひたらむ時のやうに、豊臣秀吉が車馬十乘盛に里閭を賑はしたらんやうに、歸りて郷黨を驚かさんと、夢よりも甚しき空想を逞したる事もありたりき。錦を着名を挙げずんば、再びこの懐しき故郷の土を踏むことあるべからずと、密に心にも誓ひたりき。然るを今いかなれば業就らず名擧らざる身を以て、孤影蕭條として、この故郷の夕日の影には照されたる！ 許せ、わが故郷！ 我はいかなる時に於ても、汝の穩なる胸と汝のなつかしき懐とを忘るゝ能はざりし身なるものを。名と利を争ふに齷齪して、紅塵深く頭上に蔽ひかゝれる時に於ても、失望落膽恰も羽翼を失ひたる鳥のごとく烈しく地上に墜ちたる時に於ても、稍天上の光明を認めて一意それを望みたる時に於ても、片時も我汝をわすれたることなく、月の夜雨の夕、かなしき時にも佗しき時にも、思は常に汝の柔き懐に馳せ、汝の暖かなる胸に飛びて、限りなき慰藉をこの小さく悲しき胸に感じたりき。幾千萬載を経て猶盡くる時あるべからざる悠久なる天地の間に、纔かに五十年の短き歲月を得て、それを花々しく送る事能はずとて、一生なつかしき故郷の土に負く世の人の心強さよ。われの如き弱き心は、いかでかそを爲すに忍ぶべき。許せ、わが故郷！ わがかく飄零落魄して始の誓ひたる心に負きて、幕夜の盜の如く、密に汝の土をけがし行くを。

許せわが故郷！

かく再び叫びしが、わか胸には涙いよゝゝ堰き止めがたくあふれ出でぬ。

されど迎ふべき父母もなく、語るべき友も無き故郷に、我いつ迄か留るべき。われは今宵一夜をその懐しき故郷の中に過して、あくる日は黎明の光と共に、この故郷にわかれ行かん。而して我は何處に……再び塵深き名利の境に突進して、斃るゝまでは深くこの人世と戦はばや。

我はわが向ひに座れる三五六歳の鬚黒く肥肉の眼の凹みたる男を、馬車に乗りたる時より、何處か見たる事あるやうなりと思ひしが、この時ふとそはわが故郷なる赤館町の呉服肆の長子にして、小學校にてわれより一級上の男なりしを思出しぬ。此男は曾て學校の色硝子に礫を飛ばして、それを破りたる罰として、水を満したる茶碗を持たせられて、半日教場に立せられたる事ありたりき。われ等の夥伴は、平生渠に酷めらるゝ身の、それをよき氣味なりといひて、そを戸の隙間より覗きて、舌を出し赤目あかんべいをしていたく嘲りたる事ありたりき。然るに渠は今かゝる立派なる好商賈とならんとは！

渠は全く我を見忘れたるものと覺しく、頻に傍なる乗客と流暢なる饒舌を逞うして居たりしが、ふと我に向ひて問ひ懸けぬ。

『御身も赤館に行き給ふか』

『然り―否』と極めて怪しき返答を爲せしが、我は猶言葉を續ぎて、『赤館は赤館なれど、少し田舎の方に』と言ひまぎらしつ。

『さては新郷にや』

『然なり』

『さらばこの先の村井にて下りて川を渡り給ふならむ』

われは只點頭きぬ。

暫く互に黙したるが、聽てまた、

『御身は赤館の人なるにや』

汝の學校仲間なるを知らざるか。汝の學校仲間の飄零落魄して、せめて一夜をそのなつかしき故郷に人知れず過さんと思へる身なるを知らざるか。

渠は猶種々なる事を問ひぬ。職業は何？ 身分は何？ 出生地は何處？ われは好加減に返答して、取合はざりしに、渠も果てはわが整はざる扮装と、しどろなる返答とを怪しと思ひしと覺しく、質問をやめて、頻にじろく〜とわれを見詰め初めぬ。われは此一瞥ごとに、言ふべからざる沈みたる悲哀を心の底に感じつ。

馬車はこの間に右綿畑左席田の間なる礫多き凸凹道を驀地に走りて、一軒の蘆洲張の里川の石橋の前にかげられたる處をも猶豫はずに過ぎ、櫟林の梢に夕日の赤く照り添ひたる一村を横斷し、猶倦まずに、稻刈に急がしき田畝道を遠近に色付きたる紅葉の濃き淡きを見ながら一里ほども進み行けば、木の瀬川は近くなりて、蛇の蜿蜒と走る如き長き堤防は、雑木山、人家、竹藪などの絶間よりをり〜見えぬ。

不意に御者が吹立てたるけたたましき喇叭の響！

あゝこの響！ 秋の夕日の影を帯びたる田舎道の靜かなる空氣にひびき渡りたるこの響！ こを聞きて、わが小さき胸は烈しく震ひぬ。あはれこの響はわが十二年前に聞きしに少しもかはらず。われはこの響をこの同じ村井の立場に聞きて、限りなき青年の意氣の燃立つ如くなるを感ぜし身ならずや。

喇叭の響の止むと共に、馬車はある茶店の廣場へと引寄せられき。こゝは村井の立場にて、赤館町と新郷村との追分なり。わが友と別を惜みしも此處、わが都門に上らんとせし朝梨の實を五つ買ひたるも此處、赤館より一時間毎に来れる乗合馬車を待合せて野田の停車場へと志したるも此處なり。われは新郷に赴かんと思へる身の、そのまゝ此處に馬車を下りて、前なる小さき池に臨みたる榻の上に腰をやすめぬ。眼に入ると入るもの、一つとして懐しからざるものなく、一つとして心を惹く料とならぬはなし。主婦は猶髮鑢として昔の如く頻に奴婢を指圖し居れど、一日幾百人の客に接せる上、已に十二年も經たる事とて、全く我を忘れ果てたるものゝごとし。夏の日など、暇ある毎によくこの木の瀬川に游泳に来て、いつも桃など買ひて休み行くを常としたるものを。家の前なる胡桃の樹は、いよく繁りて蔭を成し、其頃掘りたる瓢箪形の池は、樹も石も舊りて、そこにかけたる簡便噴水器は、いとよくあたりのおさまに似かよひたりと我は思ひぬ。こゝにいと美しき娘ありて、わが友の一人は曾て烈しく互に戀に

落ちたる事ありたるが、低頭き勝なる黒く光ある眼、丸顔にして可愛らしき姿など、まことに田舎には珍らしきほど美しき少女なりき。今はあはれいかにせし。友は落魄して臺灣に行きたれば、少女もあらぬ處に人の妻となりて、紅顔空しく色褪めたる悲しき境遇に淪みたるなるべし。人生いかなればかくは悲しき、運命いかなればかくは意に任せざる。と思ふとせし時、此回はわが戀しくなつかしき人の面影、幻のごとくひしと胸に浮び來て、其時のさまの明に眼前にあらはれ來るに堪へ兼ね、我は兩手を顔に當て、眼を塞ぎぬ。

『かの時のごとき烈しき戀を感じたる事は其後一たびだに無かりき』
暫くして我はかく獨語ちぬ。

かく獨語しは今を始めてにあらざ。われは十餘年の間、殆ど日毎にこの悲しき慨嘆の聲を出さざる事なかりき。されど其影は空中に消え行きたる蜃氣樓のごとく、いかに嘆きたりとて、いかに悔たりとて、再びわが前に現るべきものにあらざ。悲しきは空虚に向ひて放ちたる悲嘆の聲ならずや。

いつもの如く、我は顔を膝の上に打伏したるまゝ、暫しは何事をも知らざりしが、ふと思返して、あまり日の暮れぬ中にと、傍なる小さき包を携へて、婢の聲々に送られつゝ、蕭然として追懐の念深き茶店を出でぬ。

川までは其處より三十歩ほどの距離なり。低き暗き阪を上れば、上にこんもりと茂りたる竹藪ありて、夕日の斜にさし込みたるさま、座ろに人の心を惹きぬ。其處を過ぎて少し下れば、一つの桔槔昔のごとく高く夕陽の空にあらはれて、一軒蕭條たる渡船小屋の向ふには、竹藪の蔽ひ冠さるやうに繁りたる間より、夕日に照りたる幅三十間ほどの木の瀬川、藍を湛えたる色を一ところちらと見せぬ。

渡船小屋の中には、鬚白き老爺か、さらずば皺多き老媪を見るならんと思ひしに、思ひも懸けぬ若き夫婦のいと貧しげに住めるを見て、怪しき心に堪へかねて、若き男の我を渡さんとて舟を繋ける岸頭へと下り行きし時、それとなく『老爺は?』と問ひぬ。

『五年前に身歿りたり』
『老媪は?』

『これもそれより二年程経ちて赤痢といふを病みて死にき。おのれ等は二人の甥姪に當るものなるが、誰も跡をつぐものなしといふに、詮方なく、かゝる處に來て、かゝる業を爲すやうになりぬ』更に我に向ひて、『御客様は爺媪を知りてたまへるにや』

『子供の時、此處に釣魚に來て、よく渡して貰ひたるが、爺様は棹歌の上手にて、夕暮など聞けば、殆身も心もそれに引入れらるゝやうに覺えたりき』

『まことに爺の棹歌は、此處等にて名高きものなりしゆゑ』

若船頭は舟をわが幼き頃友人兩三輩と母祖父の危ふければと止むるを耳にも留めずに、水泳及び釣魚

に來りしそのなつかしき夕暮の蒼く黒き流に浮べぬ。船は竹藪の間を穿ちて、急流矢のごとくなる瀬を爲せる處へと出でしが、若船頭が突張りたる棹は、恰も弓のごとくにまがりつ。老船頭はこの瀬を行る時に、いつも高く亮えたる棹歌をうたふを常としたるが、五六十年を聞き馴れたる川は、最早その棹歌を聞くを得ざるをいかに淋しとふならん。それにしてもこの若き渡守夫妻も、昔の老夫婦がこゝに住みて年老いて死したる如く、幾人を渡しつて、穩かに此處に一生を終るならんか。

私語くが如く竹藪の陰を流れ行く碧き水！

二十分の後、我は對岸の長き高き堤防の上に立てり。こゝは最早新郷の村にして、わが生ひ立ちたる赤館の古城趾は、已に指顧の中にあり。遠き地平線上に沈まんとする夕日は、斜に脚下に立てる石地藏の影を長くし、暮秋の風は薄ら寒くわが薄き客衣を吹けり。わが此處に立ちて、一目に遠くなつかしき故郷に接せし時の感はいかに。われは殆どその刹那の感の甚だ複雑なるを狀する能はず。始は熱を病める人の脈のごとく胸騒ぎ、中ごろは重苦しき鉛を押當てたるごとく心迫り、終には涙潸然としてわが兩眼に溢れ落ちぬ。あゝまことに誰かこの悲哀を知るべき。わが眼は限なく眩惑し、わが身は深く地下に沈みぬ。

未來も過去も何かせむ。われは此時只淋しく悲しき運命の上に獨りぼつねんと取殘されたるものゝ如くなるを覺えつ。母、祖父、友人、沼、寺、川、戀人、恩師、黃楊の樹、夜學會など、ありとあらゆる昔の記念は、風を得たる走馬燈の如く、急に、急に、極めて急に、殆どその何人たると何事たると何物たるとを辨ぜざる程に、前なる故郷の景を軸としてめぐり始めぬ。われは只涙の傷もちぎれつべきほど烈しく溢れ出でたると、下なる芝生へ下り行きてそのまゝ控と倒れ伏したるとを覺ゆるのみ。

心を静め氣を穩かにするには、われは殆ど一時間餘を要したり。さて心付きて頭を舉れば、身は暮色の中に立てる石地藏の傍なる草村の中において、小き包は三步ほど下の草原に投げられてあり。わが心は靜かになりぬ。いと靜かになりぬ。恰も暮秋の夕暮の空の風もなく雲もなきがごとくに、恰も時雨の過ぎたる後の空のいと晴やかになりたる如くに……。かくて我は頭を擡げて、今一度前なる故郷の景を見ぬ。あはれ赤館街の白聖は、右の森陰に明かに夕日にかゞやきて見え、古城趾の森林の右數歩の處には、わが幼き頃遊びたる沼の一端、銀のかゞやきたる如く閃き渡りて見えぬ。ことに其沼を縁取りたる一帶の松原！ あゝこの松原の中こそは、わが青年の夢を繰返したる處にて、その松原こそは、都會の塵埃の中に埋れ果てゝも、猶夜毎に夢に往來する處なりしなれ。戀も、空想も、涙も、詩も、皆この一帯の青き風情ある松原の中に籠れるなり。

なつかしき松原！

堤を下りて歩むとする間に、夕日はいつか地平線下に落ちて、西の空に残れる夕照の影は、恰も遠き火事の烟の高く風に吹靡されたるものゝごとく、西より南へと一刷毛撫でゝなびきわたりぬ。我はそを

眺めながら、幼き時の追懐に耽りつゝ、漸く暮色に蔽はれんとする懐しきさびしきふる郷の方へと一步近づき行きぬ。

二

幼き時の追懐をわれはいかなるさまに描き出すべき。萬花亂れ發きて、色彩いと秀れたる西の國の詩人の生立に少しにても似かよひたる節あらんには、われはうかれ易き心と動き易き興とを借りて、そを及ぶ限り花々しくうつし出さんと試みしならん。されど如何にかせむ。わが稚き頃の紀念は、さる幸多き方にてはあらざりき。わが性質は母方のやさしき弱き遺傳性を受けて、恰も合歡の樹の人に觸れて縮むやうなるはかなき發達を爲したる上、さびしくあはれなる家庭の上に生立ちたれば、漸くたゆたひ勝なる腑甲斐なき一種の性質を形つくるやうになりたるなり。

わが記憶は春の麗かなる日影にたゞよふ糸遊の如く、遙かに六歳の昔にまでたゞよひ行く。されど悲しきかな、我には父といふ記憶なかりき。父はわが五歳の時、東京に出で、陸軍に職を奉じ、かの西南の役に、早くも悲しき犠牲とは爲りたまひけるなり。涙脆く節操に富みたる母上は、後にわが爲めに言ひ給ひき。其方の父は秀れたる人なり。されば其方も成長くなりたらば、父のやうなる立派なる人と爲れよと。力にしたる一人の子息を失ひたる老ひたる祖父君は言ひき。渠ありたらば、汝の父ありたら

ばと。

わが最も稚き記憶は、わが沼の畔の家は、わが生れたる家にはあらで、われはある日母上と二人して、遠き所より歸り來りたる事なりき。この時裏の柿の樹に果實のいとよく熟したるを祖父君の指して、明日はそを取りてわれに與へんと言ひしを、われは此上なく嬉しと思ひき。母上と祖父君とは、何故か知らねど、その時頻りに泣き給ひき。われはそを見て、弱き人々かな、我は子供にても泣かぬにと思ひき。今にして思へば、我は母と共に東京に出で、ありしを、父戰歿したれば、再び沼の畔の故山の家にかへりて、纔かばかりなる公債證書をたよりに、祖父君の手に據ることとなりしなり。悲しきはわが生立ならずや。

沼の畔の家は、成長くなりて後はさも思はねど、その頃は大きなよき家と思ひき。わが好める柿の樹も、栗の樹もありて、その頃生立ちし家鶏の雛の、白きと黒きと斑との三羽の、ちよ／＼と親鶏の後に従ひ行くを、われは此上もなく面白がりぬ。夕暮ごとに、祖父君は奥の六疊の椽側の片隅に、大なる膳据ゑて、庭の朴樹の上より出づる御月様を見ながら、楽しげに酒を飲みたまひぬ。ある日われ母上に命ぜられて、箸を持ち行きてまゐらせしに、坊は伶俐者なりとて、豆腐を煮たるものを吹き／＼てわれにたまひぬ。そを首尾よく食ひ了せしに、こたびは御酒といふものを飲ませられぬ。口に入りしもの熱く辛かりしかば、われは顔をしかめたるを、祖父君は笑ひて見居たまへり。此時のみは、我にかゝ

たれか
へか
し
か
の
熱
く
辛
か
り
し
か
ば
、
わ
れ
は
顔
を
し
か
め
た
る
を
、
祖
父
君
は
笑
ひ
て
見
居
た
ま
へ
り
。

るものを飲ませて、意地悪き祖父君よと思ひぬ。されど初めに食ひし豆腐といふものゝ旨かりしかば、これより我は夕暮ごとに椽側に行きて、祖父君の膳に侍するやうになりぬ。酒にはいつも頭を振りぬ。

庭に朴の大樹ありて、その高さ二百尺の上に出でし。われはある日この朴の樹の梢に、大なる花の咲けるを見付けて、そを取りて呉れよとて、一方ならず祖父君を困らしぬ。朴の樹の上には、鬼住みて恐しければと、嫌しかねて威せしに、われは愈好奇心深くなりて、それよりはいつも高き梢を眺めて、いろ／＼なる事を考へ、小さき智慧を絞りて、桃太郎の話などをそれやこれやと引くらべぬ。ある夜朴の樹の鬼に食はれたる夢を見て、聲を擧げて泣きて、添寝の母に起されたるが、それより朴の樹を一層おそろしきものと思ひぬ。

内氣なる性質の戸外に出づる事稀なれば、共に遊ぶべき幼き友も無くて、いつも家の裡にて、艸草紙を見、稚物語を聞くを例となしき。されどいつかはそれにも倦みて、ある麗かなる日、われは今まで出でたる事なき門の外に、恐々ながら出で、遊びぬ。前はひろ／＼としたる空地にて、そこには今まで見たる事なき美しき花も咲き、奇麗なる蝶も舞ひあそべるに、われはそれとはなしに引寄せられて、その美しき春の花野の中に入りぬ。

ふと見れば、其處にわれと同じ年頃なる美しき小さき娘二人、草を折敷きて座りて、紅なる袂を翻へしつゝ、頻りに花束を作りたり。我は珍しく思ひて、其處に立ちて、じつとして見てゐるたるに、その娘の一人、わが方を見返りつゝ、他の娘に向ひて、この子は東京より來りし妾の隣の子ゆゑ、一所に交ぜて遊びても好きかと問ひぬ。

われはかくて二人の夥伴となりぬ。あはれこの遊のいかに楽しかりし事よ。其處等一面に咲きみだれたる萇、蒲公英、蓮華艸など彼方此方と摘み集めて、白きと赤きと紫とを組み合せつゝ、われも一つの大きな花束を作りたるが、そを歸りて母上に示せしに、母上は美しと喜びたまひて、机の上なる水滴みづたまりに挿し給ひぬ。あくる朝起きて見しに、その大なる花束は皆しをれ果てたりき。

これより我は日毎に戸外に行きて、二人の娘と遊びぬ。果ては母君の心づかひしたまふも忘れて、遠き小川の畔まで行きたりき。その小川の畔には、美しき花殊に多ければ、われ等はそを摘みて、その清く緩かなる流にながし遣ふことを樂みぬ。紫なる萇は赤き蓮華艸と亂れ合ひて、みどりなる春の水の上、いと靜かに流れ行けり。ある日隣の娘が上流より流したる色々の花もてつくりたる大なる花束を取らんとて、一人の娘は汀近く佇立みて、次第にその美しき花束の近く流れ來るを待ちぬ。花束はゆる／＼と流れ來りしが、とある浮草にさゝへられて、見る／＼糸は解けて、紫、白、紅などの花、いと美しく亂れ盡しつ。あや惜しやと、岸なる娘は、小さき手を伸ばすとせしが、あはれなる記念ならずや、中心を失ひて、その儘倒しまに花多き小川の唯中に陥りぬ。

われ等は唯あれ／＼と言ひしのみ。如何とも爲すこと能はざりき。われ等の泣聲を聞き留めて、傍

なる田畝より人の走り来りし時は、早已にあまりに遅かりき。我はあはれなる娘の、顔色蒼ざめて人に負はれて家に歸るを見て、再び聲を擧げて泣きぬ。かくてわれも母に迎へられて家に歸りしが、其夜の娘は遂に死したりといふ事を聞きぬ。死といふものゝ如何なるものなるかをわれは始めてこの時より知りたるなり。

されど死といふものゝ再び相見ること能はぬものなりとは、流石に未だ明かに知らざりしかば、それより三四日ほど経ちたる後、われ隣の娘と共に、死したる娘の家を訪ひぬ。垣の前には美しき小さき董一つ咲けり。われ等は心おくれ、いつものやうに聲を擧げて、其名を呼ぶことを敢てせざりき。ふとその母なる人の姿の井戸端に見えたるに、隣の娘は其處に行きて、『美代ちゃん』と問ひぬ。『美代ちゃん』は最早御墓に往きたれば』といひしその母の聲は、いと悲しけなりき。われ等はそのまゝ其處を去りぬ。

美代ちゃんの御墓は葬式の時に往てよく知りて居れりと隣の娘の言ふに、われ等は其處に行かんとて歩み行きぬ。墓はさして遠くはあらざりき。沼のほとりに一つの小さき寺ありて、荒れ果てたる本堂を守れる僧もなく、墓地には徒らに白張の提燈を二つ三つあしらひたるのみなりき。あはれなる娘の墓は、その墓地の西隅沼に向ひたる處にありて、低き要垣は二坪ほどの地を限れり。その片隅に盛上られたる小さき土饅頭こそは美代ちゃんの墓なれと隣の娘教へぬ。

思へば涙こぼるゝ業ならずや。幼き美しき男女の童子二人、その友なる幼き娘が、花束取らんとて水に溺れて死したるを、幼き心にも弔ばやとて、大人の爲すらんやうに、小さき手を合せて、いと殊勝にもその墓前に額づきたるのみならず、二人は傍なる野より、美しき紫の董の花さへ摘み來て、そをいと悲しげにそこに手向けたるにあらずや。年長けて後、われはその事を思ふ毎に、いつも涙あふれて堪へ難かりしが、ある時一人してその墓を訪ひぬ。時は秋の末にて、落葉疎々として墓地に滿ち、白張の提燈の雨に汚れて半傾きて立ちたるなど、そゝろにおのが心を動しぬ。われは辛うじてその少女の墓を見出せしが、幼き時の事を思へば、涙そゝろに袂を濕して、久しく其處を立去ること能はざりき。

隣の娘とは猶一二年がほど互に行かよひて、終日いと睦しく遊び戯るゝを常としたり。されどこの娘とすら、やがては別れねばならぬ運にわれは會ひぬ。かれの父は久しく田舎にありて、小學校の教員をつとめたるが、今回松原村小學校の校長となりたれば、一家を携へて、其處に移り住まんとなり。かれも幼き馴染なる我を失ふを悲しまぬにはあらねども、今回行きて住まふ處には、赤く大なる桃と、白く可愛ゆき小犬とありと聞きて、一日も早く行きたしと願ひしなり。かれは毎日に、此回新に住むべき家に就きて、いろ／＼とわれに語りぬ。そこには花もあり、柿もあり、栗もあり、桃もあり、飼いたる目白もあり、可愛き人形もあり、面白き草双紙もあり、家も今までのごとく狭からずして、庭には大なる槐の樹しけり、そこには鶴といへる大なる鳥來りてやどる事さへありと、其母の語りたる儘を我に語り

ぬ。

わが幼き好奇心はいろ／＼とその言葉に翼を添へて、幼き友の所に住むべき家の、いかに美しくいかにすぐれたるものなるべきかを思ひぬ。われもそのやうなる家に移轉したしと、ある日烈しく母上に迫りしに、終には母上も困じたまひて、其方には袖さんのやうに父君無ければと言ひたまひき。父君！父君！何故にわが父君はかく早く死し給ひしか。何故に今まで生きて、可愛き人形と面白き草双紙と白き小犬と旨き桃とある大なる家に移轉して下されざりしか。

秋の初のある日、袖ちやんは美しき衣着て、其母と共にわが家に暇乞に來たりしが、その夕暮、遂に沼を越えて、向ひに見ゆる、翠色深き松原の中なりといへる、羨しき新しき家へと移り行きぬ。

日毎／＼のわが淋しさは殆ど譬へんものなかりき。友としては唯一人のみなりし隣の娘さへ今は去りて、他に男の友とても無き身は、詮方なきまゝに、終日家にこもりて、母、祖父を相手に、見倦きたる草册子を繙き、聞き馴れたる昔語などを聞きて日を送りぬ。猶をり／＼は椽側より微に見ゆる沼を望みて、かのみどりの松の陰にかの袖ちやんは居るなりと思ひぬ。ことに秋のよく晴れたる夕など、その沼の上の松原の翠の上に、白き赤き雲のおもしろくかゝれるを見て、今頃は袖ちやんはあの雲を見ながら小き白き犬と遊び居るならんと想像しぬ。

あはれそは幾日後の事なりけむ。ある日我はあまりの無聊に堪へかねて、一人ぼつねんと戸外に出でしが、行くともなく、沼の見ゆる、なつかしき松原の見ゆる芦原の方へと引寄せられぬ。風いとつよく吹く日なりき。われは秋の野に咲き残れる草花などを手折りながら、一人さびしく桑畝の間につけられたる細き路をたどり行しが、いつかざわ／＼芦の戦ゆる沼の小埠頭の處へと來て立ちぬ。風強ければ漁に出づる漁師もなくて、三四艘の舟は、空しくそこに繋がれてあり。われは此處に來て、船を繋ぎたる木杭に凭りかゝりて、一意沼の向ひの松原に眺め入りしが、聞きたる友の新しき家の事いろ／＼と思ひ出されて、珍らしき草双紙も見たく、熟したる柿の實も食ひたく、やさしく美しき娘にも逢ひたく、小く白き犬とも遊びたく、遂には我しらずこの沼を向ふにわたり行く心になりて、いつか舟に乗りて、結びたる纜を解きぬ。

風なき日にてあらんには、棹さゝる舟は、決してこの埠頭を離れ行くこと無かりしなるべし。されど不幸にも今日は芦原に吹わたる風強くして、舟は時の間に、岸を離れて、する／＼と芦原の中を向ふへ向ふへと流れ出でぬ。われは行かんと思ひてこの舟には乗りたれど、まだ七歳の幼心の、舟の進のあまりに早きに、早くも己に心を奪はれて、堪難く恐しき念の起り來りたれば、一生懸命に傍に靡きたる芦に縋りて、舟の進行をとゞめんとしつ。されど幼き力のいかで及ばん、舟はいよ／＼流れ／＼て芦原のせまき間より次第に沼の濶々としたる處へとたゞよひ行きぬ。

芦原に遮られて見えざりし廣き／＼沼の、はつとわが前にあらはれし時、いかに我は驚きけん。芦原

の上より見渡してこそ、松原も近く至り易きやうに思はれたれ。此處より見れば、その松原は空にもつく程に遠かりて、到底至り得べきやうには思はれぬに、我はいよく恐ろしくなりて、果はめそくと泣初めぬ。

風は益強く吹きて、舟はゆらくと動きつゝ漂ひ行きぬ。沼の色は飽まで深碧に、日の光深く射入りて、下には恐ろしき龍など住むらんやうに思はれたるに、われは身も世もなく、頻りに泣きつゝ母を呼びぬ。されどいつも一人二人漁師の出で、居らぬ事なき廣き沼の面にも、今日は強き風を恐れて、一人の漁師の影だに無かりき。

泣きたる子一人載せて、舟は只風のまに／＼、浮萍、枯蓮などの間を遠く／＼たゞよひ行けり。船の動搖はいよく高く烈しくなりしが、われは恐ろしき限りなき中より、きと思ひ定めて、かくだにせばいかにか爲らんと、幼心の危しとも知らず、そのまゝさんぶと泥深き沼の中へと飛び込みたる。子供心の恐しさに堪へずなりたるなり。

あはれこの時を知る人なかりしならば、我はかの花束を取らんとせる少女と均しく、村のさびしき墓地の片隅に、母の涙乾くときなき一つの小さき墓となりしならんに。世のつらく悲しき事の數々をも夢にも知らずをはるべかりしに。あはれ我は不幸なる星の下に生れたるあはれなる身なりき。わが飛び込みたる處より、大凡三十間程隔りたる芦の陰に、靜かに釣を垂れ居たる一人の漁師、先程より小兒の泣聲のやうなるもの聞ゆる／＼と思ひながら、さる筈なしと打消しつゝ居たりしが、此時ふと首をめぐらして、そのさまを見て、驚きて急ぎて舟を漕ぎ寄せつ。

かくてぞ我は救はれたる。

われは水中に飛入りて、黒きものと白きものとの眼の前にて相合ふやうなる様を感じたるのみ。其後は更に少しも知らざりしが、ふと長き苦しき眠より覺めたらんやうに心附きて見れば、身はいつもの家の柔き蒲團の上に横りて、母君の蒼き心配らしげなる顔はわが傍にあり。

『氣附きしか』

母上の顔には喜ばしげなる色名残なく顯れわたりぬ。

あくる日は氣分元に復して、いろ／＼と稗物語など母上より聞きしが、母上はわれに向ひて、いかなれば其方は沼になど出づる氣になりしやと優しく問ひ給ひぬ。お袖ちやんの處に行きたくなりたればと我は絶々に答へしに、然なりしかといふ顔色して、母上は暫しわが顔を見詰め給ひぬ。稍ありて「袖ちやんの處に行きたくなりたらば、何時にても伴わて行くべきに、決して一人にて沼になど行きたまふな。御母様は其方あらずなりては、一人ぼつちになりて、生きて居らん甲斐も無きに」

その聲の悲しさ、われは低頭きて泣きぬ。何故にわれは沼になど行きたらんと思ひぬ。これより後は最早お袖ちやんの處へなど行きたしと思ふまじ。まことに母上は坊と二人のみなるを。見上れば母上

の黒き眼には玉のごとき涙きらめきぬ。

三

後にて聞けば、わが沼に陥りしを聞し時は、母上は氣をも失はんばかりに驚き給ひて、跣足にて戶外に駆け出したまひしとなり。さればこれよりのわが外出は、いつも一方ならざる心勞の種となりて、少しにても歸る事遅ければ、又しても沼に行きはせぬかと、母、祖父の心を驚かす事幾度といふを知らざりき。かくてそのあくる年の春に、われは小學校に上るやうになりたるが、そこに通ひ行く路の遠きと、今まで住める家の年舊りて礎の傾き始めたると、沼近くして子供を養ふに危ふきとの三つの理由によりて、われ等は久しく住み馴れたる沼の畔の家を去りて、**内伴木**といへる昔の城趾に近き稍人家多き所に移り住むこととなりぬ。

あはれ紀念多きその家！ 後に低き土手を帶び、前にひろき畑を控へ、門の傍には梅の古樹蓋のやうに蔽ひ冠り、周圍には柿、栗、杏、などいろ／＼と生茂りたるが、故郷を去りて後、われは幾度そのなつかしき一軒の茅葺屋根を夢にや見けん。あはれわが秋の黎明早く人に拾はれぬ前にとて、裏の栗の樹の大樹の下に佇立みて、落ちたる實を拾ひ集めたるも此處、西の四疊半の離座敷に座りて、雨の夜長く軒端の點滴の音を聞きつゝ、昔の稗史小説に讀み耽りたるも此處、慈愛ある母の死に頼したる遺言を聞きて奮つて孤身都門に上りたるも、青年客氣の同人相會して互に燃ゆるがごとき若き心を語り合ひたるも、戀しき人を思ひたるも、烈しき空想に耽りたるも、皆々此處なり。故郷にてのわが紀念は、いつも此家に伴はぬはなく、故郷に於るわが追懷の情も、皆この家を思ひ出さぬ事とては無し。

なつかしきこの家！

われは今此處にこの家のさまとこの家の周圍に住める人々の有様を記さんと思へり。いかにといふに、この家はわが幼き時の歴史を語るに、最も必要なるものにして、周圍の郷黨は、皆多少の關係をこの身に有せざるものは無かりければなり。あはれわが少年の夢のいかにはかなくいかにあはれなる趣を備へたるか。わが少年の夢は、譬へば落日に匂ひたる夕の雲のごとく、忽地來りて又忽地に消え果てたる微かなる様にも似たるべきか。

わがこの家は八疊、六疊、四疊半の三間にて、この他に農家のごとき廣き臺所を備へたり。六疊は祖父君の居ます所にて、祖父君は終日長く机に向ひて、或は文を讀み、或は字を習ひ、あるひは珠算を弾きたまへり。夏の日など午睡したまふ事をり／＼あれど、そは極めて稀なりき。刀劔、書畫を此上なく好みたまへば、床の間なる鹿の角の刀架には、金拵へなる家重代の備前長船範光の大小常に飾られ、床には文晁、應舉、探幽などと、三日と同じ軸をかけられたる事なかりき。われは十歳頃まで祖父君によくなつきて、その膝によりかゝりて、いろ／＼と昔の面白き戦場の功名話などを聞きぬ。次の八疊に

は、右の-highき處に神棚ありて、其處には天照皇大神と共に、戰死したる父君の靈を祭れり。夕暮ごとに、母上のつとめの神燈の影美しく花さきて、幼き心にも父君は極樂とやら樂しき國に行きたまひしなるべしと思ひき。四疊半の離座敷は、後にはわが書齋とはなりたれど、初めは父の遺物の書箱山の如く積み重ねられて、雨戸はいつも開かれたる事なかりき。家の周圍には一反歩ほどの畑ありて、母上手づからそれを耕し給ひぬ。維新前には琴をもかなでたまひし御手なるをと、昔より出入せし百姓の老婦、それを傷ましき事に云ひしを、われは久しき後まで忘れざりき。祖父君も暇ある時は、徒に午睡せんもやくなしとて、棧俵を腰につけて、到る處に尻餅つきつゝ、雑草を取りて母上を手傳ひたまひぬ。西の隣境には、里芋いつもよく生立ちて、夕月の閃々とその廣き葉の上の露に煌くを、われは常に美しと思ひき。玉蜀黍、茄子、麥など皆よく成熟せざるはなかりき。ことに荒地には薩摩芋よければと人より教へられて、裏の土手の一部を耕して、ある年をを試みしに、思ひしより出来よくて、母上と共に、歡喜しつゝ、小兒の頭ほどの大なるものを掘りし事を今も忘れず。

周圍に住める郷黨は、皆維新の烈しき潮流に洗ひ残されたる士族にして、或は年老いて子なきもの、或は因循にして世の進歩に遅れたるもの、或は少しばかりの公債を頼みに、小學校教師となりて、平和なる世を送らんとするもの、或は田地を買ひて、まことの農に歸せんとするものなど、健全ならざる零落し果てたる氣到る處にみち／＼と、何となく淋しく哀れに悲しかりき。西の隣は舊二百石を領せし家

老の家にて、一人の子は東京に修業に出で、跡に残れるは、老いたる父母と、一人の娘となるが、公債の利子のみにては、満足に生活する能はねば、母と娘とは町の機屋に内職を求めて、糸繰の音絶えずまばらなる柴の籬より洩れて聞えぬ。それに引かへて、東の隣には、元御殿につとめたりといへる中老婦只一人住みて、其處よりはをり／＼琴の音などの聞ゆる事もありたるが、財に富みたるが上に、氣位のみ徒に高ければ、誰とてそを惡しざまに言はぬはなく、誰とて心を打開きて交るものなし。先年養子に財の半を費されたるに懲りて、最早死ぬまで人の手にかゝるまじと口癖のやうに言ひ居れり。前なる長屋には足輕、御徒士などの零落したるもの住みて、その向ひなる御厩なりし跡には、その別當なりし人の一族、あはれにしがなき世をば送れり。只この中に、零落の氣のみち／＼たる中に、限りなき異彩を放ちたる家一つあり。そはわが家のすぐ筋向なる、黒塀を以て圍まれたる一軒の大家にて、六才ごとに足利の市場に織物を運び出せる機屋なるが、この主人の先代は、仲間より成り上りたる、極めて輕きものゝよしにて、母上などはその肥りたる老妻(今代の老隠居)を、お園／＼と呼捨てに、いろ／＼なる用事を吩咐し事さへありといへり。今の主人は其頃疊も敷かぬ藁の上に生立ちたるが、間もなく機屋に年季奉公に遣られ、そこに辛棒したる甲斐は、榮えたるものゝ衰へたる今に及びて、かへりて見事なる花を開くに至りしなりき。新しきわが家に移りたる初の日に、その黒塀の傍を過ぎんとして、われは其家の大なる赤斑の日本犬に吠え立てられて、聲を擧げて泣きたりしが、あくる日は早くも已にその家のわ

れより一歳下なる兼太郎といへる男の子と親みて、その赤斑の犬を、恐しとも思はで撫でやりぬ。この家には猶おのれの遊び仲間と爲るべき男女の小童いと多くて、始めて訪ひし時より、我は友の多きを嬉しと思ひぬ。われより三つほど年上の娘の子は、名をお秀といひて、あたりに珍しきほど美しく光ある子なりき。お町といへるは、眼細く髪薄く、お雪といへるは、額高く色黒かりき。その他敏二といへる泣蟲の腕白の男の子もありて、その一室の賑かなることまことに譬へんにもものなかりき。われは移りし次の日よりこの子供等と飯事して遊びぬ。

其他このあたりは子供の多きところにて、新たにわが移轉し來りしを珍らしと思ひてか、ぞろ／＼とわが周圍を取巻きて、頻りにわれとあそばんとしつ。われも友の多きを嬉しく、やがて其中の二人三人と親しくなりて、翌日は早くもその子供等と伴立ちて學校に上りぬ。

事も無き片田舎にありては、昨日も今日と同じく、今年も昨年に均しくて、四年五年は只々夢の中にぞ過ぎ行きたる。われは老いたる祖父と涙もろき母の手とに養はれて、楫を絶えたる孤舟の何處ともなぐたよふごとく、いと心細く日を送りぬ。思ふに、わが一生の中、この四五年の間こそは、尤も穩かに尤も事なき時代にてありたるならめ。われはいろ／＼と其時を追懐すれど、わが記憶はいと朧ろ氣にて、よくその當時を記す能はず。

只この間にわが遊戯は飯事より根木ねぎにかはり、根木より獨樂にかはり、獨樂よりめんこ、水泳、凧に

と進み行きぬ。夏の日の行水のさまのみは、不思議にも明かにわが小さき腦裏に印し居れるは、あはれいかなる聯想にかあらん。われは學校より歸り來るや否、いつも母上に白く長き紙袋を篠竹の尖頭に結び付けて貰ひ、皆布の襦袢一つになりて、暑き日影のきら／＼と堪へ難き田舎道を、其處此處と一廻りすれば、日暮し、蛸ひんなどの蟬は、わが小さき袋に満ちて、最早容るべき餘地もあらぬ程になるに、一先大なる籠に入ればやと、急ぎて家に歸り來れば、その頃いつも祖父君は、裏の栗の大樹の陰なる土籠の前に、芋蟲のごとく座りて、頻りに行水の湯を沸して居たまふを常としたるが、猶遊びたくて堪らぬ我を引とめて、無理に行水を使はせたまひき。思へば今も眼に見ゆるやうにぞ思はる。日影至らぬ椽側の涼しき處には、母上頻りに糸を繰り給ひて、その喧しき音はわが頭上なる蟬の音と相交り、や／＼傾きかけし日影は、斜に深緑の中より透りて、傍なる玉蜀黍のがさ／＼と風にそよげる間に、われは大なる盥に仰向けになりて、行水をぼちや／＼させながら、雲も無き高き青き夏の空を仰ぎつゝ、いろ／＼と空の事などを想像しぬ。やがて最早よき頃なりと思へば、母上は糸繰の手をとめて、下り來て、身をそこ／＼と洗ひ下され、あがり湯をさあと一つ浴せかけて後、小脇にか／＼へて、坊は重くなりたりなど言ひつゝ、涼しき椽側へと連れて行き給ひぬ。

その頃われは下等八級より已に三たび試験を経て五級の甲組に編入せられて居たりき。試験はいつも成績良くて、免狀の外に、褒狀一枚と書籍二三冊を得ぬ事なかりき。あまりにこの子は性良ければ、も

しや若くて逝くやうなる事はありはせぬかと、慈愛深き母の心は、良きにも取越苦勞は絶えずして、いかなれば其方はかく弱々しきにや、いかなればかの兼ちやんのやうに、丈夫らしくならぬにや。今よりかく色白く弱々しくしては、行末いかになり行くやらんと、氣遣はしげに常に言ひ給ひぬ。われは幼心にも、母の心を慰めんと思ひて、おのれは行末はゑらきものになるべき事、母様に安心させ申すべきといふ事など、年にはませたる事の數々を、小き智慧加へて言ひ出でぬ。それを頼もしげに母上は聞きたまひて、後には引寄せて、可愛ゆしとのたまひて、頬を痛きほど接吻したまひぬ。浮草のたより難きわが性質と知り給はで、一意に力に爲たまひし母の心の悲しさよ。

われは近所の子供等と共に昔の城趾に遊びに行きぬ。昔は家屋隙間なく立ならびて、御堀の松の大樹には、鶴幾羽となく來り遊び、長刀を挟みたる武士、御下け髪に結びたる美しき宮女など、絶間なく往來したりといへど、今は残りなく荒れ果て、晝も狐狸の竄伏する程草深く、まことに淋しき淺茅が原となり果てたりき。われ等は竹の子採りに、茶莢採りに、後には鈴蟲捕りに其處に行きぬ。ことに茶莢採りは最も我等の樂しとせる處にて、そは本丸と二の丸との境の土手の上なりき。其處には三四本の茶莢の大樹ありて、秋は一面に赤き實熟して、夕日の影のそれに匂ひ渡れるさま、いと美し。されど十歳ほどの小兒の身としては、その低き隄に上るにも、その刺多き幹にのぼるにも一方ならざる困難を感じたりき。されば我は我より二つ程年上なる鐵といふ子が、誰より先に其處にのぼりて、誰より多くそ

の實を獲ることを、いかに羨しとは思ひたりけん。我も一日も早く大きくなりて、渠のごとく自由に樹の上のぼり得て、そのうまき茶莢の實を得んとは願ひたりけん。かくてわれ等は一しきりその實を探れば、やがて幽霊出でぬとか、蛇の大なるものを見たりとか、年長なる一番多く採りたるものより、先囃し立て、一目散にその暗く物凄き隄を走り下るを常となしぬ。われはいつもこの恐嚇におどろかされて、只三つ四つ實を探たるのみにて、隄を走り下りたる事度々なりき。さて本丸の破れたる門を出づるまでは、足を留めずにひた走りに走りつゝ、漸く二の丸の芝草の美しく叢生したる處に來りて、一齊に足を留め、その柔かなる草の上に横になりて、袂より採りて來りたる茶莢の實を出して食ひぬ。われ等は本丸には幽霊住めりと聞きて、此上なく恐しき處と思ひたるなり。あはれその草の上にて食ひし茶莢の實のいかに旨かりしよ。

されどいつも嚇されて充分にその旨き實を探る事能はぬを常に恨とせし我は、ある日唯一人其處へと思ひ立ちて行きぬ。もし幽霊の出でたらばいかにせんと、限りなく恐しく思はぬにはあらねども、茶莢の實の旨きを思へば、殆ど唾わきて堪へ難かりき。我は朋友に見出されぬやう、裏山傳ひに、こそくと二の丸に出で、橋を渡りて、本丸へと入らんとせしが、何故ともなく、俄に恐しくなりて立留りぬ。

今こそ焼け失せてその家の跡も無くなりたれ、昔はこの本丸に、千疊敷のひろきく室ありて、その

片隅なる古き駕籠よりは、絶えず血汐滴りたりといへり。又昔不義をして御手討になりし奥女中のその儘埋められたる跡もありといへり。と思へば、小さき身にはぞく／＼と寒きさら／＼と疣生じて、いかにしてもこれより一步先に足を踏入るべき心地せざりき。されど赤き茱萸の實！ 旨き茱萸の實！ われは思切りて、本丸の中に走り入りぬ。されど恐しければ、傍目も觸らず、只々一散にその隄の上へとのぼりしが、最初の茱萸の樹は已に大方採り盡されて、赤き實の梢に残れるはいと少なかりき。詮方なければ、我は深き草村を分けて、それより十歩ほど奥なる第二の茱萸樹の方へと向ひぬ。此處はさま／＼の樹木、晝も小暗きばかりに茂り合ひて、よく見れば、下には黒き物妻き堀の埋残されたる水、蘆、蒲、篠竹などの人の肩も没するほど高く深く繁りたる間より微かにちらと認められぬ。第二の樹は、その黒き水に臨みたる阪に、横に廣く枝をさし出したるなるが、此處には子供も至らずして、赤き實は枝ゝに、採りては食ひ採りては食ひぬ。稍ありて、それにも満足したれば、こたびは母上に持ちて行きて進ぜばやと、袂の中に採りためぬ。

ふとがさ／＼と木の撓み草の鳴る音！

はつとして、もしや幽靈にては無きかと、身を小さくしてあたりを見たれど、それらしき物もなし。ほつと呼吸して、又採り始むれば、またもがさ／＼と木の鳴る音！ 怪しやと思ひし時、我はわが隣の

第三なる茱萸の樹に、恐しき變化のものゝ形を認めて、驚きて、あつと言ひて、そのまゝ樹より落ちんとしぬ。さらぬだに恐ろしく／＼と思へる幼きわが心の氣も絶えんばかりに驚きたるも理なきにあらじ。わが隣の樹の上には、白き衣着たる、金色の眼の輝きたる、恐しき變化、端然として登り居るにあらざるや。

太き幹にしつかりと攫まりて、辛うじて樹より落る事を免れたるが、この上は一刻も早く遁るゝより外詮なしと思ひ定めて、兩股を摩剝すだにも頓着せず、一生懸命に蒼くなりて、する／＼と茱萸の樹を滑り下りつ。

『芳ちゃん、芳ちゃん』

變化のものはわが名を呼べり。

愈恐しく、足もすくみて前に出でずなりぬ。變化のものも、同じく樹を下りて、今や我を食はん爲めに、わが傍に來りぬと思ひて、頭を擡げしに、あゝそは變化のものにはあらで、わが後に立てるは、機屋の兼ちやんの姿なりき。渠も我と同じき感を抱きて、先程よりこの茱萸の實を採りに來て居たるなりき。われ等はいかに喜びけん、いかに力づよしと思ひけん。かくて二人は猶久しくその黒き水の畔にありて、小さき袂に半ほどの赤き旨き實を採りためたるが、これよりは本丸を恐しと思ふ念は消えて、いつも二人して日毎に此處に茱萸採に來ぬ。否それの無くなりたる後も、他の子供等の本丸を恐しとて一

歩も足を踏み入れざるに引かへて、われ等は二人して、そここゝといろ／＼なるものを尋ねて遊びぬ。われ等は本丸の主人となりぬ。

本丸には、他の子供等の知らぬおもしろき物のいかに多かりしよ。淡竹の多く生ふる藪、木覆盆子の多く熟せる處、菖蒲の美しく咲きにほふ沼、柴栗の拾ひ切れぬほど落つる廣地、鮎の大なるもの住める黒き水など、皆われ等二人の占領する所のものとなりぬ。且遊ぶに適したるところも少なからぬに、春の麗かなる休暇の日などには、われ等は二人して其處に行きて、いろ／＼なる事して遊びぬ。その事を母上に語れば、母上もまたわが爲めに御城の事御本丸の事などをいろ／＼と面白く語り聞かせ給ひぬ。昔は御本丸には、槍以上の身分にても、滅多に入る事は出来ざりしにて、母上なども、御操練の時、一度許されて拜見したるのみなりといへり。その頃は、母上も未だわが家にお嫁に來たまはぬ以前にて、白粉を傳けて、美しく飾りたてゝ行きたるよしなり。其時見たる御本丸の本御殿の美しかりし事は、今も眼に附きて忘れずと語り給へり。立派なる天主の櫓は、高く碧霄を凌ぎて聳え、年舊りたる宮殿は、長き廊より長き廊へと通じて、金色の日に耀けるさま、殆ど眼も眩むばかりなりしとか。廣場には、幾百と知れぬ下士、足輕ども嚴かに東西に立わかれて、家老の太田様と番頭の長谷川様とは、白き馬に乗りて、陣羽織を着流したるまゝ、凛々しく、それを指揮したまひぬ。その様はまことに其方にも見せたまひぬ。大殿様は向ひの本陣に、馬上にて御覽遊ばし、若殿様は美しき御姿して、これも同じく白斑の三才駒を深く彼方此方に走らせ給へり。御廊下には、御臺様を始め、奥女中の數々、美しく装ひて、綺羅星のごとく並び居て、まことに畫にもあるまじき奇觀なりき。其時其方の父上は、弓術の達人として選び出され、藩中千二百人中、誰も射貫くこと能はぬ金の二寸的を、物の見事に打破り給へり。その時のさまはよく覺えたるが、父上は肩衣を半に折りて、黒く逞しき馬を乗りかへして、黙したる感嘆の聲の中を、徐々と元の溜りに乗り返したまひき。まことにかの時こそ、父上の一生の晴れとも花とも言ふべき時なりしならめと、夢見勝ちなるやさしき眼色して、母上はいと徐かに語り給ひぬ。

豪き父上かなと我も思ひぬ。

其話を聞きたる翌日、われはいつもの如く本丸に遊びに行きしが、今までよりは、更に懐しき心地して、彼方此方と、隄の上などにのぼり、父上の功名したまひし處は此處あたりなるべきかなど、草深き茅原の中をさまよひ歩きぬ。如何なればさる美しく立派なる宮殿のかゝる荒れたる草原とは爲りたりけん、いかなれば殿様は住まずなりて、御城はかく荒れ果つるやうになりたりけん。かく思ひしが、ふと父上の立派なる武士なりし事を思ひ出して、何故にまた父上はおのれと母上とを二人残して、早く早く死し給ひしか。我は堪へ難く悲しくなりて、昔の御殿の礎の跡なりといへる、深き草原の中の大なる石に腰かけて、はげしく泣きぬ。

草原には晝顔の花秋の日影の下にあはれけに小さく咲けり。

四

わが家に訪ひ来る人は多からず。親戚の此處に残れるものは、年老いたる伯母と、遠き縁つゞきの貧しき一族の人々とのみなりき。伯母は流石にをりくは尋ね來て、美しき桃、おもしろき草双紙など、われに與ふる事あるに、我はよき伯母様なりと思ひて、弓のやうに曲りたる腰を、さぞつらからんと思ひ遣りぬ。いろくなる事をさも面白けに語り出で、年には似ぬ壯健なる元氣なる老婆なりしが、いつも我を膝の上に抱きて、芳や芳やと可愛がりて、遠けれど青龍様の御祭には、町の伯母様の家にも遊びに來よといひぬ。母上は年毎にわれを伴ひてその町の伯母の家に行くべきことを我に約しながら、一度だに其約を踏まざりき。御祭は山車出で、賑かなるよしなるを……と、伯母様の來たまふ毎に、われはその面白かるべき御祭を思出して、いつもく母上に迫りぬ。來年の御祭には必ず伴ひて行くべしと、母上確く誓ひ給ふ。

その頃前なる機屋に、東京より年季にて雇はれたる、お初といへる美しき娘居たりき。年は十八歳なるが不幸なるもの、由にて、父母の爲に、年季の金を借りて、遠くこの田舎に奉公に來りしなりといへり。母上はその娘の身の上をあはれみて、いろくとやさしき言葉かけ給ひしかば、娘も習へる浮草の縋るべき岸を得たるが如く、暇ある毎にわが家に來て、さまざまとおのが身の不幸の數々を母上に語り

ぬ。われもやがてこの娘と親しくなりしが、東京といふ思想は、實にこの娘のやさしき口より吹き込まれたるなりき。娘は語りけるやう、東京はいかに好き所ならん。そこには十階も高く築きおこされたる大家あり。そこには十分時間に一里を走り行く汽車といふ珍しき早き車もあり。そこには一時間毎に鐘のごとく鳴り響く大時計もあり。三階、四階、この田舎のやうなる小き低き家は、見たしとて一軒だに無し。淺草の観音、上野の動物園、それはくいかに賑はしき事なるべき。田舎者など、うかと歩まば、忽地路を失ひて、歸る事能はぬやうになるべし。

われは只聞惚れぬ。

東京とはいかなる所ならんと、我は其後小き胸に空想を畫き初めぬ。母上は言ひ給ひき、我も曾て稚き時、その賑はしき東京に住みたりきと。そはまことなるべきか。もしわれ一たび住みたらば……何故にその賑はしきよき所を去りて、この田舎には歸り來りし。母上は我を子供と思ひて、をりく虚言をつく事あれば、これもまことなるや否や料られずとわれは思ひぬ。われは幼き心に、東京とは絶えず花の咲ける極樂のごとき樂しき處ならんと思ひぬ。

されどその極樂の如き東京にも、娘の如き不幸なる者はありて、さまざまの難儀さまざまの悲しき眼に逢ひたりといへるは何故ならん。母上は娘の泣きつゝ語るを聞く毎に、いつもそを慰めて、されどあしき心をば持ちたまふな。いかなる難儀に出逢ひたりとて、心さへ正しく、行だに誤まらざらんには、

必ず神様の来てまもりて下さるものなればと、しみじみと言ひ給ひぬ。娘は悲しさに堪かねて、おろおろと泣き居たりき。御身などはと、母上は言葉をつぎて、まだ年若き身の、嘆くにも及ばぬ事なり。世の中には、まだく悲しく辛き事幾らもあらんに……。されど世の常ならんには、親の恵の下に居て、婚禮の準備など何故と整ふべき年頃なるに、人の家に雇れて、慈悲も情もなく追ひ使はるゝ悲しさは、まことに思ひ遣るにも餘なきには侍らず。さりながら、これも運なれば、せめては父母の爲めになりたるを嬉しと思ひて……。母の聲は溢れ来る涙に碍へられぬ。娘はいよく泣崩折れて打伏しぬ。われも母の言葉のあまりに低く、あまりに悲しきに、意味の何たるをも知らずに、只々悲しくなりて、涙は椽側を濕すほどにあふれ落ちぬ。

悲しきは優しき低き母上の聲なりき。

あふれ落ちたる涙もて、のの字はの字など椽側に書きつゝ、低頭きてわれの居たるに、娘は涙ながらもそを見たりと覺しく、不意に、この子は貫泣をして居れるにや。可愛き子といひつゝ、突如われを抱きて、わが右の頬にあつき接吻を施しぬ。われは再び悲しくなりて愈泣きぬ。

此時より我は益娘と親しくなりぬ。

機屋の主婦は、母上より三歳ほど年下にて、姿のやゝ肥りたる、顔の至極圓滿なる、極めてやさしき良き女なるが、母とは昔よりよく知りて、珍らしきものゝ出来たる時は、互に贈答する程の親しき間柄

なりき。我は母上に伴れて、幾度となく其家に据風呂の湯を貰ひに行きぬ。月の夜など、われは風呂場より立のぼる烟の、おもしろく竹村に靡きわたるを見つゝ、心地よき浴槽に身を沈めながら、釜前に火を吹けるその美しき不幸なる娘が母上にいろく憐れなる物語を語り出づるを聞きて、可愛想なる娘よと思ひし事幾度なりけん。

娘は東京の繁華なる處に生ひ立ちて、姿といひ形といひ、いづれも華奢なる趣を備へたれば、家に雇はれたる若者を始め、近所の男共、皆かれのこの田舎に來りたるを、掃溜に鶴の下りたらんやうにも思ひて、彼方此方より、袖を曳き手を握るもの多かりしと、後にわれは母上より聞きぬ。我は次第に親しく馴染み行くにつれて、やさしき姉一人俄に得たらんやうなる心地して、學校より歸れば、いつも娘の働き居れる處に行き、おもしろき東京の話など迫りて聞きぬ。

されど娘の此處に留り居たるは、長き間にてはあらざりき。五月の始めに此處に來て、十一月の末には、早くもその賑かなる東京へと歸り行きぬ。あはれその別れの悲しき、われは今も忘れず。そは夷講の翌日の事なりしが、娘はあわたしくわが家に走り來て、伯母様と聲高く呼びぬ。何事かと出て聞けば、今東京の親より迎への者來て、明日は伴はれて歸り行かねばならぬ身とはなりぬ。東京に歸りて、又いかに悲しき眼に逢ふならん。必ず身を賣らるゝに相違なければとて、袖を掩ひてひた泣に泣きぬ。そのやうなる事なしと母上は慰めたれど甲斐なかりき。

あはれかゝる氣の毒なる不幸なる娘はあらじと、母上を始め、誰も彼も皆言ひぬ。器量美しければ、親も些ばかりの年季の金にては、満足する事は出来ぬなるべし。こたび迎ひに來りたる男も、娘の親戚のものにはあらぬ三百代言らしき見も知らぬ男にて、年季の残額は、いつにても拂ふべしとさへ言へば、歸らば必ず吉原あたりに賣らるゝに相違なかるべし。性質やさしく姿美しく、人にも羨まるゝよき娘を持ちながら、之をよき事に、吉原に賣らんとする親の心の鬼々しさよ。いかに難儀したりとて、われ等ならば、さる無慈悲なる事はすまじきにと、田舎人の質朴なる、いづれもあはれなる事に評し合ひぬ。夕暮近く、娘に逢はゞやと、其家に行きて見しに、娘はいつものごとく、風呂の釜前にて、頻りに燃えぬ火を吹きて居たり。烟くつと言ひつゝ擡けし美しき顔には、涙の傳ひし跡明かに残りたりき。明日はいかにしても東京にと、人なつかしく抱きつきしに、可愛ゆき子やと、又もわが額に接吻して、涙を瀧のごとくに流しつ。

いかにしても歸るにや。再び問へど猶答へず、三たび問ひても猶答へず、只々悲しげに涙を流すのみなりしが、稍ありて、可愛ゆき子なれば、成長くなるまで、姉様の事を忘れずにて下され。姉様も必ず覺え居て、御身が成長く立派になりたる時、また再び逢ふべきに……と言ひしが、娘の涙は又一しきり瀧の如く、冷たくわが頬を傳ひて落ちぬ。

我も亦悲しくて泣く。

かゝるやさしき人を、いかなれば吉原などに賣らんとはするならんと、涙の手に抱かれながら、われはじつと、黒眼勝の、丸顔の、色白き娘の顔を眺め居たり。傍なる竹村の上には、微かなる夕月の影さしそひて、裏の栗の大樹には、潮の寄するやうなる木枯の風吹騒ぎ、塀の外を落葉のがさくゝとところがり行くなど、あはれに淋しき冬の初の夜なりき。

「まためそく」と、吠顔して居れるか……。火の燃えぬに氣が附かぬか。誰だ！ 其處に居るは……」
烈しく太く頑固なる聲に罵られて、我ははつとして心附きしが、わが前なる暗き處に、この家の肥りたる恐しき隠居老婆の、三途河の奪衣婆のごとく、ぬつと立ちて居れるを認めて、驚きて、娘の止むる手をも振ほどきて、われは一散に黒塀の向ひの門を走り出でぬ。

あくる朝、わがまだ眠れる中に、娘は暇乞に來て、迎への人と共に、東京に歸り行きたりと、母上は語り給ひぬ。われは悲しさに、二三日の間は、娘の事をのみ言ひて、久しく忘るゝ事能はざりき。今も猶その姿鮮にわが眼の底に残りて、をりゝ逢まほしと思ふ事なきにあらず。あはれ不幸なる美しき娘よ。爾の春はいかさまにか過ぎし。さそふ嵐のまゝに、紅みだれ緑濕へる悲しき境に淪みたるか。將又頼みある陰にのどかなる花の盛を盡して散りたるか。

かゝる單調なる境遇の中に、わが稚き時はいと穩かにいと靜かに過ぎ行きたるなり。われは何事をか思ひ出して、わが幼き追懷を彩色せばやと思ひ煩へど、色も香も無きは、實にわが半世の歴史なるをい

かにかせん。われは唯有のまゝに、偽り飾るところなくして、此處に描き出さんのみ。かくて一年二年は、電のごとくに過ぎて、われは早くも十四歳になりぬ。めんこ、根木、紙鳶などの遊戯期は漸く盡きて、わが前には勉強、奮發、立志などの眞面目なる問題、やうやく迫り來らんとせり。されど少年の遊を好める性は、容易にその幼時の樂を脱して、直ちにその新しき世界に移り行く事能はざりき。われは暫しが間は、丈高く姿熟したる身を群童の中に投じつゝ、餓鬼大將の惡名を負ひながら、頻りにさまざまの惡戯に耽りき。後には小兒を多く伴ひて、田畦の間の里川を獵りつゝ、鮒、鱒、鯰などを釣り且網するに至りぬ。夏の暑き日など、終日長く堰口の深く淺き處に、小兒を集めて、傍なる畑に熟したる赤き桃の實を盗み食ひつゝ、その濁りたる里川に游泳するをわれはいかに樂しと思ひけむ。ある日などは、桃を採らんとせし處を、その持主に認められて、裸體にて逃れ歸りたる事さへありたりき。あはれ十歳頃より始たる惡戯は益募りて、色は日に焼けて黒く、衣は土に汚れて醜く、昔かつて母上がかく弱くかく色白くてはと、心づかひし給ひし同じ童なりとは、いかにしても思はれぬやうになりしが、母上の宣ふ事も、祖父君の罵り給ふ事も、更に少しも耳にはかけず、學校より歸るや否、包を椽側に投り出したるまゝ、算術を復習せよと、嚴しく迫らるゝ祖父君に、憎々しくも長き舌を示して、一目散にわが好める遊戯に携はるを常となしぬ。

『惡戯なる兒になりしものかな』

と、近鄰皆眼を欷てつ。

『其方は母の言ふ事の解らぬにや。其方は子一人母一人の身なることを忘れたるにや。其方の父は、國の爲めに戰死したる名譽ある軍人なるを忘れたるか。其方はいかにしても父の志を襲ぎて、立派なる名高き人にならねばならぬ身なる事を忘れたるか。母を女と思ひて、馬鹿にして、その言ふ事を聞かざれば、母は其方を殺して、自害して、亡き父君に、其方のやうなるものを生みたるを、お謝び申すべきが、それにて好きか、返事を聞かせよ。』

と、平生やさしとのみ思ひし母上の、ある夜われをその膝元に呼寄せて、凜としたる聲にて、かく烈しき言葉を懸け給ひたる時は、我も流石に胸の震ゆるを覺えたれど、翌日は早くも忘れて、子供一大隊ほど引つれて又も堰口に水泳に行きぬ。

さりながらこの少時の惡戯は、身體の發達に伴ひて來りたる一時の現象に過ぎざりき。われは思ふ。烈しく狂へる戀といふものも、又この一時の狂熱に似たるものならんか。あはれ人の心は、海岸の濤の、ある時は狂ひある時は靜まるさまにも似たらんか。

われは其頃頻りに釣魚に心を傾けて、田間の堀切、村盡れの里川など、あちこちと、殆ど隈なく獵り盡しぬ。されど何處も心に叶ふ程の獲物なきに、よき所はなきかと、いろ／＼思をめぐらしたるが、ふと古城趾の残りたる黒き水を思ひ出して、ある日釣竿を携へて、おのれ唯一人、密にその芦の繁みに身

を没しぬ。

かゝる静けきさびしき釣魚に適したる所はあらざるべし。堀の残りたるは、大凡二町ばかりの長さなるが、四面よりは蒲、葦、萱など人肩を没するばかり高く深く生茂りて、向ふは堤、左右は藪の、誰とて此處に人の隠れて釣魚を爲せりと心附くものはあらぬなるべし。まして幾年來人の來りて釣りたる者も無き事とて、鯉、鮒、鯰などの小魚、その中に満ちくゝて、そのおもしろき事、言はん方なかりき。われは好き所見出したりと喜びて、日曜にはいつも來りて、芦深く合歡の花美しく咲匂へる樹の陰に、長き竿を下して、黒き水の上に叢生する浮萍、河骨などの絶間に、一つの浮標の、ふわくゝと漂よぶを、いかに楽しとは見詰めたりけむ。

あはれわが十四歳より十六歳に跨れる悪戯期の餘勢は、實にこの静かなる黒水の畔にて收りたるなり。われは黒き水に夕日の絶えくゝなる影のいと微かにうつれるを見て、いつも深き空想に耽らざる事能はざりき。されどこの空想は、今迄のとはいたく異りて、眞面目なる中に、烈しき狂熱を加へたるものに庶幾かりき。今まではわが幼き心、いつも外にのみ動きて、物を觀物に感ずるにつけても、只々淺く烈しかりしが、今はその心内に開きて、無限のなつかしさと楽しさと悲しさと喜ばしさを、小さき胸に感ずるやうになりぬ。

あはれ黒水の畔の小さき影！

われは今にしてこれを思へば、殆ど世を隔てたるやうなる、我にはあらぬやうなる心地して堪へ難し。われはいかにしてこの記念多き黒水の畔なるわが小さき影を描き出さん。晝ならずばそをうつす能はざるべきか。詩ならではそをうたふ事能はざるべきか。小さき影——頭を五分に刈りて、白^{しろがす}総の汚れたるを着、手に一本の釣竿を携へ、脚下の水に一つの荅^か荅^たを置き、芦荻の深きところに半身を没しながら、じつと黒き水の上を見詰めたる小さき影は、このさびしき處にて、いかにさまざまなる事を思ひたりけむ。或は昔の英雄の如く立派なる事業を建て、或は功成り名遂けて錦衣故郷に歸り、或は母の喜ぶ顔を見、或は夢にも似たる甚しき空想を實行するなど、殆ど止る所を知らざりき。否一步進んで、その小さき影は、手を振り、足を躍らせぬ。渠は獨語せり、われは參議にならんと。渠は眩けり、われ參議にならば、馬車に駕して、この故郷に歸り來らんと。かくてその小さき影は、空想の上に空想を築き、想像の上に想像を重ねて、魚の頻りに小さき赤き浮標を動かすをも知らず、蜻蛉の一羽何處ともなく飛び來て、ふわと釣竿の尖頭にとまれるをも知らず、鶺鴒の羽音低く、刻むやうに鳴きて、黒き水の上を過ぎ行くをも知らず、甚しきは、水的一端に微かに移りたる夕日の影いつか消えて消えて消え果つるをも知らざりき。

この一箇の空想兒！

實にこの空想こそわが次第に悪戯なる小兒の生活を脱し行く動機となりたるものにて、空想を逞う

すれば、程、われは學問に熱中せねばならずなりぬ。此時、われは高等科四年生にて、翌年の春は、久しくたづさはり來りたる學校を卒業すべき身なりしが、學校にての成績は、極めて良く、いつも一二の席を争ひて、第三次とまで下りたる事はなかりき。ことに、作文に妙を得たれば、行末は文章家にならんなど、教員皆密に評し合へり。其外、われは二年程前より、老いたる郷先生の家塾にかよひて、四書五經を始めとして、一通りの漢籍の素讀を學びき。老いたる郷先生は、ある時わが親戚に當るものに、わが學業の進歩の速かなる事を言ひ出で、平山の子息ほど、性の好く、記憶のすぐれたるものがあるまじ。今までに既に幾人追ひ越したるか知れずと、賞賛口を措かざりしとか。われはそれを耳にして、うれしと思ひて、それよりは猶一心に學を勵みたれば、やがて文章軌範、八家文などの難かしきをも、豎板に水を流したらん如く讀み了りて、今は郷黨にもそれを藏する家少しといふ史記通鑑などを郷先生の文庫より借りて讀みぬ。

この郷先生の家塾のさまも、亦わがふる郷に於るおもしろき記念の一たるを失はざるべし。その家は城趾の最も隅なる、元おのれの家のありたる沼の畔にありて、後には大なるおもしろき形したる黄楊の樹一本あり。その枝の叢生したる股の凹處に小き祠を安んじたり。われは成長くなりて後も、その祭神の何の神たるを知らざりき。郷先生といへるは、年齢大凡七十以上とも覺しき、白髯美き老儒にして、少時江戸に出で、安積良齊の塾に遊び、學成りて後は、藩主の侍講になりたるほどの博學能文の一耆

宿なりといへり。姿は威ある中に何處となくやさしき處ありて、隆き鼻、長き額など、いづれも篤學らしき相を充分に備へたりき。ことに、朗々として誦し出す聲の亮かなる、その聲を聞けば、誰も自から嚴なるあるものを感じぬはなしとかや。學童の其處に通へるもの大抵三四十名、皆われと同郷同學の者のみなるが、われ等は小學校の授業終るや否、早く教りて、早く歸りて、早く遊ばせよと、先を争ひて、其塾に來り、われ先に、包をその學室に置かんと競ひぬ。(包を早く置きたるもの先教を受く)されど、授業の始を午後三時と定めたれば、われ等はそれの始まるまで裏の黄楊の樹にのぼりて、鬼事などして遊ぶを常となしぬ。あはれこの黄楊の樹の上の遊のいかに面白かりし事よ。われ等は互に高きに誇り、互に木のぼりの技の巧なるに誇りつゝ、下より見れば危ふしと思はるゝやうなる如き枝をさながら猿のわたるが如く、極めて巧に走り歩きぬ。中にも最も名聲を博したるもの五人ありて、われも亦その一人なりき。忠といへる背の低き百石取の悪戯子息は、學問はいたく劣りたれど、この木のぼりの術に於ては、遙かにわれより上に出でき。されどわれは他の朋友のごとく、鬼事よりも、寧ろその高き處にのぼりて、そこより遙かに美しき沼の景色を見ることを好みぬ。わが天然を好むの情は、この一隅に養はれたるもの多しと、後に我は思ひ知りぬ。それにしても、この一隅はいかにうつくしかりけむ。芦荻と松原とを以て圍れたる細長き沼は、遮るものなくあらはれ渡りて、躑躅が丘の向ふに、筑波の双峯は畫けるところとくその翠巒をあらはしたり。秋の夕暮など、我は藍より碧なる沼の上に、夕日の影のさしそひた

るを、譬へんやうもなく美しと思ひて、友なる少年畫家に、それを畫きて呉れよと言ひたる事ありしを、今も明かに記憶せり。兎角して、時來れば、老先生は椽側の處より首さし出して、『誰公來やれ!』と、先に來りたるもの、名を呼ぶ……。やがて喧しき啾唔の聲、夕日の影の黄楊の梢に消ゆる頃まで、沼の畔なる一村の綠樹の中に高く聞えぬ。

多き學友の中にも、最も意氣相投じたるもの五人ありて、皆われと同じく、この郷先生の許に通ひぬ。一人は野村鎮太郎といひて、學校にての首席は、いつもこの男に占められたるが、尤も數學に長けて、性質はいと快活なりき。一人は櫻井重太郎といひて、性質いとやさしく、言葉も荒々しからず、わが五人の中にて、最も温厚の君子と稱せられき。一人はわが前なる機屋の長子にして、學問はやゝ前の二人のものに劣りたれど、性質機智ありて、萬事に拔目なく、大人と會談しても、更に臆したる色を顯はさざるを以てわが黨の中に重んぜられぬ。一人は林幸太郎といへる繪畫に工みなる少年なるが、誰もその巧なる畫を見れば、行末はゑらき畫工にならんと驚かぬはなかりき。性質はやゝ沈み勝なれど、臆病なる處ありて、いとやさしかりき。これに、活潑らしくしてしかも活潑ならざる大村と、鋭敏らしからずして鋭敏なる我とを加へて、われ等の所謂六人黨なるものは組織せられぬ。夥伴なぐさに外されたる少年共は、われ等のかく伴れ立ちて陸じく遊べるを見て、半は嫉み半は羨みて、或は六人惡漢といひ、六人馬鹿といひ、果ては六人太郎(六人とも皆太郎といひたれば)といふ面白き混名かたなをさへ呼ばるゝに至りぬ。

されどこの『六人太郎』なるもの、少年仲間に於る勢力は、まことに限りなきものなりき。四年生の上席は、皆この六人の者に占領せられ、運動場裏のチャンピオンも、亦この仲間なかまに奪取られ、教員の信用も、亦無限に立ちすぐれたりき。われ等は互に相往復し、互に相議論し、互に相空想して、恰も天下有望の秀才のごとく、天下に英名を轟かさずんばやまじ、大事業を爲さずんば止まじ。君は大宰相となれ、僕は大将と爲らんと、逢ふ毎に、語る毎に、いつもそれを誓はぬこととは無かりき。これも理なり、われ等の若き胸には、限りなき望みちこめて、未來を望むの念は、雛鶴の巢の中より高き大空を望みつゝ、一刻も早く飛出さばやと願ふがごとくなれば……

それには第一に勉強せずしてはと、今まで惡戯にのみ熱中せし情は、俄にこの未來の望の上に集中して、われは久しく古本箱に埋れたりし裏の四疊半を掃除して貰ひ、其處に籠りて、一燈の影夜更くるまで、漢學、作文、數學を學びはじめぬ。母上はこれを見て、いたく喜び給ひしが、夜など、をりく倦みたらんとて、葛湯など拵へて持ちて來て呉れ給ひぬ。あはれその頃の空想! いかにもその空想の美しかりしよ。われはわが將來には、花のごとき園ありて、其處には旨き菓實みちこたりと思ひぬ。否それのみならず、その美しき將來に至る道も、砥のごとき大道にて何の苦も無くそこに至ることを得べしと思ひぬ。たどり行くわが將來の道に、險しき阪、恐しき陷阱などのあるを知るにはわが腦はあまりに

稚かりき。

かくて其年も秋になりしが、落葉風に亂れて、三冬の風物、次第に燈火親むべきの候になるに及びて、われ等は順廻りに、土曜日毎に、夜學會を開かばやと言ひ出でぬ。いづれも熱心なる賛成者のみにて、其議直に決せられたるが、先初めにおのれの家にとて、野村の言ひ出せしをそのまゝ、來る土曜日を以て、代官町なる野村の家にその初會を開く事に定めぬ。

野村の父は郡役所に奉職したれば、家の構造もいと立派にて、四邊に黒塀を取廻したる二階造なりき。その奥の六疊の一室は、其夜遅くまで燈火の影あかくかゞやきて、若々しき少年の聲、殆ど四隣を動したりき。われ等の語りしは何事なりけん。事業、奮勵、英名などの語は、幾回となくわれ等の泡を飛したる口角より洩れて、野村の高く亮えたる聲と、櫻井の靜に落付きたる聲とは、互に面白く織り交ぜられぬ。われ等は此の會を初めとして、この夜學會の長く續かんことを願ひ、來年卒業するや否、如何なる事情ありても、必ず東京に出て、學問を研ぐべきを誓ひ、名を擧げ國を益せずんば、死しても止まじと語り、殆どその興の盡くるをも知らざりき。我は猶よく記憶す、其會果て、夜も早十一時過、我は機屋の長子と共に、いろ／＼と未來の事をかたりつゝ、星の降るやうなる寒き空を仰ぎながら、望みちて、勇しくおのが家へと歸り來りし事を。

この夜學會は一年ほどつゞきて、わが家にて開きたる事も、十數度の多きに及びぬ。六人の間柄は愈親密になりて、その夜學會の席上、或は數學を研究し、或は漢籍を質問し、或は漢詩を作るなど、興いと多かりき。我と大村とは、平生いたく漢詩を好めば、好く七絶或は五絶を作り、互に楽しく唱和するを常としたるが、詩材を求むると稱して、日曜日など、いつも二人伴れ立ちて、風景よき大沼の畔に逍遙ひ、或は善延寺畔の古松の上に攀ぢ登りて、荻荻の千竿風に靡けるさまを賞し、或は躑躅が丘の亭上に立ちて、遠く古城趾の跡を弔ひぬ。ある日われは古城趾の本丸の隄に、最も沼を見るに適したる處あるを發見して、これに能見堤と言へる名稱を附し、詩を作り文を記し、一行六人を悉く伴ひ出して、その草深き木枯の寒き堤の上に立たしめて、久しく冬枯の沼の景色を眺めしめぬ。それにも猶飽足らずに、われは大村と謀りて、兼ねて作り置きたる大沼に關したる二人の詩四五十首を集めて、これを清く寫しかへて、大沼四時雜詠といふ小冊子を作り、林に托して、その初に、沼の四季の風景を畫かしめき。その畫皆よく出來て、見る人二人の詩にも増してめでかへりしが、我は其秋の躑躅丘の景を、殊に巧に畫かれたりと思ひぬ。思へ、人々、定價貳拾錢といふ印の親戚にありたるを借り來て、其小冊子の完尾に捺したるわが得意のいかなりしかを。兎角する間に、年は暮れて春とはなりぬ。

五

三月の初なりきと覺ゆ。我はある日機屋の長子より、怪しき一封の手書を受取りぬ。秘密なれば人の

あらぬ處にて開封して呉れよとの言葉を眞に受けて、裏山に行きて、その堇の花の浮出しにされたる美しき封を開きしが、あまりの事に、我は茫然として、殆ど爲す所を知らざりき。そは渠の姉（かれの姉は今年十九歳にて、近隣にても評判の美しき少女なりき。昨年あつしの秋、さる村の豪農に嫁ぎしが、氣に叶はぬといひて、一月程経て歸り來り、それより再び處女となりぬ。われは幼き時飯事などして遊びたる朋友なりしかど、如何なる故か、心に叶はで、御轉婆なる厭なる娘と思ひき）より、われに宛てたるものにて、その中には、厭らしき艶しき事の數々を、耻しけも無く記して、末に、今宵の六時頃、城趾の隄の處に來て下され。その節色々御話すべしとて筆を結びたり。われは冷笑の情の起り來るを禁ずる事能はざりき。愚かなる少女もあるものかな。われはこれより東京に出でて、功業を建てんとする身なるものをと、一喝の下にその手書を寸斷して、更に願んとも爲さざりしが、夜、その事を思ひ出して、今頃は我をその古城趾のほとりに待ち居るならんと、何となく微笑まれぬ。あくる日、長子は我に向ひて、昨日行きて呉れざりし故、姉はわれを疑ひて、手紙を渡さざりしならんと非常に怒りぬ。今日は必ず行きて呉れ給へ。何か大切な用事ありとの事なればと、眞面目なる顔して言ひぬ。

其夜も我は行かざりき。

そのあくる日も、又そのあくる日も、立てつけに手紙を呉れたれど、我は知らぬ顔して行かんともせざりき。然るにその五日目の事なりきと覺ゆ。われは何となく微笑まるゝやうなる好奇心に驅られて、如

何なるさまして、我を待ちて居れるならんと、こつそりその古城趾の隄の處へと行きて見ぬ。おぼろなる月の夜にて、霞は薄絹をかけたるやうに天地を蔽ひ、梅花の薫そこはかとなく薫り來るなど、幼き心も何となく時めきわたるやうに覺えられぬ。望多きわが心！ われは唯春の潮の落花を載せてたぶ／＼と汀に満ちわたりたるものゝ如く、胸に震ふやうなるある私語を感じつゝ歩み行きぬ。始は先隄の陰にかくれて、何處に我を待てるかと、秘にあたりを見廻したれど、見ゆる限り、月の光のみにて、それと思ふ黒き影も見えざりき。少しく疑ひながら、一歩／＼隄の中に入りたりしが、猶その影らしきものゝ見えぬに、愈心を許し果てゝ、終には漢詩など聲低く吟じ始めぬ。然るに、ふとある樹陰に白きもの佇立ありと思ふより早く、はら／＼と走り來て、あな……と思ふ間に、わが右の袖は捕られぬ。

月は渠女の美しき顔を照したり。

霞のごとく一齊に放ちたる女の言葉は、何をか言ひ何をか語りけん、われは覺えず。われは只言ひやうにも譬へやうにも無き烈しき胸の鼓動を感じたるのみにて、振放ち突き飛して逃れんとも爲さざりき。われはあゝ遂に捕へられぬと思ひぬ。最早駄目なりと思ひぬ。明日は友人間に流傳せられて、わい／＼と聲高く囃さるゝならんと思ひぬ。あゝ何故に我は此處に來りけむ。何故に此處に來りて、かゝる苦しき悲しき眼には逢ふならむ。

少女は猶喃々と低く語りぬ。その月に照されたる白く美しき顔は、殆どわが顔と相附かんとする迄に

近きて、その柔き手は、わが小き肩に重くかゝり、島田の亂れたる後髪は、撥ぐるやうにわが兩頬を撫で、燃ゆるやうなる呼吸は、氣味悪くわが顔へと吹きかゝれり。

見上し我はこの少女を限なく美しと思ひぬ。

『嬉し！』

と言ひて、娘は物に狂ひしやうに、堅くわが身を抱き緊めぬ。我は今は何となく恐ろしき物に逢ひたるごとき心地むら／＼と起りたれば、その手を振り解きて、遁れんものと頻りと藻掻きぬ。されど少女の力は強かりき。われは只蛇に巻かれたる小兒のごとくなりき。少女は愈堅く抱き緊めつ。

『遁けたしと言ひたりとて、最早遁さじ。最早わがもの……』と獨語ちつゝ、恐ろしくなりて遁れんとする我を、益堅く抱き緊めつゝ、『かくまで思へるものを』と低く言ひぬ。われは恐ろしさに、身も世も忘れ、一生懸命に振り解き、突き飛して、手を放つや否、一散に後をも見ずして走りぬ。少女は暫く追ひ來りしやうなりしが、わが足の早きに、やがて斷念したりと覺しく、暫くしてわが振返し時は、少女の悲しげに蕭然と月光の中に立てるを認めぬ。

あくる日、長子に逢ひて、それとなく姉のさまを問ひしに、昨夜も遅く歸りて、泣きて居たりといひぬ。今朝はいかにせしかと問へば、氣分悪し／＼とて、未だ床を離れざりしとの事なり。われはやゝ心動きぬ。

それより久しき間、われは機屋の友を訪ひても、少女はその姿を見せざりき。否我を見れば、いつも其姿を隠すを常となしたりき。ある日細き路に、ゆくりなく逢ひて、我は一方ならず狼狽せしが、かれはわが方を見んともせず、かの前の夜にわれを抱きたる少女とは全く異りたる少女かと思はるゝばかりに、知らぬ振して行き過ぎぬ。それより稍程經て、少女は町の荒尾といへる大盡の子息に再び嫁せしが、これも三月ほどにて歸り來り、それよりは家の若き男と通じたりと言へる評判さへ立てられて、わが故郷を去る迄は、少女は親の家にかゝり居たりき。

幸にもその事は誰も知る人なくて過ぎしが、やがてわが卒業試験は、次第に眼前に近づき來ぬ。この頃、またわが心を動かすこと二つ起りぬ。一つはわが壯健なる祖父君の、三日ほど病みて死したる事、一つは友の櫻井が暫しとて東京の親戚に行きて居りし間に、時の顯官ながしに知られて、その保護の下に、花々しき榮達を爲さんとして、この故郷を去りたる事なり。孫を思ひ家を思へる涙多き祖父の遺言は、親一人子一人なるわれを動かすこと一方ならざりしかど、それより猶一層烈しく、わが心に反動を與へたるは、平生眼下に見たる友の、ためしにもれたる花々しき榮達なりき。人々は皆言ひぬ。かの子は大入しくして學問好きなれば、やがては知事様となりて、この故郷に歸り來るならんと。その友の顯官ながしに引上げられたるにつきての談を傳へて曰く、友は一縣の秀才として、顯官の前に引出されしに、落付きていろ／＼と學問上の談話を爲し、その質問には、流るゝごとき答を與へ、最後に白紙半切に、硯

箱を出して、何か書けと言ひしに、渠は臆する色なく、さら／＼と精神一至金石亦透といへる八字を記したるに、顯官感ずる事一方ならず、この兒將來見込ありとて、引取りて世話する事になりたるなりといへり。われも亦いかに顯官の前に出されん事を願ひたりけん。我は友よりも更に數等すぐれたる感動を與ふることを得べきにと、限りなく口惜しと思ひぬ。されば野村のごときは非常なる感動を與へられて、それを初めて聞きたる夜學會の席上にて、渠は激昂して、否……否……と烈しく絶叫したり。否、決してわれ等はかれの下風に立つべからず。われ等は人の手によらずして、赤手にして大事業を爲さざるべからず。人の手により、人の肩に縋りて、以て功名の道を得んとするは、わが黨の潔しとする處にあらず。我は斷じて、斷じて、かれの上に出でずんば止まじと、口角沫を飛して言ひぬ。平生功名の念に乏しき畫家の林すら、これを聞きて、一步を先じられたるを羨しく口惜しく思へる程なれば、野村のごとき烈しき性質にては、殆ど堪ゆる事能はざりしなるべし。渠はその夜父に迫りて、卒業したる翌日、直ぐ東京に出して呉れずんば、おのれは切腹して果つべしとまで言ひたるよし、後にて聞きぬ。われもその夜は、いろ／＼なる事を思ひて、烈しく泣きたりき。羨しきは友の身の上、妬ましきは友の將來、我も果してかれの如く、萬事碍なく、東京に出で、學の道に携はることを得べきか。東京にはわが世話を爲して呉れん親戚も少きにはあらざれど、わが貧しき家は、果して充分なる學資を我に與ふる事を得べきか。祖父君の歿られたまひし時も、公債は早や残り少なくなりたる事を言ひ給ひき。もし東京に出でられずに、この田舎に小學校の教師などせねばならぬ身となりたらば……かく思へば、無限の悲哀胸も張り裂けんばかりあふれ來て、身も世も無きやうに感ぜられ、遂に堰を切りたる水の、烈しく流れ出づるが如く、蒲團を被りながら、しく／＼と泣出しぬ。

母上は夜業せんとて、孤燈の小暗き下に、針の目の透り難きを佗させたまひしが、我のしく／＼先程より泣き居れるを、遂に聞き留めたまひて、いかなれば其方は泣く……悲しき事あらば、告げよと、わざ／＼立ちて來て、わが泣顔を覗きたまひぬ。われはいよ／＼涙流れて、誓しは口をも開く能はざりしが、それを漸くに押へて、絶々ながら、其友の事を母上に告げまるらせしに、母上も感じたまふ事一方ならず、われを見給ふ眼には、悲しげなる涙あふれぬ。されどあまりに泣きて心をな痛めそ。其方のそのやうなる心は、妾は何よりもうれしければ……。いかにしても東京に出すやうにして遣るべきに……とて、暫く言葉をとめ給ひしが、やがてまた、そのやうに志さへ確乎として居れば、學資など無しとて、いかやうにも立派なるものになる事を得べきに、心を痛めて肺病など起しては呉れな。肺病にても起すことありては、母は一人ぼつちの、いかに悲しきか知れざるに……と、やさしく手を取りて、われを火鉢の傍に引寄せたまひぬ。めぐみ深き母の心や、情厚き母の言葉や。

わが頬には更に新しき涙こぼれぬ。

この反動は、一層深き勉勵心と、一層深き奮發心とを鼓舞して、われはいよ／＼學の道に心をそまぎ

たるが、その甲斐は直ちに成績の上にはあらはれて、われは勁敵なりし野村を飛越えて、巻頭にて首尾よく八年たづさはり來りたる小學校の課程を終へぬ。わが母はいたく喜び、われも亦流石にうれしからぬにはあらざりしかど、愈々東京に遊學の期となりたりと思へば、胸痛み心曇らざる事能はざりき。母の言ふ所によれば、わが家の公債は、永き間の徒食に、殆ど盡きて、學資の出所のなきのみならず、われは教員なり郡役所なりへ出勤して、母を養はねばならぬあはれなる身なりといへり。東京の親戚にも、一番にて卒業したることを、母上はさも誇りかに告げてやり給ひたれど、引取りて學資を給せんといふもの無かりき。

あはれなる不運の下に生れ來りし身なる事をわれはしみぐと此時悟りぬ。父あらば、立派なる父君だにあらんには、われも野村のごとく——野村は來月早々東京に上らんとて、その準備に忙がしかりき——望多き目的を携へて、東京に上る事を得たりしならんに、徒に玉を抱きて、空山に泣かねばならぬわがこの身のはかなさよ。巻頭にて卒業したりとて、學問を勵みたりとて、我はたそれを何とかせん。われは一生をはかなき小學校教師に埋れて、同學の友の英名を馳せ事業を建つるを、指くはへて傍觀せねばならぬはかなき身ぞ。わが絶望はまことに一方ならざりき。

母上はそをよく知り給ひて、いろ／＼と慰藉の言葉をかけて下されき。一度は人に屈し、人に後るゝとも、蜚龍の更に雲を得て、天上にかけ上る時あるがごとく、志だに確乎たれば、必ず意を得る事あらんに、今よりそのやうに落膽するものにはあらずと、口癖のやうに、熱心に、絶望したるわれを戒めたまひぬ。されどわが失望を、寧ろいぢらしと思ひたまひけん。他の貧しき同人の二三は、早くも小學校教員の口を求むるに汲々たるにも拘らず、家計貧にしてわが手に待つこと多きに拘はらず、母上はわれを小學校教員になさんとは口より出し給はざりき。

われと同じく卒業したるもの十七人ありて、其中の五人は、前橋の師範學校に、二人は尋常中學に、三人は東京へと修業に出でしが、他の三人は小學校教員に、残れる大村と、林と、機屋の長子と、我との四人は、志を抱いて、空しく窮境に踟躕する身となりぬ。

野村は其月の十五日に、望みちて修學の途にのぼりぬ。われは學問に於てはかれと勁敵なりしかど、交に於ては此上なき親友なりしかば、その前日、かれを誘ひて、城趾の人無き松原の中に遊び、こゝに悲しき別を叙しぬ。かれは言ひぬ。一時の屈辱何ぞ言ふに足らん。君は到底田舎に埋没し了すべき利器にあらざるを僕は信ず。思ふに、遠からずして、都門の中に再び手を握ることを得るに庶幾からんと。又言ひぬ、只僕の君に囑するは、君が一時の不平に絶望して、今迄の意氣を銷沈し盡さざらん事と、女子の姑息なる色に陥りて、青年多望の時期を失ひ給はざらん事となり。人の噂なればよく知らねど、先日君はさる女子の弄する所と爲らんとしたまへりと聞けり。(あゝ、渠の鋭敏なる、既にその事を知れり)又かの大村を見給へ。かれは已に一女子の愛に沈湎して、父もあり學資もありながら、東京に上らんと

する念は、露ばかりも無きにあらずや。(われは渠より初めて大村の艶話を聞きぬ。まことに渠には一人の美しき従妹ありて、をりく伴立ちて、喃喃と語り合へる事あるをわれも見たりき。そはわれ等より一期下にて、名を杉山貞子といひて、眼の黒き、色の白き、美しき少女なりき。)僕は切に君に囁す。夜學會の同人中、尤も有望なる青年として君に囁す。君がこの二事を銘心して、孤往獨邁せんとするこの友に負き給はざらん事をと。偉なるかな、わが友。切なるかな、わが友。われは涙を揮つて、誓つてその教に負くこと無からんといひ、楽しく都門の中に手を握る時の來るを待たんと言ひき。われ等二人の感は悲壯にして、われ等二人のこの松原に於る別離は、極めて涙多きものなりき。

古城趾を横り、麥畝、芋畝の間を過ぎ、松原の繁みを越え、芦荻の深く叢生したる中へと、一條の細き路は、見えかくれしていと絶々に通じ行けり。こは前岸松原村にわたり行く渡船場のある處へと通じたるものにして、心を留めて見れば、その芦荻の深く茂りたる中に、一つの乞食小屋の如き、小さき渡船小屋の屋根を認むるなるべし。われは夏の堪へがたき暑きある日の午后、沼の涼しき風に吹かれればやと、天保三十六家絶句の上の卷一冊を懐にして、古城趾の本丸より、能見堤の上へと行きしが、木蔭なき日影の、ぢりく〜と暑きに堪へかね、そのすぐ下なる影深き涼しき松原の中に入りて、前なる一條の路よりかけて、遠き沼の景色などを眺めながら、夏の暑さにもひるまぬ割葎の喧しき聲を聞きつゝ、いろ／＼なる事を思ひ居たり。暑き日中として、前なる風情ある路を、誰一人過ぎ行くものなかりき。われは懐なる詩集を出して讀みしが、これも一二枚にて倦みたれば、そのまゝ折りさして、頭を擡げしに……わが眼はゆくりなくその前なる路の遠き處より、近頃流行せる新形の蝦色の蝙蝠傘の、美しく暑き日影に照されつゝ、此方く〜と一步毎にたどり來るを認めぬ。

あたりの現象に見倦きたる折として、我はいかにこの蝙蝠傘を風情なるものとは思ひけん。暫くは眼をも放たで、その蝙蝠傘の竹村にかくれ、田畝にあらはれ、板橋を渡り、阪を下り來るを見詰め居たり。近くに從ひて、われはそのあるじの此處等にては見たる事なき少女なるを知りぬ。をりく〜傘の下より見ゆる顔もいと美しかりき。されど我は立上らんとせで、唯々その蝙蝠傘の動き行くを眺めつ。

蝙蝠傘はわが下を過ぎて、又一つ急なる阪を危ふけに下りて、ふわ〜と動きつゝ、芦荻の繁みに、遂に其姿をかくしたるが、再び渡船小屋の前にあらはれし時は、その傘は彼方此方に往來して、さながら渡守の居らぬを頻りに尋ね佗ぶるが如し。

我は呼びて遣らんと立上りぬ。

思ひもかけぬ芦荻の繁の中にて、向より此方さして戻り來る蝙蝠傘にばつたり出逢ひて、年若き身の、我は少しく狼狽せしが、思切りて、渡守の居らぬにや。今呼びて進ずべきにと、早口にて言ひつゝ、ちらと少女の顔を見ぬ。かゝる美しきは、われ未だ見たる事なかりき。黒き眼は、亮々たる中に、無限の愛嬌をふくみ、赤らめたる顔は、言ふに言はれぬ艶色を呈して、一盼よくわが心を奪ひ盡しぬ。

二人は並び歩みて渡船小屋の前に来ぬ。

わが高き呼聲は、遠く静かなる沼の上にひびきわたたりて、遙か向ふの芦陰に、閑を偷みて糸を垂れるたりし老いたる渡守の耳にも聞えたりと覺しく、答へたる返響、かすかにきこえて、暫く待つとする間に、一艘の小舟は、芦の繁みを出で、静かなる沼の上に、一痕の擢の痕を残しながら、ゆるりと此方へ漕ぎ來ぬ。

『お蔭様にて……』

たえ／＼と言ひたる聲の美妙なる音楽は、いかにわが胸の底の琴線に觸れたりしよ。われは恍惚として、我を忘れて、じつとそれを見送るとする間に、老船頭の棹したる小船は、少女を載せたるまゝ、埠頭を離れ、芦荻を離れて、次第に向ふへ遠ざかり行けり。蝙蝠傘のわが方を後に立てる姿は、やゝ暫くその沼の中に見えたりしが、やがて前岸の芦荻の中にかくれ果て、残りたる擢の痕の上には、魚をねらひたる一羽の白鷺、横さまに水を掠めて飛び行きぬ。

何處の少女？

その年の秋には、林も東京に出で、大村も近村の小學校の助教に出勤し、機屋の長子も、父の代理に機廻りに行くといふ有様にて、一度榮えたる六人太郎も、今は秋の落葉のちり／＼に、われは唯一人奥の四疊半にこもりつゝ、失意と空想との中に、徒に日を送りたるが、親類知己の人々の、卒業したるものを只遊ばせて置くも無益なりといふに誘はれて、母上も我も、進まぬながら、松原村の小學校に、好き助教の口ありといふを幸ひ、其年の十月初旬より、我は其處に勤むる身と定めぬ。

その校長は、もとわが沼の畔に住みし頃、わが隣なりし島正幸といへる人にて、そこには其方と一つ違ひの娘ありて、其方はよくその子と遊びたるが、覺えて居らぬかと、母上は言ひ給ひぬ。

わが初めて小學校の助教となりたる時の感を、われは此處に詳しく記さんと思へり。小學校の助教をば、われ昔よりわが眼中には置かざりしかど、自からその地位に當りたりと思へば、何となく面白き何となく心の震ふやうなる感を抱かざる事能はざりき。始めて行きたる日は、天氣はいと麗かにて、高く碧に澄みわたれる空、強く高く吹わたたりたる風、そよりに秋の悲しさを覺ゆる日なりき。松原村の尋常小學校は、沼の對岸の松原の奥にありと聞けば、われは一度もそこを訪ひたる事なけれど、沼の西の渡——先の日美しき少女を見たる——をわたりて、芦荻のおもしろく叢生したる間を押分けつゝ、對岸なる風情ある松原の中へと入りぬ。この松原の面白さよ。われは蛇の蟠るとき路をたどりて、朝日の影婆娑として定まらざる、その美しき松原の中を穿ち行きしが、行きても行きても、松のみにて、人家らしきものも無きは、如何なる故ぞ。眞直にだに行かばと、聞きしにと、怪しく思ひつゝも、猶倦まずに其路をつたひ行けば、果して路を誤りたるものと覺しく、周圍には芦荻漸く多くなりて、不意に鏡のごとき入江、晝けるごとくわが前に顯はれぬ。

美しと思ひながらも、困り果て、立ちて居るに、包を負ひたる一人の生徒、恰もわが前を過ぎ行きぬ。われはをり好しとその生徒を先導に、捷路らしき松原の間の路を、そのまゝ一町ほど傳ひ行けば、子供の騒ぐ聲松原越に喧しく聞えて、やがてペンキ塗の、小さき門の、ひろき庭の、極めて風情ある小學校、しけれる松原の中に見えぬ。

子供の群の怪しげに我を見送る間を過ぎて、事務所に行きて、わが刺を通ぜしに、やがて教員集會所らしき、椅子五脚ほど並べたる一室に伴はれぬ。待つ事久しからずして、後の戸の開く音して、温厚らしき美しき鬚を蓄へたる品格ある五五六ばかりの一人の紳士入りて來ぬ。こは校長なりき。後にわれに限りなき恩恵を與へたる校長なりき。渠は聲をやさしくして、よく承諾して呉れ給ひぬと、さも丁寧なる挨拶を爲せしが、快けにわが方を見やりつゝ、學校の規則、事務などの事をいろ／＼と語り出で、終に、われに當分下等八級の教授を擔當せんことを托しぬ。われは快く諾しつ。

校長は更に言葉の調子を改めて、母君は御壯健にて結構なりといふ事、貴君の御尊父には幼き頃よく書を教へて貰ひたる事、貴君の稚き頃は恰も隣に住したれば、親しく往來して、親類のやうなりし事など、さも懐かしげに語り出で、おのれが家は此處より一町と隔たざれば、今日授業の濟むたる後、立寄りて茶にても飲みて行き給へ。此後とても、いつにても宅と同じやうに、遊びに來給へと言ひしが、此時授業初の板木は、高くあたりに響きたれば、校長は匆卒と室を出で、去り、われも亦一人の同僚に誘れて、わが受持ちたる西隅の下等八級なる一室に行きぬ。

昨日まで人に教へられたる身の、今日よりは人を教ふる身となりたるかと思へば、われは何となく、胸の躍るやうなる心地して堪へ難かりき。あはれまことにわが初めの授業は、いかに可笑しかりけん。五十人以上にも及びつべき六七歳の小兒の群の上に立ちて、顔を赤らめつゝ、アイウエオと、聲張上げしさまは、まことに一箇滑稽畫中の料に適したりしなるべし。されど幸にも、この一室は、他の教室と遠く離れて、わがあやしげなる教授法を、誰一人見居るものとしてあらざりしかば、やがて漸くに心落居て、一時間の終頃には、天晴立派なる一小教員となりたるごとき心地したりき。そのみならず、一時間二時間と馴れ行けば、無邪氣の小兒の群を教ゆる事の、いかに面白きものなるかをわれは知りて、胸に蟠れる近日の不平も、稍稍れ行きたる心地せられぬ。

正午の休暇時間には、我は運動所に出で、小さき生徒を相手に、いろ／＼と面白き戯を爲して遊びぬ。無邪氣なる生徒の群は、早くも我によく懐きて、新しき先生／＼と、わが跡を追ひ廻るに、我は愈おもしろく、鬼事を爲し、競走を試み、それにも倦めば、松蔭の涼しき處に、かれ等を集めて、話好きの身の、いろ／＼と昔話などを語り聞かせぬ。かれ等は皆大人しくわれの前に環を作りて、手を組合せて、一心になりて、それを聞きたるが、一つを終れば又一つと、後を／＼と催されて、一時間は時の間にぞ過ぎ果てたる。校長は此間教員室より顔さし出して、さも満足したるものゝやうに、頻りにわれの爲

んやうを見居たりき。

午後は習字と唱歌の時間とて、我は互に筆を振ひて顔に墨塗つけんとしたる一群の小兒の悪戯を鎮めたるのみ、他に記すべき事もなく過ぎぬ。板木の音高く日影さし透る松原の中に響きて、下駄踏み鳴らす生徒の音、いと喧しく聞えたりしが、それも時の間に静りて、やがて我は校長と共に、同僚のいつか残らず歸り果てたる教員室を出で、校門づたひに、松原を抜けて、その校長の家を訪ひぬ。

校長は行々わが今日の授業法のすぐれたるをたゞへ、猶此上も盡力を乞ふと言ひぬ。われはやがて松原の稍開けたる處に、一軒の風情ある茅葺屋根の見えかくれするを認めしが、いよく近きて、われはその垣に木槿の紅白の花いと美しく咲けるを見ぬ。わが心は何故か知らねど、此時少しく動きたりき。わが眼に見ゆるは、稚き頃共に花を束ねて遊びたるうつくしき娘なりき。

われ等を迎へしは、四十七八歳とも見ゆる品よき人よけなる妻君なりしが、校長の二語三語わが事を語るを聞くや否、俄にいたく驚きたるものゝ如く、『これが……芳太郎様！ 大きくなり給ひしものかな。かくては路にて逢ひても、容易に見分得べきにあらず』と、聲高く言ひぬ。さて少し躊躇ひて、『それにしても、お露様（わが母の名）はかゝる立派な子息を持ちて、いかに心強く思ひ給ふ事か知れず。かの頃は、心細しとのみ口癖のやうに言ひて居たまひしが、貞操正しく世を送りたまひしゆゑ、その應報はありて』と、さも感じたるものゝやうに、其後は黙して只じろくくとわが顔をのみ見ぬ。

『お袖は』

と校長は小聲にて問ひしに、妻君は振り返りて、『今其處に居りたるが……呼んで参りませうよ』と言ひて、持來りたる茶を二つの茶碗につきながら、言葉附もゆるくと、『最早久しき昔ゆゑ、覚えてはお出なさるまじけれど、家の彼女とは、仲好く遊びしものなりしが……』と、わが顔を見つゝ言ひぬ。わが心は烈しく震ひぬ。

やがて妻君は立ちて行きしが、次の間に、頻に物を促すやうなる氣勢したりと思ふ間もなく、俄にそこにあらはれ出でたるは、丈のすらりとしたる、美しき一人の少女の、耻しさに顔を眞紅にしたる姿なりき。あゝ誰か思はん、幼き頃われと花束を流したりといへる少女は、實にかの曩の日、渡船場にて見たる美しき蝙蝠傘の主ならんとは！

我胸は雷の如く轟き渡りぬ。

我は何をか言ひ、何をか語りけん、更に覺えず。われは唯わが心のいたく亂れて、今まで夢にも知らざりし感の、傷もちぎれ胸も割けんばかりわが全身に漲りわたりたるを感じたるのみ。少女はやがて母につきて、忝しく禮施して退き行きたれど、われは最早心を静かにして、校長と以前の如き落付きたる會話を爲すこと能はずなりぬ。校長はそれとは知らずに、いろくんと學問の事を語り、教育の事を語り、わが將來の目的を問ひ、わが學術のすぐれたるを賞し、猶わが家に離れたる四疊半一間あれば、い

つにても來て其處にて勉強して行けよときへ言ひて呉れぬ。我はこの一日の會話によりて、親しき親戚よりも猶力になるべき頼もしき人を得たるなり。

歸らんとせし袖を堅く妻君に引留められて、われは夕餐の饗應にすら預りぬ。葡萄棚の下こそ好ければ、夏ならねど、涼臺を其處に据ゑて、大なる膳を對座に、校長は一杯の盃をわれにさしぬ。いかに興多き夕なりけん。美しき少女は絶間なくやさしき笑を頬間に呈して、われ等の盃盤の間に周旋し、水のごとき月は松原の繁みを透して、冷なる光をわれ等の盃の中にまで射し入らせぬ。われは進まぬ酒を三盃ほど強ゐられて、兩頬は燃ゆるが如き熱を感じたるが、校長は一杯二杯と次第に酔も加り興も生じ來りしと覺しく、聲高らかに教育界の不振を論じ、今の學生の徒に東京にのみ出でんとするは、惡しき傾向なりといふ事を言ひ、併せて功名心の水の沫の如くはかなきものなる事を語り、最後に君は教育家になる心は無きかと問ひぬ。

英雄豪傑の業をこそ望ましけれ。われは若き血の燃え上りたる身の、教育家などにならんとは思ひもかけぬ事なれば、答へん術もなく、黙してありしに、渠は口を衝きたるやうに、教育事業の面白きを説き、小童を教育する事の國家の大事業なるを説き、徒らに功名に趁はれて、齷齪紅塵の中に埋没せんよりも、おのれの如く境清く塵到らざらん處にありて、教育の大業を盡さんことの、いかに賢き方法なるべきかを説き、懐々數千言、殆ど盡くる處を知らざりき。されどわが若き心は、いかでかかゝる眞面目なる率直なる議論を容るゝの餘地あるべき。われは只黙して、その千言萬語の口を衝きて出づるを見るのみ。

別を告げ、松原を越えて、その沼の畔の渡船場に立ちたるは、早夜も八時過なりき。對岸の船頭は眠り果て、そを呼起すに、一方ならざる困難を感じき。あはれそれにしても、事多く興多き一日なりしかかと、酒に酔ひたるあつき顔を、さびしく冷に照りたる月の光にさましつゝ、次第にわが方に漕寄するくろき船を眺めたりしが、黒き眼、大なる額、愛嬌ある頬、遠山のごとき眉など、電のごとくわが胸にかゝりて、われは又深き／＼恍惚に落ちぬ。舟の沼の中央なる芦荻の陰を出でんとせし時、われは心ともなく、戀しき少女！ 戀しき少女！ と、二度ほど繰返して心の底に獨語ちぬ。あはれわが一目見て、直に戀に落ちしも理ならずや。われとかの少女とは、幼き頃よりの仲好にて、無心とは言ひながら、一たびは渠を慕ひて、この沼に溺れんとし、一度は美しき蝙蝠傘を見て、限りなくその人を美しと思ひし事さへある縁深き身なるものを。

六

日毎に我は沼を渡りて、その松原の中なる小學校に通ひたるが、校長一家の者とは、一日増に親しくなりて、互に心の隔も除かれ、互に言葉の遠慮も無くなり、娘ともいろ／＼と打つけに語り合ふ事を得

る身となりぬ。娘の弟に、同年十一になれる伶俐なる子ありたるが、これもよく我に昵みて、兄にてもあるかのやうに、我儘を言ひて、頻りにわが跡を追ひ廻りぬ。娘には親しくなればなる程、性質の極めて美しくやさしき處、いよ／＼あらはれ、世にはかゝるしほらしき少女もある事かとわれは思ひぬ。妻といふ人も、極めてよき心持てる人にて、われを殆ど子供のやうに取扱ひ、ある時などは、そのやうに汚き羽織の緒を結びて居るものにはあらずとて、校長の古の一對を我に與へぬ。

樂しき一家の團樂！

今までさびしき家庭にのみ生ひ立ちたる我は、この暖き團樂をいかに羨しとは思ひけん。併せてわがこの一家の客となり得しを、いかに嬉しとは思ひけん。われは今までの悲哀も、今までの不平も、今迄の絶望も、この家の闕を跨げば、忽ち烟のごとく消え行くを覺えぬ。

ある日、我は例の如く其家に遊びて、日暮近く別を告げて歸らんとせしに、娘は弟と共に、沼の畔まで送らんとて、わが跡につきて來ぬ。

ゆく／＼我等は親しく語りつ。

『東京に行きたしとは思ひ給はぬにや』

路傍の花を摘取りて、それはと品評し居りたる言葉を轉じて、われはかく娘に問ひぬ。

『行きたしと思へど父君の許したまはぬに……』

と、娘は術なけにいふ。稍ありて、

『貴郎は』

『私も行きたくて／＼仕方が無きなれど、母一人のみなれば……』

『父君は』と、娘は何か物思はしけなる美しき眼色して、『父君は東京に出す事を嫌ひて、弟の成長くなりても、師範學校に入るゝとのみ言ひ居り侍るが、何故に父君はあのやうに東京に出すを好み給はぬか……。此間も御身と教育とやらの事を喧しく議論しませしが……』

『御身の父君は教育家をこの上なく好しと思ひて居給ふゆる』

『貴郎は好しと思はぬにや』

娘はちらとわが顔を覗ひぬ。

『悪しゝとは思はねど……われはそれよりも東京に出で、立派なる名を擧げて、國家を益するやうなる大事業を成さんと思ふ身なれば……』

『まことにかゝる田舎に住むよりは……』と、娘は又も物思はしけなる顔色を爲しぬ。

その顔はまことに東京とはいかによき所ならんといふが如し。ふと脚下に美しく咲ける紫の花を見つけ、俄に、

『こは何といふ花……』

ふ
る
郷

『龍膽』

わが前には、沼の渡場早くもあらはれて、夕暮の覺束なき光は、掠むる如く沼の上に靡きわたりぬ。老船頭は舟を艤して、已に岸の頭に待てり。わが乗りたる船は、夢のごとき水上へゆらくとたよひ行きぬ。

『さらば……』

『明日、また……』

姉弟のわれを送る聲は、夕暮の靜なる空氣にひびきて聞えぬ。

かくて二三月は、時の間に過ぎ行きしが、われは其時の事を追懷する毎に、限りなきなつかしさを感じざる事能はず。わが一生の間、かく穩かなる詩趣多き時は、又と再び來らざりき。われはいつも楽しく面白き心を以て、朝毎に芦荻深き沼を渡りて行き、夕ごとにいつも望多き心を抱きて、姉弟に送られて、沼をわたりて家に歸りき。あまつさへ、學校にて小兒を教ゆる業も、亦われに興味を興ふる事少なからざりしかば、暫くの間われは青雲の志功名の念を忘れて、都へ出でんといふ心をも起さざりき。あはれいかに穩かに嬉しき生活なりしよ。我は此間に於て、悉く沼の風景を探り盡して、漢詩を作る事、日に十首の多きに及びぬ。われはいつも夕日の未だ松原にさし残れる頃、只一人沼の畔の細き路をたどりて、松原の絶間くゝに、沼の入江のところくゝ夕日を帯びて金色のごとくかどやきわたるを見つゝ、

深き思に沈みながら、さもくゝ詩人らしき逍遙を爲すを常としたるが、この時は必ずかの娘の事を思ひて、そをわが行末の希望の上に繋ぎ、いろくゝと樂しき空想を回らしたりき。ある時などは、沼の見ゆる松原の繁みの中に、他所より見えぬやうに身を隠して、座ろに嬉しく悲しき空想に耽り居たるに、如何にそを認め出せしか、後よりこつそりとかの子の歩み寄りて、何を考へて居給ふと、不意に聲をかけ、われを驚かしたる事もありたりき。又ある時は、かの子と二人、草の上に座りて、未來の花のごとき希望を語り、行末たのしき夢を繰り返して、殆ど飽く事を知らざりし事もありたりき。其頃われはかの女を妻にせんと思ひ居りしや否やを知らず、又かの女もわれを得んと思ひしや否やを知らず。我は十七歳、かれも十六歳の、まだうら若き、譬へば春の潮の朝日に満ちかどやきたらん如き心は、互に一刻も相離れざらんことのみ願ひ、互にこのまゝ、樂しく日を送らまほしと思ひに過ぎざりしやうなりき。われ等の相戀ふる心は、烈しく熱したれど、しかもまたいと淡かりき。

こひしき少女！

『君はかの家の養子に爲る由なるが、眞實にや』久しく逢はざりし大村に、かく突如だんげに問はれし時、われはあまりの事に、むつとして怒りぬ。

『されど専ら評判ゆる』

わが怒りたる氣色を見て、俄にかく言ひ足したるが、我の間ひ返すをも待たず、饒舌なる渠は、その

評判なるものを詳しくわれに語り聞かせぬ。渠は語りけるやう、わが伯母は恰もその島の家と遠き親戚なるが、ある夜の話に、君の噂出で、性質も好く、器量もよく、學問も亦今の少年には珍らしき程勝れたれば、袖の婿には、あのやうなるをと思ひて、今より眼を附け居れど、如何にや。ことに、袖とは昔より幼稚朋友にて、今も氣合ひたるやうなれば、出来ぬ事はあるまじく、もし首尾よく出来たる曉には、君を師範學校に入る、校長の考なるよしなり。君もかゝる美しき少女を得ては——と、冷評し始めぬ。

「おのれの身の上の艶話を餘所にして、あまりに無禮なる男かなと、一時は少しく怒りたれど、この男の饒舌には敵し難しと思ひ返して、その返報に、渠が來月より入學せんとする師範學校を、思ふさま罵倒し盡しぬ。一生小學校教員に埋れはて、いかでか可なるべき。われ等は少くとも日本の將來を引受くべき青年ならずやと、縷々數千言、更にその鋭き論鋒をとどめざりき。好し、好し、好しと、渠はわが言の終るを待ちて、冷笑して、さる事を言ひて師範學校に入學せらるゝやうなる眼に逢はせられ給ふなど、流石は饒舌の言葉巧に、鋭くわれをひやかし盡しぬ。

「いかで師範學校などに入學することを爲すべきと、その夜寢に就かんとする時、我は奮つて心中に叫びぬ。わが胸には、久しく消えかゝりたる功名の念、渦のごとく再び盛に燃えはじめ、野村、櫻井などの境遇羨しく、われは何故に大村などと共に、この窮境に一人残りて、荏苒たる歳月を空しく送りて居れるにかと、思へば思ふ程口惜しく、悲しく、情なく、かの戀しき少女の姿も、おもしろき沼の景色も、暖かなるかの家も、皆われを惡地に陥るゝ惡魔の所業のやうに思はれて、涙烈しく蒲團の袖をうるほしぬ。

忘れもせぬこの蒲團の中にて烈しく泣きたる夜の事なりき。その夜はいと寒く、西風裏の栗の大樹をわたり、霜氣戸の隙間よりさし入りて、蒲團二枚重ねても、猶足の暖るに暇せざるばかりなりき。母上は常のごとく、衾一枚かけて、われと並びて臥したまひしが、夜半眼を覺して、火を點して、あまりに寒ければとて、今一枚蒲團を押し入より出してかけ給ひき。されどかなしきかな、母上は——われを命にかけて育て上げたまひたる恩惠深き母上は、已に烈しき寒氣を引こみて、翌朝は枕も擧ぐることは程の重き流行感冒に打たれ給ひたりき。母上は平生弱き身體とて、寒きにも、暑きにも、感じ給ふこと、いつも世の常の人には越えたれど、われを養育の大任を負ひて、氣を勵し、心を奮ひ、今まで重き病にもかゝり給はざりしが、祖父も歿り、われも今は一人前の身となりたれば、この頃は氣を許したまひて、いとゞ蒲柳の身とはなりたまひけるなり。學校に出で行く前に、有合せたる妙振出し一つ差上げて、これにていつもの如く怠り給ふならんと、三時過ぎに歸りて見れば、思の外なる熱さへ加はりて、全身の節々痛むこと夥しく、いたく勞れて臥し給へり。驚きて町なる醫師の許に馳せて、急ぎ診察を乞ひたるに、流行感冒の最も烈しきものゝよしにて、粉藥一包と水藥一瓶とを與へられぬ。われは醫

師より歸る路すがら、寒き夜風に吹かれつゝ、もし母上にても逝き給ふやうなる事あらばと思ひて、身を戦はしぬ。さらぬだに頼少き身の、さる事あらばいかにかせむ。かく思ひしが、さる忌はしき事と、直ちにそれを打消して了ひぬ。あくる日は使を遣りて、學校をやすみ、終日床のあたりにありて、看護に心を盡したれど、藥の効は見えずして、あくる日も亦そのあくる日も、われは床のあたりを去る事能はざりき。否そのみならず、猶一日過ぎ二日経つとする間に、病は次第にまさり行きて、さらぬだに瘦勝なる身は、いよゝゝ瘦せ、血色も漸くすぐれざる色をあらはし、咳嗽さへそれに加はりて、夜ごとの苦みは、殆傍にありて見るに忍びざるばかりなりき。われは年若き身の、只々困り果てゝ、心配らしけなる色の、おのづと顔にあらはるゝのみなるに、母上は苦しき中にも、いぢらしと見給ひて、そのやうに心づかひすな、やがては全く癒え果つべし。いかに衰へたりとて、こればかりの風邪に命を失ふ事はあるまじきにと、強ひて笑ひて、我に力を添へんとしたまひぬ。されどをりゝは、かゝる時に力になる親戚にてもあらば、世話も十分に爲て呉るゝべきに、一人の伯母も、年老いて、さる力なくと、さも心細けに獨語ち給ひぬ。

猶三日ほど過ぎぬ。されど病勢はまさるのみにて、更に怠り行かんさまも無かりき。近隣の知るかぎりの人々、漸くそを聞き留めて、鶏卵の折、菓子折など持ちて、見舞に來るやうになりたるが、機屋の主婦は、眞心より心配して、手の無くて困り給ふ時は、いつにても言ひて來たまへ。御役には立つま

じけれど、幾人も雇人も居る事なればと、親切に心を添へて呉れぬ。その六日目に、校長も如何なる様子か案じらるゝとて、王子の大なる折持ちて見舞ひに來て呉れたまひぬ。母上はいたく喜びて、衰へたる身を床の上に起して、いろゝと子息の世話になりたる事を謝し、末も孤子の身の、目をかけて遣りて下されと、涙ながらに托し給ひぬ。さる心配はせず、早く治りたまへといひし校長の眼にも、此時一滴二滴涙見えぬ。あゝ我いかでか獨り泣かざる事を得べき。

折好く醫師來りて、いつもより長く綿密に診察したるが、をりゝ首傾けて、さも困りたる容子を爲せるに、それとなく心を痛ませし校長と我とは、渠を入口の處に要して、如何なる容體と小聲にて問へば、あはれいかにかせむ、病症變じて肺炎になりぬとなり。

校長はいろゝなる注意を残して、日の暮れゝに去りぬ。

其夜はいと寒かりき。われは母君のそを感じたまはぬやう、我も風邪惹かぬやうにと、火を盛に起して、その傍に侍して居たりき。行燈の光小暗く母子の影を照して、母君の咳嗽のみ、をりゝ高く苦しげに、更けたる一室に聞えわたりぬ。肺炎となりてはむづかとは、わがかねて醫師より聞ける處なれば、われはそれを聞きし時より、言ひやうも無き悲しさと心細さとをわが胸にひしと覺えて、母君のやつれたる姿見るたびに、涙は絶間なくわが兩頬をつたひ落つるを、われはひそかに袂にて拭ひ居たりき。早く父に別れたる身の、この母君には、人一倍苦勞をも懸け、心配をまかけまゐらせしに、おのが

身の立派にならん時をも見せ奉らず、露ほどの心安めの時にも逢はせたまつらずに、此まゝ別れ行かんことの悲しさよ。

『芳!』

夜も早十二時近く、母上はわれを呼び寄せ給ひぬ。われは脊にても撫る事かと思ひつゝ、枕の邊に近寄りしに、母上はその儘水を一杯所望したまひて、芳! 妾も最早其方に別れねばならぬ身となりたりと打出で給ひぬ。わが胸はひしと塞りぬ。『妾も其方の立派にならん時まで生きて居たけれど、意に任せぬ世の、今は早別れて行かねばならぬ身となりぬ。この上は、其方はかしの實の唯一人、頼まん陰も無くて、心細く世を送るならんと思へば、とても安らかに死しては行かれぬ心地は爲れど、かくまで成長くなりたるをせめてもの事として、心安く別れ行くべきに、其方も勉強して立派なるものになりて呉れよ。父上は國の爲めに、身を殺したまひし人なる事を忘れ給ふな。またこの母も、其方を立派にせんとのみ思ひつゝて、其方を養育したる事を忘れては呉れ給ふな。其方は伶俐なる性質なれど、あまりにこの母に似て心弱ければ、何事にも躊躇ひ勝ならんと、只そのみぞ心づかひなる。何事も進む時は、一心に進むやうにして、ためらはずに爲し給へ。』

わが涙は千行に下りぬ。

行燈の影薄暗き一室は、森閑として、暫し母上の歎^う歎ぐる音のみ聞えぬ。戸外には風少し立ちて、裏

山の枯れたる篠がさくといと淋しく鳴りぬ。稍ありて、母上は又言葉をつぎ給ひて、『されば其方の小學校を卒業したる時も、母はいかに他の朋友のごとく、其方を東京に出すこと能はぬを口惜しと思ひけん。寧ろこの母なくばと思ひたる事さへありき。されば今妾逝けば、其方は他に係累なき身の、志一つにして、學資なくとも、東京に出で、如何やうにも立身する事を得べければ、これのみは悲しき中にもうれし』と言ひ給ひぬ。

何たる悲しき言葉ぞや。貧しければかゝる心づかひをさへ爲し給ひしか。母上よ、われは東京に行かん事を願はず。他の朋友のごとく、修業に行きたしとも思はぬに、今のまゝに、いつ迄も生きて居て下され。いつまでもく長命して私の世話を爲して下され。母上居たまはずなりては、假令卓れたる人となりても、心より喜びて下さる人はあらざる可きにと、われは母の袂に縋りつゝ泣きぬ。『否、さる弱き心ゆゑ、心づかひなりと今も妾は言ひたるなり。艸葉の陰にて、父上と二人して、喜びて居るべければ、必ず必ずさる弱き心は起さずに、勉強して立派になりて呉れよ』此時烈しき咳嗽は起りたれば、われは後に回りて、臥したる背を撫りまらせぬ。

其後は母上は唯すやくと眠り給ふのみ、更に何事をも言ひ給はざりき。少しく立ちたる木枯の風、漸く強くなりて、裏の栗の梢には、潮の寄するやうなる音きこえ、軒端の下には、落葉のがさくくと轉る音微に聞えぬ。行燈の影はいよゝ小暗くなりて、それに向へる母上の顔、いよゝ蒼白く見えぬ。

ふと思付きて、あまりに靜にして居給ふものかと、傍に寄りて見しが、涙あふれて、われは其時の事を語る能はず。母上は已に、今の言葉を形見にして、あはれなる心弱きかしの實の唯一人なる孤兒を枕邊に侍らせて、黎明のやゝ明くなりたる曉の光の下に、いと靜かに、いと穩かに、さながら眠るがごとく逝き給ひけるなり。

われはよく記憶す、あまりの悲しさに、暫しは茫然として、涙も出でず、只々その亡骸を見詰め居たりし事を。われはあまりに其顔の變らざるに、もしや熟く眠りてゐたまふにはあらぬかと、秘かに耳に口をよせて、『母様、母様』と二聲ほど呼びぬ。されど蒼白き顔は、一糸も動かずして、わが放てる聲の、早く室内に忍び入りたる黎明の薄明るき光の中に消えゆくを見て、俄に堪難く悲しくなりて、われは身を悶へて獨り泣きぬ。答へ給はぬと知りながらも、我は猶物狂しく呼びぬ。

『母様、母様』

夜は明けても明けんともせぬ雨戸を怪しく、心元なくて訪ひ來りし機屋の主婦は、あはれなる孤兒が、母の死骸を擁して、獨り泣けるに驚きて、力を盡して我を勵し、人を走らせて親戚知己に報じたれば、時の間に知れる限の人々は集り來りて、校長、機屋の主人などの、親切なる世話の下に、そのあくる日、やさしく女らしく操正しかりし母上の遺骸は、惜まぬものなき人々に送られて、沼の東畔なる善延寺といへる寺の墓地へ葬られぬ。

「七日の間、われは日毎に花を携へて、悲しく淋しき其墓を訪ひぬ。母の墓は小高き丘の上にあるて、そこよりは沼の風景唯一目にぞ見わたされたる。母は平生天然の趣を解して、われと祖父の墓に詣づる毎に、われも死したらば、かゝる處に葬られん。こゝよりは、沼一目に見えて、いと心地よからんと言ひ給ひぬ。埋めまるらせし時、沼の方に頭向けてと、わが言ひしを、送り來し人々、皆悲しと思ひきと、後に聞きぬ。風寒く花無き頃なりしかば、われは纔かに庭に咲残れる山茶花を折り行き手向けまゐらせしが、後にはそれも無くなりて、詮なく檜などの緑なる枝を手向けまゐらせぬ。母上は花を好みたまひし身の、花多き時ならばと、口惜しく思ひぬ。然るにある日、われは思もかけぬ山茶花の、いと美しく手向けられたるを認めて、何人のうれしき志ならんと、限りなくあやしく思ひしに、あくる日は、又更に美しき山茶花と龍膽の花との見事に挿し交ぜられたるを認めて、いよく我は怪みぬ。三日目には、いつもより少しく早く行きしに、我はゆくりなくかのなつかしき袖子が、野菊の花を手に溢るゝほど持ちて、沼をわたりて來るに逢ひつ。

『御身なりしにや』

かれは微笑みつゝ點頭きぬ。われは限りなきうれしき心を以て、厚き感謝の意を述べしに、少女は顔を赤らめて、よき花をと思ひて、彼方此方と探したれど、何處にも美しき花なく、詮方なく、今日は野よりかゝる花を集めて來ぬといひぬ。少女が美しき真心もて花なき枯野より集めたる美しきこの野菊の

一把！ 母上はいかにうれしと思ふならんと、われはこゝろの中に泣きぬ。

一七日の翌日より、我は久しく缺勤したる學校へと出でたるが、校長一家の人々は、いづれも皆わが孤兒となりたるを憫みて、限なき暖き情を我に寄せ、骨肉も及ばざるやさしき言葉をかけて、頻に悲哀に沈めるわれを慰めんとしぬ。わが多感の精神は、母を失ひてより愈益まさり行きて、些かなる情の言葉をも、身に沁みわたる程うれしと思ふ頃の事とて、この一家の慰藉は、限りなき深き感謝の印象を、わが小さく弱き胸に刻みたるも理なきにあらざるべし。わが袖子の君をも始よりなつかしと思ひしとはいへ、愈捨て難く思ひ始めしは、實にこの母を失ひてさびしく悲しく暮したる前後なれば。

かくて我は校長が言ふがまに、四十九日を済したる後、留守居とて無き身の家をたゞみて、校長の家の四疊半を借りて、其處に同居する事となりぬ。

一月二月と悲しき中にも樂しき月日をわれは送りぬ。袖子は妹のごとく常にわが傍に侍し、主婦は母のごとくいつも多くの情愛をわれに寄せ、校長は又綿密なる注意を以て、恰も父のごとき愛を注ぎ給ひぬ。われは此間にありて、悲しき母の追懷を繰返し、袖子のなつかしき戀の光に浴しつゝ、沼の畔の松原の中を、日の暮れなんとする頃、いつも烈しき物思に耽りながらさまよひ歩きぬ。

われはその松原にてさまよひの事を思ひき。されど最も深くわが心を占めたるは、袖子の事と、母の遺言せる東京遊學との二つなりき。大村より聞きし師範學校入學の事を、校長は絶えて口より出したる

事なけれど、物語の序には、いつも名利の念の一顧に値せぬを説き、併せて教育事業の神聖にして趣味饒きものなる事を語り、主婦も亦をり、は東京に出で、つまらぬ者になりて歸らんよりは、田舎にて修業したる方勝りたらんなど言ひ出づる事あるに、われはこの一家のわれに對する眞意を解するに難からざりき。されどわが功名に燃ゆる心は、いかでかかゝる因循姑息の言葉に誘はれて、一生をこの草深き田舎に埋るゝに満足するものならん。況んや悲しき母の遺言すらあるものをや。われは奮ひ立ちて、自からわが意氣地なきを罵り、萬事の係累を一刀の下に斷じて、明日直ちに上京せばやと思ひし事幾度なるを知らず。されどいつもわがこの決心を遮るものは實にかの袖子の美しき姿なりき。

袖子のわれに對する愛は、今思ひても涙のこぼるゝ程清くあどけなく烈しきものなりき。渠は父母親戚などの言葉を洩れ聞きて、早くもわれを未來の夫とは思ひしなるべし。女心のつゝましき、松原の中の逍遙などにも、それに關したる事は、露ほどもほのめかしたる事は無けれど、わが傍に座り、わが談話を聞き、われとそゞろあるきするを、かれはいかに樂しく嬉しと思ひけん。夕暮にはいつも沼の畔に行きたまはずやとわれを促しぬ。

この散歩ほど樂しきものはあらざりき。早春になりて、根芹、若菜などの萌出づる間を、われ等は人無ければ、手を組合せて、いろ／＼と罪無き事を語り合ひつゝ、沼の入江のちらと見ゆる、松原の少し絶えたる處に行き、恰もわれ等の腰掛けん爲に設けられたる如き一つの大石に、二人身を並べて憩ひ、

あるは夕日の微かに芦荻の梢にさし残りたるを指し、あるは古城趾の上に出でたる夕の星を仰ぎながら、互の顔の薄暗くなるまで、われ等は餘念なく語り合ひぬ。

かゝる事を語りし事もありき。

『今日の御手簡は東京の御友達！』

『野村といふ……。貴嬢は知りたまはぬか。かの郡役所に出で、居る人の長子……』

『如何なる事書きて寄越し給ひし！』

恰もその手紙を懐にしたりければ、われは出してかれに示しぬ。その手紙には、慷慨悲憤せる言葉みちくして、わが因循を罵る言葉さへ書き聯ねられぬ。

『酷き事を』

と、袖子は『徒に鳥無き里の蝙蝠となり』といふ語を指して笑ひつゝ言ひぬ。かくて二人とも黙してありしが、我ふと『東京に行きたしく、まことにかゝる處に埋れては』と、誰に言ふともなく言放ちぬ。

『東京に行きし人に好くなりたるは無しなど、父君は言ひ給ふものを』と、袖子は言ひぬ。

我は黙して言はざりき。

校長の家に移りてより五月目、母に別れてより半年ほど経ちたる後の事なりき。われは忘れじ、その時の事をわれは忘れじ。その時は年若き身の、さして心にも留めざりしかど、そは實にわが一生の道の岐る所なれば……。ある夜、校長はわれに少し話したき事あればとてその居間に伴ひ行きぬ。

『實は今少し早く言はんと思ひたれど、母君の追懐の悲哀もあらんと思ひて、今日まで控へ居たる譯なるが、そは他の事にもあらじ。母君も末期まで心づかひしたまひたる御身の一身上の事なるが』と打出でたまひぬ。わが胸は何故ともなく烈しく震ひぬ。

床の間にはかの子が生けたる櫻の花なつかしくかをれり。

稍ありて後、『御身は年若き身の、東京に出でたしとは思ひ居るべけれど、そはあまりに唐突なるべしと思ふがいか。勿論學資も十分に、監督する人もありて、中學より高等中學、大學と順序を踏みて行くならんには、それに越したる事は無けれど、學資とても無き身の、それよりも師範學校に入學して、次第に高き所に進み行かんと思はずや。』

師範學校！ わが嫌へる師範學校！

『且教育の事業は』と、縷々として校長は説出しぬ。『徒に名を釣り利を希ふ輩には、夢にもその面白さを解する事能はざるべけれど、その國家の根本たる事は、皆心あり見識ある人の口にも言ひ、心にも點頭く處なれば、今更此處にて言はずとも好からん。其上御身にしてみわが言ふ所を容れ、師範學校に入學して、わが教育事業の志をつぎて呉るゝ好意あらば、他にも考へし事もあるなれど……』

袖子！ わが戀しき袖子！

われは迷ひて答ふる所を知らず。

「一生の大事なれば」と、わが久しく黙せるを見て、『急に返答せんは難からんに、二三日の中に否を言ひて呉れ給へ……。よく考へて』と、校長はやさしく言ひしが、其儘話を他にそらしぬ。

これよりのわが煩悶はまことに一方ならざりき。わが前に二岐の路あり。一つは美しく樂しけれど、われを低きに誘はんとし、一つは望多く境高けれど、のぼり行かんこと極めて難し。あゝわれは如何にすべき。樂しく低きに就きて、かの美しき袖子を得んか。高く峻しきにつきて、望ある青雲に登躋せんか。

見よ、汝の周圍は、樂しく美しきもの充たるにあらずや。松原、沼、美しき戀人、小學校、團樂せる家庭、一つとして、圓滿ならぬものはなきにあらずや。これをしも捨て、汝は何處に行かんとする！ 一つの聲はかく叫びてわれを留めぬ。咄！ 汝は弱き心に誘はれて、甘き惡魔の甘言に欺かるゝか。汝の母の死する前までそを憂ひたるを汝は忘れたるか。去れ、惡魔の郷を。奮へ、青雲の心を。汝の前には、多望なる門開かれたるにあらずや。一つの聲はかく叫びて烈しくわれを鞭ちぬ。あゝ我は兩岐に迷へり！

煩悶に煩悶を重ね、迷ひに迷ひをかさねて、愈斷じ難くなりたれば、あくる日授業を終るや否、われ

は沼を渡りて、母の墓に詣でぬ。せめてはその靈の私語を聞かんと思ひてなり。墓には近く詣でし人ありと覺しく、さまざまの花堆く手向られてあり。母上生きてましまさばと思ひて、われはひしと胸塞りぬ。かくて我は久しくその前に跪きたれど、母は何事をもわれに語らず。如何なる判斷をもわれに與へず。只わが胸中に、かの悲しき『われ死なば係累なくて東京に出づる事を得ん』との言葉を、烈しく繰返せしめたるに過ぎざりき。迷ひく、沼の岸に立てる細き杉樹を的に、中りたらば留りて袖子を得ん、中らずんば潔よく去らんと心に誓ひて、小石を三度投げたるに、始めの一つは中りて、後の二つは中らざりき。

われは愈迷ひぬ。

その夕暮、われは一人して長く松原の中を彷徨ひぬ。あはれこの彷徨こそわが身の運命とも言ふべきものなりしなれ。われは夕暮の靜かなる林の中に佇立みて、野村の言葉を思ひ、母の遺言を思ひ、わが未來の望多き事を思ひぬ。清くやさしき戀を捨つるは、身を殺さるゝほど辛けれど、われは爲すべき事業、行ふべき理想を人一倍多く持てる身の、それを犠牲にして、潔く奮ひ立たねばならぬ身なる事を思ひぬ。かくて夕の月のいと微に林を透して、さも淋しげにわが影を照せる頃、われは思ひ定めて、濶歩して林を出でぬ。われはかく潔く奮ひ立ちたる上は、再び煩悶の境に陥ぬ中に、明日明後日といはず、直ちにこの故郷に別れ行かんと決せるなり。

悲しき松原！

『いよく、東京に行かんと決心し侍り……それには一刻も早くと思ひ侍れば、明日……おそくも明後日は……』『明後日……』と言ひし校長はいかにわが申出の唐突なるに驚きたまひけん。されどそれを強めて留めんとせず、やさしく迫らざる言葉にて、功名の念のはかなきものなるを幾重にも言ひて、頻りにその唐突なるわが念を翻さんと勉めぬ。されどわが決心は已に固く、如何ともすべからざりき。

主婦は校長にも増して驚きしか、將又女心のその驚を止むる事能はざりしか。それを聞くや否、わが室に入り來り、縷々その思立の好からざる事を説き、いかにしてもわが決心を翻へさんと勉めぬ。されどその甲斐なきを見るに及びて、さりとてあまり無情とは思ひ給はずや。御身居たまはずなりては、袖のいかに悲しく本意なしと思ふべきにとさへ言ひぬ。それを聞きたる時、わが胸は烈しく躍りぬ。

されどわが一たび決したる心は、留るべくもあらぬが上に、かくと決心すれば、その險しき前途にも、限りなき美しき幻影のちらつきて見ゆるに、われは強めて悲しき心を押し隠して、烈しく引留めらるゝに拘はらず、直ちに出京の準備にと取りかゝりぬ。さらば詮なけれど、それにつけても、家の方の整理はいかに。それを片付けたる後ならばと、校長の言ふを、われは一切前の機屋に托したればと、切抜けて、脚下より風の立ちたるやうに、遂に明後日出立と定まりぬ。

娘はかくと知りてより、姿をわれに見せぬやうにのみして居たりしが、ゆくりなく小屋の陰に眼を赤

くして立てるを認めて、我は堪へ難く悲しくなりぬ。かゝる情に背きても、われは青雲の志を遂げねばならぬか。

萬事時の間に整ひて、其日もやがて夕暮になりぬ。校長は別のしるしにとて、さまざまの料理作りて、丁寧なる別の宴を張りぬ。われは一家の人々の曩の日に引かへて、さもわびしけなる顔を見るに堪へがたくなりたれば、少し酔ひたるを口實に、なつかしき沼に別を告げばやと、そのまゝ松原の中に入りぬ。日は將に暮れなんととして、夕月の微に葉越よりさし入りたるなど、林の中の静けさ譬へんにもなかりき。われは言ひやうもなき胸苦しさを感じつゝ、淋しき林の中を縫ふやうに歩みて、やがていつも來る沼の一部の見ゆる處へと來りしが、見るともなく見れば、そのいつもの石の腰掛の上に黒き一つの影ありて、そはかの子の姿なるをわれは認めぬ。

少女はわれの後にありとも知らずに、暮れ行く沼に向ひて、頻りに歎歎けて泣きりたり。やさしき少女！と思ふとすると共に、全身の脉氷のごとく冷えて、悲しき涙は勝も断るゝばかり胸にあふれぬ。われはわれを忘れて、づか／＼とその傍に行きて、腰をかけしが、堪へ難くなりてそのまゝ少女の手をしかと握りて、その低頭きたる顔にじつと見入りぬ。

娘はわつと聲を立て、泣きぬ。

『泣きたまふな』

と我は愈堅く手を握りつめしが、いよく堪へ難くなりて、いきなり少女の身をひしと抱きぬ。二人の涙は瀧のごとく一つに落ちぬ。あはれならずや、われ等二人の若々しき戀は、この一抱一握の中に盡きて、一度握りたる手と、一度抱きたる身とは、とこしへに相逢ふを得ざりしにあらずや。

『いかなれば東京に？』

と、稍ありて少女は問ひぬ。

『母の遺言なれば』

『妾を厭ひたまひしにては、よも……』

『いかで……御身にわかるゝことのかくまで悲しきに』

と又も堅く手を握りぬ。

『いかにしても行き給はでは』

少女は盡く言ひ得ずして涙を掩ひぬ。

『いかにしても』

言ひさして我も泣きぬ。

林の中はいと靜にて、漸く光を得し夕月の影は、夢のごとく沼の上に照りそひたるが、何といふ鳥か知らねど、今しも芦荻の中を出で、悲しく佗しき鳴聲を放ちつゝ、向ひの芦荻の中にかくれぬ。

其夜林の角にて別るゝ時、娘は忘れては呉れたまふなと微かに言ひて、東京に行きても幾度も手紙を下されと、やさしげに言ひ添へぬ。『いかで御身を忘るべき』と、われは心より誓ひて、手紙は必ず度々寄越さんと諾したるが、あはれそは空しく空中に放たれたる哀しくはかなき言葉にして、われ等二人の運命は此時より西と東に隔り行きたるなりとは誰かは知らむ。

あくる朝、少女を初め一家の人々に渡場まで送られて、我は悲しくも又勇ましく、この穩かなる故郷を去りて、青雲鬢鬢ける都の空へとのぼり行きぬ。わが終生忘るゝ能はざるは、やがて芦荻の陰にかくれ果てたる、赤き帯揚したる少女の最後の小き姿なりき。

七

悲しからずや、われはこの長々しき追懐の跡を偲ばんが爲めに、飄零落魄一領の錦衣をすら着くる事能はぬはかなき身を以て、十二年後に、人知れず、このなつかしき故郷へと來りたるなり。十二年間、我は何事をか爲し、何業をか學び得たると問ふ事を止めよ、鬚多き汚れたる顔と、塵にまみれたる客装とは、充分にその間の長き歴史を語り盡してあまりあるにあらずや。

『許せわが故郷！』

われは又もかく絶叫しつ。

ふと心附けば、身は已に故郷に入らんとする里川の板橋を、今しも將に渡らんとする處なりき。刷毛にて撫でたる如き夕照の色は、已に名残なく消え果て、暮色はなつかしき故郷の土に蔽ひかゝり、森も、丘も、人家も、里川も、皆そのくらき翼の包む處となり果てたり。この橋の畔には、一軒家と名づけられたる小茅葺屋根ありて、そこには老いたる夫婦住み、いつも村童を相手に、駄菓子、心天など賣りたりしが……と、あたりを見廻したれど、更にそれと覺しきものも見えざりき。老夫婦は已に死して、家も亦古き礎も潰えたるかと、われは座ろに心を打たれたるが、猶次第に歩み行くにつれて、なつかしき故郷の半は桑畝菜畦と變り、ところ／＼に見ゆる人家の燈火も、晨星の數ふるばかりいと稀れ稀れになりたるを認めて、いよく胸も震ふやうなる沈み果てたる悲哀をわれは感じぬ。なつかしき故郷！ 汝も亦わが夢みたるものにはあらで、その地を出でたる一人の青年が、悲しき浮世の歴史を繰返すとする間に、幾多の變遷幾多の盛衰を経て、又全く變り果てたるものと爲りたるか。

薄暗き夕闇を衝きて、後になら／＼と物の轟く音きこえたるが、機廻りの車を曳きたる二人の男は、おもしろけに語り合ひつゝ、その儘われを掠めて行きぬ。

『今日はいつともより少し遅し』

『渡場にて手間を取りたれば』

『それにしてあの渡船場にて見たる女は非常なる別嬪ならずや』

『まことに』

『兼的の末の妹よりも美しと思ふが……』

『あれ程とも思はねど、兎に角別嬪なりしには相違なし。それにしても何處あたりの娘なるべきか』

『身装より推して見れば、いかにしても田舎の者とは思はれず……。先町の中等住しの家の娘あたりが的なるべし』

われは車の後につきて、その話を聞きつゝ行きぬ。われも一度は戲に前の機屋の長子に伴はれて、この車を曳きて、機廻りといふ事を爲したる事ありたりき。

『兼的は養蠶とかにて、暴利を爲したるよしなるが、眞實にや』

『此たびの暴利は餘程大額なりしと聞きぬ』

『いかにしても大きな處には、敵はぬものなり。それにしても、兼的ほどに金が出来れば、最早寐て居ても儲かるゆゑ、占めたるものなるが……此方奴等は……』

『その上御當人は寐るどころか、我輩よりも一層金儲には抜目なく働き居れば、尾澤家も段々財産の殖ゆるばかり、まことに今の處にては、萬々歳といふものなり』

尾澤家！ この一語によりて、この二人の評判し居れる兼的といへるは、實にわが幼時の友なる前の機屋の長子兼太郎なる事を知りぬ。

『されどよく爲たるものにて、此頃そろ／＼議員にならんとて、縣會に手を出し始めたれば、運動費や何やにて、少しは金も飛び出して行くやうなり。金も動かさずに置きては、天下の寶を腐らすやうなるものなれば、時にはそのやうなる眞似して、金を遣ふも天下の爲めなり』

『されどおのれ等は、議員などにはいかにしても爲りたしとは思はねど』

『そこが面白き處なり。財にても少し出来れば、議員にでも爲りて、威張りて見んと思ふ處が面白きなり。桐生町の酒屋の主人は、それが爲めに、數代連綿の身代を只五六年の中にもみつゝして仕舞ひぬ』

二人の話は暫く絶えぬ。われはわが友の議員の運動を爲せる事を、ゆくりなく此處に聞き得たるをおもしろしと思ひぬ。かくて車はさびしき田舎道を、がた／＼とあたりに響きこころがり行きたるが、二人は又話し出しぬ。

『それにしても兼的の處の總領の姉は、此頃は如何にせしや。まだ内に居れるにや』

『否一月ほど前、男をこしらへて、仙臺とかへ逃げて行きたりとか聞きぬ』

『まことあの女にも困り者ならずや。年は最早三十五六にも爲りたらんものを。よくもあの年にて、耻も外聞もなく、そのやうなる不行跡の出来たるものなり。あの女の噂は、最早聞き倦きたる程なり』
『先所の名物の一つならん』と、相手の男は笑ひて、『先初めに嫁ぎたる處が足次の大盡、次が町の荒

尾、次が桐生の機屋、次が學校の教師、次が足次の百姓……本式の婚禮をしたる處ばかりにても五軒、その他娘にて居りたる時一人、あの時に一人、あの時に一人、それに今回のを交せて、情夫が五人、都合十人、何といふ女にや、高が知れぬ……』と、聲を立て、高らかに笑ひぬ。

われも古城趾の月夜に、その女に抱かれて、烈しく手を握られたる事ありたりきと思出して、可笑しきやうなる、悲しきやうなる、何とも言はれぬあやしき感に打たれたるが、今しも恰も路の二つに別れたる處に出で、二人は左へと曲り行きぬ。われは先わが家の跡を訪はんと思へば、そのまゝ右に折れて、又少し左に曲れば、廣き一帯の空地は、もとの如く前に見えて、その角に立ちたる鴨脚の大樹は、いよ／＼高く大なる枝を、暗き夕闇の空にひろげて立てり。われ嘗て此處にて、機屋の長子と他の二三の子供等と、烟硝を買ひ、花火を作りて、いと面白く打揚げたる事ありたりき。又風の吹く日、この樹陰に立ちて、銀杏の實の落つるを待ちつけて、他の子供等と争ひ拾ひたる事もありたりき。かくと思へば、今更に幼き頃の事なつかしく、闇の木陰も猶立去り難き心地して、暫しは其處に佇立みしが、鴨脚の樹を去ること數歩ならざる處に、一つの地藏尊のやさしき顔して立ち給ひし事をふと思ひ出したれば、其儘踵を進めて、草深き小路を覺束なくたどり行きぬ。果して！地藏尊はその路の傍に立ち給へり。されどやさしき顔したる首は、如何しけん、あたりには見えざりき。且此頃は詣づる人も無しと見えて、草は御肩にも及ぶばかり、高く深く茂り合へり。またも追懷の情の烈しく胸に迫り來るを覺えし

が、ふと頭を擧げたる我は、わが前なるひろく／＼とひろがりたる田野に、いまだ登らざる以前の月の微明の、いとたえ／＼に及べるを見ぬ。東の空を隈取りたる新田村の一簇の樹影は、さながら印せられたるもの、如く黒くこんもりと顯れて見ゆ。

あはれあれ果てたる故郷は、今しも月の光にならんとするなり。

わが故家の跡は、最早此處より遠からず。柴の垣と芋畑との間を暫しが程過ぎて、舊城の外曲輪の堀なりし土橋をわたり、せまく物凄き小き切通を過ぐれば、二三の燈火の柴垣の間、女竹の藪の絶間、曲り行く路の角などに、ところ／＼ちら／＼と散在せるを認むるなるべし。その中の一つは、わが故家の跡に住める人の燈火なり。あゝまことに故郷ほど人の心を動し人の胸を轟かすものはあらじ。ことに飄零落魄したる身なるをや。われはその柴垣の傍を過ぐるにつけて、こゝに昔不幸福なる人の住みたりし事を思ひ、そのせまき切通を過ぐるにつけて、わが昔此處を過る度毎に、恐しく物淋しく感じたる事を思ひしが、漸くその故家近く来るに及んで、胸はいよ／＼烈しく波立ち始めて、未來も過去も、近きも遠きも、皆一つになりて、眼前に浮び来るやうに思はれ、さまざまなる追懷は、何を思ひ出すともなく、走馬燈のごとく、いと早くわが心頭をめぐり行きぬ。われは一步々々近く行きて、西隣の柴垣の前に佇立みしが、そこよりはわが故家の棟は、歴然としてわが眼に入れり。されど其處には一つの燈火の影も見ざりき。如何にせしと怪しく思ひしが、恰もあたりに人の氣勢なかりしを幸ひ、そのまゝ柴垣と柴垣

との間の細き徑を縫ふやうにして、こつそりと拔足してたどり入りぬ。

門前の老梅は依然として立てり。

愈近くに及びて、わが不思議は全く解けぬ。わが家は荒れ果て、今は住む人もあらずなりたるなり。わが家をわれより買ひし人の今何處にか去りし。われは進み入りぬ。われは今のこの家の有様の摧破に着手せるものなる事を漸くにして知りぬ。今一二日ならずして、わが家は荒れたる畑とは爲らんとするなり。

記念多きこの家！

と思ふと共に、涙ははら／＼と兩眼より落ちぬ。われはせめてはその跡をなりと見ばやと、草鞋のまゝ摧破せられたる家の中に進み入りぬ。月は已に登りて、その明かなる光は、壁の破れたる絶間より、ところ／＼いと凄しく射し入れり。ふとわが影の破れ果てたる床の上に長く淋しげに映りたるを見て、われは慄として佇立みぬ。母の最後の悲しき遺言は、今更のやうにわが胸を刺して、それに連環したる校長の言葉、袖子の姿など、むら／＼と悲しき心頭に浮び出でぬ。今更我はわが失敗の歴史を思ひ出さじと、心の中に獨り叫びて、自ら下唇を咬みたれど、都にてのわが悲しき歴史は、潮の海門に押寄するが如き恐しき勢にて、烈しく襲ひ來りたれば、それを悉く堰き止むること能はざりき。われは愚なる身！腑甲斐なき身！と、われは遂に泣きぬ。あゝいかにせむこの胸苦しさを、この悲しさを、この情なさ

を、この心細さを。

月は昔の栗の梢を洩れて、まともに家の中に蹲踞せるわが身を照せり。あゝ月！ わが幼き頃この椽側に座りて、母と共に蚊遣火を擁しながら、いろ／＼と未來の空想に耽りたるも此月ならずや。薄、團子、芋の子などを供へて、戸外の虫の音を聞きながら、未來の好運を望の夜に祭りたるも、この月ならずや。然るに今この同じ月とこの同じ光とは、孤影蕭然として來りて故郷の敗屋の中に佇立める一孤客のはかなき身をば照したるにあらずや。

垣の外には虫聲雨のごとし。

かくてわれはいかに深き感慨の情と、いかに悲しき追懷の念とを以て、母の最後の室となり、わが空想の書齋となり、夜學會の一室となりたるこの敗屋の中にさまよひ歩きたりけん。われは暫しはその一敗屋の中を立去るを敢てするに忍びざりき。されど漸くに思返して、それより裏の栗の樹の陰に佇立み、芋畑なりし土手の草原の中を分け、水草に埋れたる廢井の底に微にやどりたる月の影を窺ひ、遂に思ひ断ちて、やがては草原となり果つべきなつかしきわが故家の跡を去りぬ。

西の隣は家も無くて、全く畑となりたれど、東隣には未だかの奥女中を勤めたる富める寡婦の住めりと覺しく、燈火の影さやかなる月光を隈取りて、微に雨戸の隙より洩れぬ。われは其處をも過ぎて、やがてわが友の住める機屋の黒塀の處へと來ぬ。全く昔と觀を異にして、その宏壯なる住居は、あたりの

荒れ果てみだれ果てたる中にいと盛なりいと面白き異彩を放てり。門も昔より高く、黒塀も昔より高く、白壁造の立派なる土藏は、三つまでその構内に並べ建てられて、月の光は今しも右側の白壁に眩きばかり照りわたれり。住居の構造も更に長く東に延びて、昔足輕長屋のありたるあたりも、皆この黒塀の中に圍まれたるが、其東の外れには、客座敷とも覺しき欄干を取り廻したる高き二階造一棟いと立派に月の光にあらはれて見えぬ。曩の噂に聞きたらんやうに、いよく身代は大きくなりて、今はわが故郷に覇を唱ふるやうになりたるなるべし。それにしても友は今いかにか爲せる。友のやさしき母は今も猶健在なりや。かの妹等も皆大人くなりて、いづれも人の妻とはなりたるならん。われもかく落魄せざらんには、一夜を友と語り明して、昔の幼き時の樂しき物語にても爲すべきに……。ふと烈しき犬の聲に驚けば、わが脚下には一つの黒き犬飛び付くやうに吠えかゝりぬ。われはそを蝙蝠傘に拂ひ退けつゝ、急ぎて向ふへと立去りしが、ゆくりなくわが幼き頃、初めて此處に移轉し來りたる時も、今のやうに烈しく吠えかけられて、聲立てゝ泣きたる事ありたりきと思ひ出して、かの犬はその頃より幾代の孫にや當りたらんなど思ひぬ。

お厩の跡も影はなくて、徒に芋、大根、菜などの夜露を帯びて、美しく月に煌きわたるのみなりき。傍に小き稻荷の社ありて、その前なる草原は、われ等のよく獨樂當を爲したる處なりき。これより路は草原と畑との間を縫ひて、わが夏の日に蜻蛉のお廻を呼び廻りたる處、戦争ごつこをして敵の大將を麥

畑の中に埋りやりたる跡などを過ぎ行きしが、ふと四辻を爲したる路の彼方より、町に買物に行きたる歸途らしき二人連の女、さも楽しいけに物語りしつゝ歩み來ぬ。

『今よりかく薄ら寒くては、今年の冬もさぞ凌ぎかぬる事ならん』

かく言ひしは、年老いたる聲なり。

『十三夜も過ぎたれば、冬の來るも早程もなし。それにしても、まことに昨年冬のやうに寒くては……それを思へば……』

こは二十七八歳ほどの女の聲なるが、早月の光の寒きに、そよろ身を震はするやうなりき。

『屋敷もかく荒れ果てんとは思はざりしに』と老いたる聲は言繼ぎて、『昔は此處等邊は、以上方の屋敷幾軒ともなく連りて、畑などは見たしとて無かりしものを』『まことに士族は皆何處かへ行きて、百姓などの此頃のやうに入込むやうになりては、最早次第に荒行くばかりなるべし』

この聲の、このさえたる調子の、會てわが聞きたるものに似たるやうなりと思ひしが、將にその二人の群と行違はんとしたる時、ちらと月の光に見たる我は、その若きはわが友大村の妹にて、その老いたるは、われより二級ほど上なりし杉浦といへるわが最も好まざる男の母なりしといふ事を知りぬ。二人も亦わが方を見たれど、その昔の空想兒の一人なりとは更に思ひも付かざるさまにて、猶語りつゝ行き過ぎぬ。あはれかの娘も、今は杉浦の妻となりて、背に子を負ひて、姑と共に、月の夜に街に物買ひに

行く身とはなりたるか。

路は右に曲りて、又一ところ人家の連れる板倉へ通ぜる大道の前に出でぬ。これを一步だに越えんには、早其所は古城趾にて、わが遊びたる芝生、茶菓實採りに行きたる隄など、皆わが前にははれ出づるなるべし。されど我は未だ夕餐をも食はぬ身の、少しく飢を感じたれば、そのまゝこの街道を少し行きたる所に、通行の旅客に、有合せの肴にて、飯を賣りたる中老夫婦の芦洲張ある事を思出し、今も猶その店あらば、そこにて食はばやと、その月白き街道を右に曲りぬ。

路の中央に、彼方より此方へと芦洲にて天を蔽しものありて、やがて眼に入りしは、今も燈火の光かどやける其家なり。行通ふ人絶えぬ街道とて、愈榮え行きたるなるべし。店には、柿、栗などを并べて、その奥に焼豆腐の煮附、烏賊、馬鈴薯などの有合せの肴を備へ、傍には惣嫁の四斗樽二つまで置かれたり。客の休むべき長き腰掛、子供を相手にせる駄菓子箱など、いづれも昔のまゝにて、漸う三年ばかりを経たらんかと思はる。主婦も少しは老いたれど、いと健やかにて、愛想の好きも、取扱の親切なるも、更に昔に變らざりき。わが店に入りたる時は、長き腰掛に馬方らしき四十五六の男頻りに酒を傾けつゝ、聲高く主婦と物語りして居たりしが、わが誂へたる夕餐の準備を主婦の爲せる間に、腹巻よりちやら／＼と錢攫み出して、今日は此他に無ければ、跡はこの次と言ひつゝ、踏々踵々として出て行きぬ。主婦はそれにも悪しき顔はせず、難有うと世辭よく言ひて、その腰掛の上の文久錢十文錢な

どの交りたる錢を數へく、店の片隅なる長き竹筒の中に入れしが、やがて熱く爛のつきたる徳利一本と、焼豆腐と烏賊の煮付とを盛りたる皿とを載せたる膳を、お待遠さまといひつゝ、わが前に置きぬ。

我は一杯二杯と傾け始めぬ。

『お客様は何處？』

姿も身装も變りたれば、主婦は會てよく遊びに来つる十四五年前の悪戯の一少年を記憶せざりき。我はさらぬだに酒量なき身の、空腹に沁みわたる酒に、早少しく酔ひ心地になりて、

『東京の者なれど、十年程前に、此處に来て、一年ほど住みたる事あり。この店にも、よく來ては、酒を飲みて、婆様の世話になりたるものなるが、婆様は最早忘れたるにや』

と笑ひつゝ言ひぬ。

『十年前に一年ほど……』と、主婦は頻りに首を傾けしが、老いたる記憶を漸く思ひ出したるごとく、

『さらば……さらば御身は福井氏に來て宿するたる學校の先生にや』

『よく覚えて居れり』

と、我はをりよしと思ひて、かくまぎらはしつ。

『あの先生様なりしか、その頃は大層御最良になりたるものを、暫しにても忘れては濟ぬ事に侍り。』

其後藤岡に居たまふと聞き侍りしが、今も其處に住み給ふにや』

我は今は東京に歸りし事、今宵は用事ありてかく遅く此處に來りたる事など、心にも無き事を饒舌りしが、やがて主婦の健にてこの上なく喜ばしき事、店の繁昌して其頃よりは廣く大になりし事など言出せしに、主婦は皆様の御蔭様にてと、喜ばしけなる顔色を爲しぬ。

われは次第に故郷の人々の消息を探りはじめぬ。

『久しく來らざりし事とて、随分變りたる事も、珍しき事もあるならんが、今は小學校の校長を誰の勤めて居れるにや』

『杉浦様』

『評判はよきにや』

『あまり好しとはあらねど、師範學校も卒業して、永年子供をもあつかひ給ひたれば、先々と人々許し居り侍り。されど御身の居給ひし頃の加藤先生とは比べものにならぬよし人々申し居り侍り』

『大村は』

『大村先生は、町の方の校長に、つい二月ほど前爲られたるが、これは杉浦様よりも評判よくて、萬事如才なく立廻りたまへば、町にても屋敷にても、あの先生を悪しく言ふものは一人も無し』

『妻君は何處より來りし』

『それ、ぢき親類の、何と言ひしか、それ長……長田の總領娘！二人は幼き頃より仲好にて、大村先生には従妹に當れるものゝよしなるが』と言ひ懸けしが、やがて又、『先生方の内方にては、あの内方ほど、美しくすぐれたるはなし。いつも好く坊様を負ひて、此處を通り行きたまふが、姿色といひ、顔容といひ、まことに何處と點の打ち處一つ侍らず』

『子供は幾人あるにや』

『總領が嬢様、その次が又嬢様、その次が坊様、都合三人』

われは黙して昔を思ひぬ。

『その上、まことに』と主婦は言葉をとどめず、『大村先生の家ほど、厭なる紛々のなき穩かなるよき家は、この御屋敷中にも少きなるべし。御姑様は二人とも此上なき御人よし、奥様は今も言ふ通り學問も相應に御出來なざる美しき御器量、且那様は且那様にて、あの通りやさしく従順なるよき性得なれば、これと言ひて、何一つ申分の無き御家なり。その上御嬢様も二人とも御美しくて、こたびは坊様さへ御生なされたれば、いよく申分なき……』

此時わが眼には、美しき袖子の姿浮びて、松原の中の穩なる生活、夢のごとく見えぬ。われも校長の言葉に従はば、大村の如き楽しき世を送る事を得たりしならん……と思ひかけしが、否今更なる愚かなる愚痴はこぼすまじ。われはいかに飄零落魄したりとて、わが運命に従ひて、わが天職を盡すことを怠ら

ざりし身なり。一生を楽しく穩に送たりとて、五十年の後、犬のごとく死し了りては、あはれ果して何の甲斐があらん。われはかゝる弱き心を去りて、斃るゝまでは、わが天職を盡さではやまじ。われはかく絶叫して、傍なる満ちたる盃を飲み干しぬ。されど戀しきは袖子の姿、かなしきはわが初戀！

『山野はいかにせし』

われは心靜めて又問ひかけぬ。

『山野とは伴木の角の……さなりあの方は赤生田の學校に出で、居たまへり』『杉山は』『杉山様も當郷の方に』

ふとわれは思ひ出して、『かの羽田の老先生は健在なるにや』と問ひぬ。こはわが漢籍を教りたる黄楊の樹の老師なりき。『否、かの老先生は最早七八年前に歿りたまひぬ』と老主婦はいと靜に答へつ。

やゝ暫く黙しぬ。われは酒をやめて、山のごとく盛りたる茶椀の飯に箸をつけ始めぬ。主婦は立ちて、茶の熱きを持來て、傍に置きぬ。

『その外老婆は知りて居るや否や知らねど』と、茶椀を片手に持ちながら、遂に思切りて、『松原村の小學校の校長をして居たる島といふ人はいかにせしか、知らざるか』

『健在にて暮し給へり』

『いまだに校長を爲してゐたまふにや』

『名義は未だかの人のなれど、子息は先頃師範學校を卒業して歸り來りたれば、今は樂隱居にて暮し給ふならん。最早嫁の君をもむかへ給ひたれば』

『あの子息に姉のありたる筈なるが』

平氣にて尋ねたれど、わが胸は烈しく波立ちぬ。

『あの姉！ さなり、袖といへる美しき娘ありたり。あの子は八年ほど前に、足次の校長とかいへる人の處に嫁きたれど、その翌年とかに、初産むづかしくて、遂にそれにて死したりとか聞き侍りぬ』

わが全身の血は烈しく漲りぬ。われは殆ど左の手の茶椀を落さんとしたり。あゝかの女！ わが初戀の少女！ 夢にも見現にも思ひたるかの少女は、已に八年前にこの世に背きて、とこしへの樂しき國へと行きたるなり。わが身の愚なる、わが智の淺墓なる、それをも知らずに、忘れじと誓ひし少女の已に已に死したるをも知らずに、徒らに紅塵にまみれ、空しく名利を争ひたるなり。わが涙は胸をつきて、最早飯一粒喉に通るべき心地はせざるに、その儘箸を捨て、了ひぬ。老主婦は驚き怪みて、いかにか爲たまひしと問ふ。少し心地悪しくなりてとまぎらはしたれど、涙は隙間なく胸に込み上げ來れるに、藥にてもと立騒ぐを押し靜めて、急ぎ會計を濟して、われは戸外に出でぬ。

さやかなる月の夜なりき。向側の家屋の影は明かに地上に落ちて、歩み行く人の顔いと白く、吹わたる夜の風いと淋しく、ところ／＼の草原の中には、寒き夜露を喰ひたる虫の音いと微かに聞えぬ。われ

は殆ど走るやうにして、古城趾の草原の中に驅入りしか、傍に見る人無ければ、胸の空かんばかりに思ふさま泣きぬ。

われは曾て聞きぬ。烈しく人を戀ふる少女の、思叶はずして思はぬ方に歸ぐ時は、その初産の時に於て、必ず死するものなる事を。こはまことに荒誕なる言葉なるべし。されど我は今ゆくりなくその言を思ひ出して、身に染みわたるほどの悲さを覺えぬ。少女は清くやさしき心の、この不束なるわれを忘れず、ひそかに戀慕ひつゝ死したるにはあらざるか。

『許せ、わが袖子！』

われは思はずかく絶叫しつ。

十四五年前空想ふかき一少年を逍遙せしめたる古城趾は、いよく益荒れ果て、草原は草原に接し、荆棘は荆棘と連り、昔の名残なる堤はつき崩されて畑となり、叢生したる古木は切倒されて野と變り、ところ／＼に残りたる礎さへ、今は些の痕跡をも留めずなりぬ。舊知事公の家扶ながし、曾て七八年前に立派なる計畫を立て、ひろく荒れたる城趾を開墾し、そこに桑を培植せんと企てしが、荆棘の甚しきと、資本のつゞかざるとに失敗して、大なる傷痕を負ひて手を引きしより、敢て之を嗣がんとする大膽者もなく、只纔に貧しき農民が、租税の低きに誘はれて、路に接近したるところ／＼を、いと絶え／＼に開墾して、そこに、收穫乏しき麥、陸稻などを植えたるに過ぎざりき。されば本丸あたりは

愈あれて、ほとく、狐狸の巢窟とはなりぬ。

月は夜なく、草間の虫聲と、立なびく尾花の白き穂とのみを照したるが、今宵は珍しくもこの細き路をたどり行く一人の孤客の姿を照して、少なからざる意外の感を起したるなるべし。ことにその孤客は、十四五年前に、限りなき空想と燃ゆるが如き希望とを抱きて、この古城の趾を逍遙ひ歩きたる一少年なる事を知らば、愈あやしき感に打たれざる事能はぬなるべし。少年の胸には、清くあつき思ありて、その心頭には向上の念盛に燃え、全身皆希望と光明とを以て満たされたりき。然るに今孤客の胸には、沈みたる絶望の念鉄槌のごとく重く冷に横はりて、涙と暗黒とは、名残なくその心を占領したるにあらずや。

この光明と暗黒！

この二つのものゝ中に、はかなき人生は横はりて、この二つの結びて解けざる疑問の中に、このはかなき人生は電のごとく過ぎ行くなり。あゝ暗黒！ しかも絶對の暗黒なきをいかにかせん。あゝ光明！ しかも絶對の光明なきを如何にかせん。人はこれが爲に苦み、これが爲に樂み、これが爲に泣き、これが爲めに笑ひ、これが爲めに喜び、これが爲めに嚙む。しかも笑ふ者まことならず、泣くものまことならず、樂しむものまことならず、嚙むもの又まことならず。月はこの疑問を外にして、いとさやかに照りわたれり。

孤客なる我は、この疑問を外にして夜毎く、人間の上によさしき光をそゞぎ給ふ同情深き月の影に伴はれて、昔わが同人と一卷の詩集を作りたる能見堤の方へとたどり行きぬ。草深くして幾度われは倒れんとしたりけん。されどそを押分けく、辛うじてやうやくそのなつかしき隄の上に達しぬ。

夢にのみ見たる戀しき沼は、明かなる月の光に照されて、さながら夢中の景のごとく、いと美しくわが眼下に横れり。幼き時遊びたる芝生は彼處に、さまざまの空想に耽りたる堤は其處にと、見るよりわれは烈しく撲れて、尾花の穂のさびしく月に閃ける裡に、倒るゝごとく身を投じぬ。わが悲しき母を葬りたる寺の杉森は、沼のちらと光りたる岸に、一ところこんもりと黒く月の夜の空を隈取りて見え、わが一生の運命を定めたる悲しき松原は、對岸一帯の地を依然として黒く縁取りて見ゆ。十二年前かの少女の家の一族に送られて、この眼下の渡頭を別れ行く時は、我は夢にもこの月の夜あらんとは思ひ懸けざりき。かくと思へばその前夜松原にて少女と泣きて別れし事、互に忘れじと誓ひし事、その少女は已に八年前に死したる事など、早き走馬燈の風ある夜半にめぐるが如く、眩しくわが心頭に集り來て、それよりそれへと殆ど盡くる處を知らざりしが、暫く経てば、大空を飛び行く雲影の、一しきり亂れて一しきり靜り行くやうに、漸くその追懷の情も薄ぎて、こたびは鉛のごとき重苦しく怛しき感、代りてわが心の底を占めぬ。そは昔校長に聞きたる功名榮華のいかにはかなきかといへる念なりき。

思へ、わが少年の時この隄に集りて、互に空想を語り合ひたる友今皆何處にかある。其時は誰も彼も

未來は大臣大將とならんと誓はざるもの無りしに、あはれこの未來といふ二字のいかにはかなくいかに空頼めなる大なる誘惑なる事か。激昂憤慨せし野村は、五年の眞面目なる修業の後、漸く人生の不調子と人間の不完全とを學び得て、花に嘆き月に哭したる餘は、人生の事爲すべからずと嘆じて、悲しくも浮槎萬里の天涯に遊び、未來の大畫工を以て自ら任じたる林は、貧賤十年の失意と戰ふて、刻苦勵精、會て一日も怠る事無しと雖も、その瀟洒古雅なる畫は、未だ彫彩華麗を好める世人の好尚に投ずる事能はずして、猶妻子と共に窮巷の中に飢えんとし、自ら大將を以て任じたる原は、南北に漂ひ、東西に走りて、今はその行方をさへ定めざるにあらずや。唯一人櫻井のみは、故郷の人の行末は知事に爲りて歸るならんと言ひたるに違はずして、巧に蝸牛角上の争に勝ち、八年の苦學漸く大學を卒業して、將に要路に用ひられんとしたれど、陥穽多く邪徑に富めるこの人世は、果して渠のやさしき心と烈しき情とを容るべきか。茫々たる天地、促々たる人生、あゝまことに我は何をか信じ、何をか頼まん。『止むなし止むなし、われは只わが信ずる處の天職を奉じて、斃るゝまでは猛進せんのみ。』

かく我は絶叫しつ。

世の青年の多くは大村、杉浦の如くおのれの一生の榮華に汲々たる間に、われはわが空想、わが財産、わが戀、わが悲哀、否わが一生をさへ犠牲に供して、刻苦精勵以て爲すあらんとする潔き身ならずや。かくと思へば、今迄の涙多き迷懷も、心弱き愚痴も、堪へがたき悲哀も、拭ふがごとく晴れ行き

て、迫り勝なる胸も、やゝ光風霽月の趣をあらはし始めたるに、われはそれともなく、君不見黄河之水天上来、奔流至海不复回と聲高かに吟じ出しぬ。

會て若々しき望滿ちたる聲によりて誦せられたる詩は、十二年の後に、しかもこの明かなる月の夜に、その同じ人の口によりて、又も此處に吟じ出されたるにあらずや。しかして芦荻に圍れたる沼は、昔と更に異なる處なく、縹渺幽遠なるその聲の餘音を受けて、青白き光に照されながら、靜かにわが脚下に横りたるにあらずや。震ふが如き孤客の吟聲は、寂寞極れる夜の空氣の中に、ある時は沈みある時は激しつゝ、いとあはれ氣にいとおもしろく響き行きたりしが、五花馬、千金裘、呼兒將出換美酒、與爾同銷萬古愁と吟じ終りて、その餘聲のさびしく沼の對岸の松原の中に消え行くを見詰めたる我は、烈しく悲しき興の起り來るに堪へかねつゝ、亂草荒蕪の間を踏みしだきて、わが初めてかの子の蝙蝠傘を見たる松原の中を横斷し、さながら物に狂へるものゝ如く、茶畑のひろく連れる間を、かの郷先生の家の方へと走り下りつ。

黄楊の樹の股の凹處には、かの無名の祭神猶も祭られて、小さ紙の御幣月の光に微に見えぬ。昔の事を思ひて、暫しはその木陰を立去がたき心地したりしが、一刻も早く母の墓に詣で、沼を渡りて、かのなつかしき松原の中に入らばやと思へる身の、そのまゝ其處を去りて、燈火の影いと疎なる人家の間を、あちこちとたどり、遂に昔の堀の跡なる土橋をわたりて、野のひろくとしたるところに出で

ぬ。

天高く月白くして、風は薄ら寒くわが旅の衣よりかけて、路傍の桑の畝を吹きなびかせり。之に加ふるに、嘹唳たる雁聲は遠く明かなる空をわたり、蕭疎たる砧聲はさびしく荒れ果てたる村に聞えて、さらぬだに愁人の心を攪せるに、われは思あり涙ある身の、この悲しき秋の夜をいかにかせむ。われは殆ど傷の斷ずるがごときを覺えぬ。かくて猶行くとする間に、路は再び小暗き一村の樹影の中に通じて、やがて一つの山門の杉樹の中に物凄く立てるを見て、わが胸はひしと塞がりぬ。あゝこは母を葬りたる寺なりき。

風はさびしく深樹をわたりて、婆娑たる樹影は月とおもしろく捉迷藏かくれんぼを爲せり。山寺の墓地へと歩み入りの時、われはいかに深き感慨に打たれたりけん。そこには母上の墓あり。われを戒めわれを勵したまひたる母上の墓あり。母上は草葉の陰にて、父上と共にわが秀れたる人と爲るを見て喜ばんと言ひ給ひしが、今のこのわがあはれなるさまを、さぞや甲斐なしと見給ふならん。我は進み入りぬ。墓は南の沼に面したる處にありて、他の墓地は悉く暗き樹影の中に埋れたるに拘らず、月はまともにその幾坪の地を照したれば、母上の墓のあたりは、いと明かにして、恰も白晝のごとくなりき。われは前に跪きて、久しく頭を擧ぐる能はざりき。

涙は千行に下れり。

あゝ我何をか記し、何をか言はむ。わが小き弱き心には、過去の追懐一々あふれ來て、殆その何たるかを辨ずる能はず、我は只涙のせぐり來て、聲を擧げて泣かんとしたるをおぼゆるのみ。

月は次第に中天にのぼりて、樹影は漸く狭く／＼なり行けり。夜は更けたりと覺しく、林を透して來りたる佛燈の影も、今はいつか微かになり、遠くきこえし砧聲も、いつとは知らず絶え果て、聞えずなりぬ。

あまりに遅くならぬ中に沼を渡らばやと、母の墓に別を告げて、そのまゝ芦荻の影深き渡船小屋の前へと來ぬ。小屋の中には燈火の光猶見えたれど、われは熟睡したる老爺を呼び覺すに、一方ならざる困難を感じたりき。その上渡船は十時を限りとするに、明日來給へと寢惚聲して一度は斷はられたりき。されど渡して貰はずば、今宵町まで歸るか、さらずば野宿せねばならぬゆゑと、強ひて頼みて、漸くにしてわれは舟に乗ることを得つ。老爺は寢惚れたる顔を月に照して、さも／＼眠けなる欠を爲したるが、この夜深に何處より何處へわたり行くぞと、わが整はぬさましたるを怪しみて渠は問ひぬ。川俣に知りたる人ありて、今宵の中にはいかにしても行かねばならぬ用事あるに、この深夜に、まことに御氣の毒とは知りたれど……とわれはまぎらはしつ。

老爺は再び大なる欠を爲しつゝ、長き棹を此方の岸に突きつけしに、船はゆる／＼と銀のごとく動かざる沼の上に泛びて、芦荻の花さびしく夜風に低頭ける間を、いと靜かにたゞよひ行きぬ。再びいつの

日に詣つべきとも知れぬ母の墓は、次第く遠かりて、いつか遂に見えずなりぬ。

『曩の夜も遅く盗賊をわたして、警察より注意を與へられたれば、實は夜深くはわたさぬ規則なれど』と、老爺はふと思ひ付きさまにて、獨語のやうにいふ。

『あやしき者にては決して……』

『否、御身をあやしと言ふにはあらねど、此頃は不景氣にて、盗賊の多ければ』
老爺は又欠を爲しつ。

兎角する中に、舟は向ひの岸近くなりて、一度絶えし芦荻は、又がさくと右に左に戦きわたりぬ。ふと頭上におもしろき聲聞えたりと思ひて見上れば、一行の雁影おもしろく水に落ちて、嘹唳たる聲は、靜かなる月夜の空に、いとさやかなる調を與へつ。

悲しき秋の月夜や。

深夜熟睡を破りたる罪をかへすべくも老爺に謝せしが、我はそのまゝ舟を下りて、直にそのなつかしき昔の松原の中に入りぬ。二三歩にして顧れば、沼は夢のごとく樹の間より見えて、老爺が月光を帯びつゝ歸り行く末には、芦荻を隔て、對岸の渡船小屋の燈火、いとたえなく認められぬ。あはれなつかしき松原なるかな。われは幾度この松原を夢にも見、且ひとり訪はよやとは思ひたりけん。否ある時はこの松原を訪ひてその中にて十二年目にかの女と昔を語り得たらんには、あはれいかにうれしからまし

と、想を逞うしたる事もありたりき。されどなつかしきかの女は、その昔の戀人の再び松原の中にかへり來るを待たずして、とこしへなる樂しき國へと赴きたるにあらざや。悲しきかなと、われは又も思ひ始めぬ。月は松の繁みを洩れて、わが傳ひ行く路は、一筋長くその松原の中に通じぬ。

なつかしき家は最早此處より遠からざりき。松原の少しく稍絶えたる處と、小川の清き水のちよろちよると月に耀きて流るゝあたりを過ぐれば、柴垣にて取圍れたる依然たる家の屋根は、見え初めて、わがよいかの女と逍遙したる芝生も、又その前にあらはれぬ。

その一軒の家屋！

極めて穩かなる世を送れるさまは、その家の周圍のさまにも著しくあらはれて、わが身のかく烈しく變り果てたるに引かへて、柴垣といひ、物干といひ、小屋といひ門構といひ、四疊半の離座敷といひ、更に多くの變化をば呈せざりき。只庭なる槐の樹の驚くばかり大くなりて、その繁りたる枝の、今は家を掩はんとするばかりなると、傍の松原の少しく切開けられて、其處に畑少し作りたるのみなりき。ふと見れば、かの弟は秋の夜長く、猶も机に向ひたりと覺しく、その四疊半の一室には、燈火の光たえだえに、雨戸の隙より洩れて見えぬ。幼き弟よ！御身は今御身と親しかりし一青年の、夜深く御身の家の前に佇立みて、むかし偲びつゝありとは知らずや。

恩惠深き校長は、猶健全にこの家の中に眠れるか。やさしく情ふかき妻女は、今も猶まめくしく立

働きて居ませるか。亡くなりしかの女と共に、をりくはわが事をも思ひて下さる事あるか。われもかの時校長の言葉に従ひて、師範學校にだに上りたらんには、かの女も死せず、われもかく飄泊せずに、大村のごとくいと穩かに樂しき世を送る事を得べかりしに……。まことに校長のかの時の言葉は……と、むら／＼とその時のさまを眼前に描き出しぬ。あはれわが運命の悲しさよ。かのやさしき言葉に従ふ事能はざりしわが運命と天職との悲しさよ。
 我は臆て此處を去りぬ。

それより小學校の昔にも増して立派に建築せられたるさまを見て、わが此處に通ひ來りたる頃の事を思ひ、教へたる兒童も今は大人しくなりたらんなど思ひめぐらせしが、最後に二人してよく散歩せし、別れの前の夜に相抱きて烈しく泣きたりし、沼の見ゆる松原の中へと來ぬ。芦荻は年々に深く茂りて、沼の眺はやゝ狭くなりたれど、二人が慰ひたる大なる扁たき石は猶其處に据ゑられたる儘なりき。

俄に悲しくなりて、我は倒るゝやうに其石に腰を休めしが、其儘顔を掩ひて泣きぬ。月は前なる沼をば満面に照したれど、此處は松の深き處とて、纔かにところ／＼その影を樹間／＼に洩したるのみなりき。夜風は沼の方よりそよ／＼と松の梢をわたりにて、微なる松の響は、夢のごとくわが耳を掠めぬ。

あゝ何ぞこの微かなる松の響の悲しきや。何ぞこの音のわが小やかなる胸の琴線に觸るゝことの烈しきや。その音は——その微かに消えんとして消えざる音は、恰も無限の追憶をさそひつゝして、人をし

て咽びて泣かしむるが如き音なりき。われはこの悲しき音を聞きつゝ、久しく深く物を思ひぬ。

* * * * *

松原に別れんとして、その角の丘の上に立留りたるは、早黎明の光の前なる沼に忍び／＼にさしわたれる頃なりき。われは悲しき故郷に一夜を過しぬ。されど幸にも知りたる昔の友には誰一人とて逢はざりしかば、故郷はわれの秘に來て、ひそかに月の夜を泣き明したるを、更に知る者はあらぬなるべし。今は——今はわかれ行かん。かく言ひしわが胸には、悲しけれど、昨夜のみだれたる如きさまは無くて、新しき一種の勇氣と、沈みたる一種の感興とはみちわたりぬ。われは再びわが前に横れる故郷と、沼と、松原と、松原の中の一軒家とを見やりしが、さらば……故郷よ。わが悲しき故郷よ。いつまでも健在なれ。いつまでもわが母君と戀しき人の墓とを守れ。われは再び烈しき紅塵の中にまみれ、恐ろしき争闘の中に身を投じて、斃るゝ迄は、わが天職を守りて、潔よくこの人世と戦はゞや。かくて我は黎明の光と共に、一夜さまよひたるなつかしき沼、古城趾、松原などに遅々としてわかれ行きぬ。

(明治三十二年七月)

憶梅記

憶 梅 記

あれは二十八歳の夏の事だ。自分は廿日ばかり前から、参違尾勢の地方を、氣の向いた儘そこも定めず逍遙つて居たが、例の氣紛れな心から、不圖木曾街道を通つて東京に歸らうと思ひ立つて、金も無いのに、その深山の中に迷ひ入つて、備つぎにさまざまの艱難を嘗めた結果、それでもその三日目の午後二時頃には、もう碓氷の晴嵐深き間をも越えて、上州安中驛の少し手前の、涼しい松並木の中を、てくてくと歩いて居た。

赤い塵埃が夏の日影に照されて、丁度火事場の跡でも踏むやうに焼け切つて居る田舎道や、尖つた石ころが切れ懸けた草鞋の底に當つて、時々飛び上るほどの痛い目に逢はされる山阪道や、水が欲しい水が欲しいと引付さうな咽喉をかゝへて、漸くとある井戸を昔の驛の片隅に見付けて、急いで其處に行つ

て汲み上げて見ると、水は眞赤な銅氣だらけで、何うにも彼うにも飲む事の出来ない情無さや、行つても行つても木陰の無い田と畑ばかりで、流汗がだく／＼と總身から流れ出る苦しさなど、夏の旅ほど苦しく辛いものはあるまい。けれど此處まで来れば、もう東京に歸つたも同じ事だ。安中……には自分の親しい幼稚馴染の友人があつて、それは東京の美術學校も卒業して、畫も相應に描ける男だが、この春の三月から、この安中街の尋常中學の分校の繪畫擔當の教師になつて来て居るのである。渠は夢にも知つては居るまいから、其處に行つてぬつとこの旅に棄れた顔を出したなら、それこそ何んなに吃驚するであらう。その顔を見るのが……と、自分は何となく微笑まれるやうな心地が爲た。

『安中へはまだ餘程ありますか』

向ふから葛籠のやうなものを荷つて、いきせき歩いて来る五十ばかりの中老漢ちゅうらうの莞爾えんじやくした顔が、何處となく氣に入つたので、自分はいか／＼尋ねたのである。

『もう直きでがんす、この並木せい通り越せや、もう安中はすぐ其處でがんす』

と、後を振返つて、態々指して丁寧ていねいに教へて呉れた。ふと氣が付くと、その指された方向に、松並木の絶間／＼から、美しい榛名の山が、バナラマのやうに現はれて居る。暑い閃々とした日影は、深碧の空にくきりと突立つた鋸の齒のやうな山の上に美しく照り渡つて、風も全く死した夏の空氣の静けさは、又格別の趣がある。

丁度あれも昨年の今時分であつたと、自分はふとその榛名を見て思ひ出した。今尋ねて行く友は、其時は同じ上州ではあるが、此處からは十里も離れて居る桐生の染織學校の繪畫の教員であつて、自分の尋ねて行つた下宿は町の中央の大い下駄屋の二階の暗い一間であつた。自分はよく覚えて居る、友は非常に顔色が悪くつて、元氣が無くつて、——平生も元氣のある方の男ではないが——感情ばかり鋭く昂進して、何ぞと言つては、悲しい味氣ない極端な言葉ばかり吐いて居た。自分はその二階に二晩泊つて歸つて来たが、名残が惜しいと言つて、友は態々汽車で前橋まで送つて来て、二人して利根川に臨んだその公園を散歩した。その時矢張その榛名の美しい山が、眼前に出て居て、その光線の美しさと言つたら、無かつた。自分は其の時友に、自然の偉大といふ事を語つて、畫家と生れたからには、一意その描寫に全力を注ぐやうで無くては、駄目だ。君の今の殆ど絶望の境に瀕して居る事は、僕は善く察して居るけれど、畫家や詩人は、世の人のやうに、全くそれに支配せられてはならないのだ。あの光線を見給へ、あの色彩を見給へ、君はあれを見ても、猶奮起してその十分の一を畫き出さうとは思はないのかと、勵して遣つた。すると、友は厭な眼色で、黙つて自分を見た。その眼色の中には、負けぬ氣と、瘦我慢と、絶望との三分子が籠つて居た。そして暫く經つてから、もう僕には畫なんか描けなくなつて了つたのかも知れないよと、軽く言つて、冷笑を口のあたりに漂はせた。自分は厭な心地が爲て、これがこの友の弱點だと悲しく思つたから、一層強く出て、畫家對自然といふ事に就て態と縷々として説

明して遣つた。友は終に折れて了つて、涙をほろ／＼と膝に落して、堪らなくなつたといふやうに、兩手で顔を掩つて、

『何故こんなに僕は氣が弱いだらう。こんなに氣が弱くては、本當に君の言ふやうに何も出來やしない』と、少し途切れて、『本當に左様だ。君の言ふ通りだ。世の中の小さな事件や、小さな感情に負けて了つて、それをくよく／＼思つて居るやうでは、仕方がありやしない。善いよ、君安心して呉れ給へ、僕は、僕は屹度遣る、屹度畫家の天職と理想とを盡さずには置かない。畫なんざあ描けないなんて言つたが、それは虚言だよ。僕は畫が描けなくなつても、茫乎ぼんや生きて居る人間ぢや無いから、安心して呉れ給へ』と言つた。自分はこの言葉を聞いて、非常に嬉しく、猶いろ／＼と慰め且勵まして遣つた事があつた。

それからもう一年にもなるが、友は實際この畫家の天職を盡したであらうか。

美術學校に居る頃は、非常に元氣で、日に四五枚の寫生は必ず作つて、その驚の大幅などの氣韻と技術とは、殆ど教頭も舌を卷いたといふ程であつたのに……。否、卒業製作が氣に入らぬとて、八分通りまで畫きかけた、縦六尺横三尺の絹を、一刀兩斷に切破つて了つた程の氣焰も有つたのに……。今は地方中學の一小教員に安んじて、(安じて居るのでもあるまいけれど)一年の間に寫生圖一つ作らうとも爲ないとは……。そこに意味が無くてはならぬ。

この友の絶望の原因——自分は思ふにすら忍びない。

二

自分とこの友とは、同じ故郷に生れて、七歳八歳の頃から、垣一つ隔て、互に往來し合つた間柄であつた。稚い時の友達といふものは、成人すると、多くは境遇やら感情やらから段々疎濶になつて、昔の友情を續けて行くなどといふ事は、十の中に一つもむづかしい事であるが、自分とこの友とは、境遇も多少似て居るし、學問も思想も大方一致して居る所から、東京に出てからも、互に絶えず往來して、十日と逢はずに居た事は無かつた。友には父はあるが、遠い田舎に別れて居て、滅多には歸つて來ず、母は姑の氣に入らなかつたとかで、友が生れるとすぐ離縁されて了つたが、最愛の子を憎むべき姑の手に託するをかへす／＼も苦しめた結果、間もなく發狂して死んで了つた。で、友は生の母に生別れをした點から言へば、仇敵とも言はるべき祖母の手で、辛うじて人並に生長したのであるが、その母の遺傳性を受けて、疳癩持の、意地惡の、瘦我慢の、負けず嫌の、それは／＼烈しい感情を持つて居た。その上それを養育した祖母といふ人は、發狂性の嫁をいびり出すほどの我一方の性質の人であるから、友はいよく／＼それに感化されて、益々旋毛曲といふ性質の方へと走つて行つたのであつた。けれど一點何事につけても、涙脆い情の深い所があつて、一度深くそれに交れば、まことに捨て難い思を爲るやうな、極

く好い性質が、その峩々として連つてゐる多い弱點の中に交つて居た。友はいつでも自分に話したが、よく考へて見ると、實に祖母が自分の性質やら自分の境遇やらに大なる不幸を與へたので、この祖母さへ今少し我を立てる事をせず、今少し犠牲心といふものを持つて居て呉れたならば、父も自暴などを起して、小學校の教師などに終らずともよく、母も氣が狂つて死ぬといふやうな事もなく、家も至極圓滿に、身も穩かに生長する事が出来たのであらう。だから自分一家の不幸は、元は祖母の我儘といふ心一つから起つた事で、それを考へると、自分は何だか祖母を疎むやうな心も起らぬではない。けれど祖母が十年一日の如く、母も無い子と、自分を可愛がつて育て、呉れた大恩は、何うあつても自分は忘れる事が出来なくなつて居るとは、情ない身の上では無いかと、慨嘆して自分に語つた事があつた。

で、かういふ風に生長したから、小學校に居る時分から、あの兒は意地が悪いと言つては悪まれ、強情だと言つては叱られ、疝癪持だと言つては嫌はれて、多い友達の中にも、殆ど除物にされて居たが、その他人扱にされた口惜しさが、深くその小さい胸に沁入つて、愛憎の念は極端から極端へと愈々嵩じて行つたのであつた。だから十六歳の時には、もう非常な小厭世家と爲つて了つて、仙人だの、入山だの、釋迦だの、達磨だの、脱俗だのといふ語を覚えて、何でもこの世はくだらぬものと、いろ／＼空想を逞うして居た。自分なども、時々その話を聞かされて、山縣は可笑な事を考へて居ると、稚心にも怪しく思つた事は度々あつた。けれど、一方では非常な立派な人間になりたいといふ心が胸一杯で、同

じ小學校を卒業した朋友などが、東京に遊學にでも行くといふ事を聞くと、涙を流して口惜がる程であつた。譬へば盛に燃えて居る火の上に、烈しく水を注いだと同じ事で、一面は消えると共に、一面に更に烈しく火勢を加へたのであつた。

鉛筆畫の一枚が舊知事公の御目にとまつて、この位畫ければ世話しても好いと御聲がかゝつて、田舎から出て、神田小川町の舊知事公の邸内に住むやうになつたのは、丁度十八歳の時であつたが、友はそれを何んなに名譽にして、何んなに平生仲の悪い友達に誇つたか知れなかつた。十九の時東京美術學校の入學試験に及第したが、それから三年ばかりの間は、別に變つた事も無かつたらしい。只例の厭世的思索を無茶苦茶に書き散した手帳が五六冊殖へた事と、邸の家扶家従を始め、女中下男に至るまで、此處でも皆渠を除物扱ひにして、竊に仙人といふ渾名をつけたといふ事位であらう。渠の生活は非常に淋しく、心細く、物足らなかつたに相違ない。丁度満山の花の中に、松が一本しよんぼりと立つて居るやうに、誰一人相手にして優しい言葉をかけて呉れるものは無い。優しい言葉が無くつては一日も楽しく生活する事が出来ない性質のかれの身に取つては、この他人の中の生活は、何んなに淋しく悲しかつたか知れぬ。人は皆一度か二度逢つて、二言三言話でもすると、もう仲の好い友達になつて、十年も交つたやうな間柄になるのに、自分は何故こんな人つきが悪く、何故こんなに偏僻で、何故衆人のやうに面白く話を爲る事が出来ぬであらうと、身を切らるゝ程辛く思つた事も幾度もあつたのである。

其頃であつた。自分はよくその二階の暗い淋しい一室に行つては、盛に戀の話を爲た。其頃は自分の思想が『センチメンタリズム』に傾いて居たから、戀といふ事を此上もなく神聖なものに思つて、それに聯關して起る空想は、全く天から落ちて來る花のやうなものであると、確信して居た。そして『エルテル』や、西洋の面白い叙情詩などを幾度となく其友に讀んで聞かせた。けれど友は容易に自分の戀の議論には服さなかつたので、戀などといふ者は、汚い者、青年のこれを言ふを耻づるものとばかり、斷じてそれに従はなかつた。

自分は心理の方面から、繪畫の上から、いろ／＼とその説の非なるを駁撃して、盛にその説を唱へたが、其間にも月日は過ぎて、友は二十四歳の春を迎へた。

畫水日記といふものがあつた。それは友は來年美術學校を卒業するに就き、その卒業製作に溪流の奔馳するさまを畫かうと思つて、その畫の研究に就いての日々の考を、日記體に記したものである。その日記をつけ始めて三日目に、渠は實に遺瀨なき戀に落ちたのである。そしてその新につくつた日記は、その烈しい思を散々に書き散した戀の日記となつて了つた。その戀人は及ばぬ高根の花！ 舊知事公分の第三令嬢良子といふ、美しい姿のやさしい心の少女であつた。

三

春の潮のやうにかき亂された友の空想は、二年に跨つて、その畫水日記に書聯ねられてある。始めて自分がそれを讀んだのは、ある秋の靜かな淋しい夜であつた。かくと知つた自分は、何んなに同情を表して、何んなに暗涙に咽んだか知れぬ。繪畫と戀の奮闘、貴族と平民との差別、やさしき抒情的感慨、自分は友の性質に、こんなやさしい處が有らうとは思も懸けなかつたので。

『僕は泣いたよ』

と、あくる日の夕暮、自分は堪らなくなつて、直ちにその暗い室を尋ねて行つて、障子を開けてその顔を見るとそのまゝ、いきなりかう言つた。

『讀んで呉れたかい』

卒業製作の下繪を頻りに彩色して居た友は、振返つて自分を見た。その顔は青白く薄暗い夕暮の色を隈取つて、くつきりと古い大理石像のやうに見えた。

『僕は本當に泣いたよ』

『難有い。僕の心を知つて呉れるのは、君ばかりだ。君さへ居りや！ 君の慰諭さへありや、僕はどんな苦しい世の中でも生きて居られる。難有い、本當に難有い。けれど、君、僕がどれ程深く思つたらとて、とても何うの彼うのといふ事は出來ないのだから、僕はそれはもう心は決めて居る。けれど君も讀んで呉れたらうが、假令戀でも何でも無いにしても、實際僕はあの人に、あんな優しい言葉を懸け

られやうとは、思も懸けなかつた。君も知つてる通り、僕ほど人に愛せられない人間は無い。それが……君、あの人に、あんな優しい言葉をかけられたのではないか。それはほんの一時の心の調子から出た言葉かも知れん。けれど僕のやうな柔しい心に餓えて居るものは、直にそれが忘れ難くなるのは、無理ではないと思ふが……」

『本當だ……』
と自分もさう思つた。

『そして今はどんな風になつて居るんだ』

『何んな風つて……別に變つた事はありやしない。僕は日記にも書いた通り、決して何う爲やうと言ふんでは無いのだから』

『今でも畫を習ひに来るかね？』

『否、此頃は何だか人の眼を憚かつて居るやうで、滅多に畫も習ひには來ないやうになつて了つた。それにしても、いつか君と盛に戀の事を議論して、僕は飽まで戀なんて降らないものだと言つた事があつたが、自分は實際戀と言ふものは、此様なものとは思はなかつた。僕はその戀の力で、今度の卒業製作は、屹度天下を動すやうなものを畫かうと思ふ』

友の顔には平生は見る事の出來ぬ活氣が燃え上つて、青白い血色の中にも、何處か氣高い品格が現れ

て居るやうに思はれた。これは戀の光であらう。

『本當に立派なものを畫き給へ』

『畫くとも……僕は斷じて畫かすには置かん。今の學校の教授連中などに、思もつかない斬新なものを畫いて、屹度日本の繪畫界を驚かしてやる』

こんな氣焔を、此友の口から聞いたのは、自分はこれが始めてである。

二人は暗くなるのも忘れて話して居た。

四

渠は思つたのである、社會の階級の上からは、とても其戀を得る事は出來ぬけれど、もし自分がこの卒業製作に天下を驚かすやうな立派な名畫を描いて、その名が噴々と人の口に上るやうになつたならば、或は其願を遂げ得らるゝやうな事は無いとも限らぬ。自分があの令嬢を思つて居る情は、一生を犠牲に供しても、決して口惜いとは思はぬ程、烈しく深く鋭いのである、自分は今こそ一生の心血を瀝いで、その成否の運試しを爲ても好いのではないかと決心したのである。

で、渠は一年の間、殆ど死物狂になつて、其卒業製作に熱中した。そしてその結果は何うであつたかと言ふと、あまり焦つた處から、遂いそれとなく失敗して、もう審査を始める日が二三日に差迫つて居

る肝心な處で、その畫は殆ど絶望といふ情ない有様に陥つたのであつた。その失望とその悲哀とは、思ひ遣るにも餘りある程だが、遂に疳癩を起して、その翌日教場の中央で、小刀を振つてその一年間苦心に苦心を重ねた畫を柄も透れと一直線に突破つて了つたので……。

そして渠は人前も憚らずに、其處に打伏した儘、聲を放つて泣いたといふ事だ。

畫を繼合せて、それでも漸く卒業だけは爲たが、その不名譽は、太く渠の心を曇らせて、今まで上へ上へと振ひ立つて居た氣力は、更に下へくと沈淪して、筆を執る勇氣などは、爪の垢ほども無くなつて了つた。引かへて、良子を思ふ心は、愈濃く深くなつたのである。

一年はかういふ有様で、有耶無耶の間に過ぎた。

『そして君は、君と彼女との間が單に君が思つて居るばかりで無いといふのを、確める事が出来るのか』

『それは解らん』

『少しは解りさうなものだ』

『それは少しは……僕の心では、僕が一人思つて居るばかりで無いとは思ふけれど』

『それでは思切つて打明け給へ』

『それは僕には出来ん』

『何故?』

『何故だか知らぬが、僕には出来ん』

『それぢや先方でも君が思ふやうに、君を烈しく思つて居るけれど、矢張君と同じく打明ける事が出来ずに居て……つまり互にその打明ける機會が無くつて、互に思つて居りながら、一生知らずに過ぎるやうな事があつてもかまはんか』

『そんな事は無い』

『無いか、何うだか分るものか』

『が、僕は……僕は……』と友はどぎまぎして、『僕は實際に成功しなくつても好いのだ。僕の戀は一所になるのが目的では無いのだから』

『ぢや關はんけれど、それぢや何故そんなに元氣が無いんだ』

『……………』

又ある時は次のやうな會話を試みた事もあつた。

『僕はもう此まゝ別れても好い。僕の心は十分彼女は知つて居るのだから』

『其程相愛なら打明けて話した方が好いぢやないか』

『心と心とさへ通つて居れば僕は満足だ』

『それぢや此儘に一生別れて了つても好いと言ふのか』

『さうだ……』

『それでは君は君の戀人が、君の眼の前で、ある他の人に嫁いでも、何とも思はんと言ふのか』

『……………』

『出来まい……だから相愛ならば今の中打明け給へ』

『それは僕には出来ん』

その翌年の秋、渠は漸く上州桐生の染織學校に職を得て、其地へと赴任したのであつた。けれど渠は戀人に別る、辛さよりも、寧ろ浮浪の境遇を脱したのを喜んだやうな様子であつた。

五

桐生に大崎繁子といふ神童があつた。これは郡役所の低い屬吏の次女であるが、四歳の時にさる貴顯の前に出て、大字を書いたり、歌を詠んだりしたので、非常に珍しいものに持斲されて、ところの名物の一に數へられて居た。自分の友の山縣靜雄が、桐生町に行つて、先第一に自分に報じたのは、實にこの神童繁子の事で、今は丁度十一歳ださうだが、その文に、書に、詩歌に堪能なのは、それはく驚か
るばかりで、大抵の青年は、とてもこの少女と才を競ふことは覺束ない程であるとの事だ。友の手簡

の中には實に左の如く書いてあつた。

「君も知つて居る通り、僕には一種甚しい好奇心があるが、その好奇心の一に誘はれて、昨日處の名高きもの、一つなる神童大崎繁子の家を尋ねて、その清らかな少女に逢つた。造化は何うかすると、戯にこのやうなものを造つて見る事があるが、僕はいふ者に出會すと、何故だか知らぬが、一種の面白さを感じるのが常で、いろ／＼と談話する中にも、ある不可思議にふれたやうな心地が爲た。渠女は僕の眼前で、唐紙の半切に天地玄黄といふ四字を見事に書いて見せたが、その美しい頬に、星のやうな笑靨を二つ出したさまは、深く自分の心を動した。何故かと問ひ給ふな、それは——その笑顔が、かの良子に彷彿であつたからで。僕は此時から愈この神童が懐しくなつた……」

あのやうな神経性の男が、萬事に失敗して、こんな田舎の草だらけの處で、そのやうにして纔かに戀の心の萬分の一を慰めて居るかと思ふと、自分は何となく憐れに感じた。

その次回の手紙には、段々その神童と親しくなつて、一週間に一度宛位は、屹度訪ねて行つていろいろな話を爲るといふ事が書いてあつたが、その次の手紙には今日始めて自分の下宿の二階に來たといふ事が報じてあつて、その末にそれにして造化が何の意あつて、かゝる珍らしいものを造つたかと疑はれる。この子は行末は貴顯に奉公に上るやうに、最早已に極つて居るとの事であるが、この子の行末は果して何んななるであらうと思ふと、僕は何だか知らぬが、一種の悲しいやうな感に撲たれずには居

られないと書いてあつた。自分がその桐生の寓に渠を尋ねたのは、その翌年の九月であつたが、渠は驚くほど戀に寔れて、自分の戀は理想的のものであるから、實際の成就不成就は、更に關する所でないと、口には立派に揚言しながら、しかも倍一倍その實際的感情に支配されて居た。其時の渠の言ふ處に従へば、自分等の戀は確に相愛で、手紙の遣り取りこそ爲ないが、其間はもう已に動かすべからざるものになつて居る。實際の成就を爲す事の出来ないのは、只階級の相違が障碍になるばかりである。だから僕は満足して居る、假令へ彼女が社會の制裁に餘儀なくされて、他に嫁くやうな事があつたとて、僕は決して怨まないと、斷乎として決心して居た。そして君をかう決心させるには、何かかの女が柔しい言葉でも言つたのかと聽くと、否、別にさういふ譯でも無いが……と言つて、其儘立つて、手文庫の底の畫水日記に挿んで置いた、一枚の手札形の寫眞を取出して、黙つてそれを自分に渡した。

見ると、細面の、二重眼縁の、三ヶ月眉の、富士額の、愛嬌ある中に何處となく品格を保つた、一人の美しい少女の半身像が、極めて見事に寫つて居る。

即ち良子の肖像である。

『何うしたんだい、これは……』

『贈つて呉れたのさ』

『何時?』

『一月ほど前』

『令嬢の手づからか』

『否、さうぢやない、佐藤の手からだけれど』と友は少しどぎまぎして、『だけど佐藤の手紙には、いろ／＼とその事が書いてあつて、山縣に贈つて遣るんだから、一枚寫眞を下さいと言つたら、すぐ次の日にこの寫眞を呉れたさうだ』

此時自分の眼前に、細長い、お平の長芋然とした、厭な顔が浮び出た。この佐藤といふ男は、山縣と同じく舊知事公の邸に居て、家從見習をしてゐるのだが、當世流の、ちよこ才子肌の、生意氣の、放蕩の、自分は大嫌ひな、見ただけでも醋心しづの走りさうな奴であつた。山縣や自分などは、同じく竹馬の友ではあるが、自分は顔から相手には爲なかつたのである。

『君は佐藤になんぞ話したのか』

『話したといふんぢや無いけれど、自然察しられて了つて……』

暫く黙つて居た。

『けれど、君、佐藤なぞのいふ事を當にしてはいけないよ。彼奴等、何をいふか知れやしなからね』

『それは左様だ。僕だつて當にして居る譯ぢや無いけれど……』

と、友は言淀んだ。そしてこの儘この話は絶えた。

あくる朝、自分は友と花藏寺山の方へ散歩に行つたが、正午近く勞れ切つて歸つて來ると、是非君に會せたいと友が口癖のやうに言つて居た神童大崎繁子が、折よくふと尋ねて來た。

有體に言ふと、自分は神童などといふ不自然なものは、餘り感心しない方で。それを一種の好奇心に驅られて、やれこれと玩弄物のやうに遊ぶ世の人を見ると、その人々の趣味があまり低いやうに感じられて、何となく不快であつた。ことに框ある眼にて覗かれ、評せられ、機械と同じき言葉にて褒められ、玩ばれる神童その人の身になつて見ると、その世の人の行爲が、非常に殘酷のやうに感じられて、自分はその憐れな氣の毒な神童のさまを、平氣で見居られないのが、いつもの例であつた。繁子といふのも、まだ小さい、世の常ならば、毬お手玉と騒ぎ散す年頃であるのに、行末は立派な處に奉公に上るのゆゑ、世の下様の娘の風習を習はせてはならぬと、殊更に男子の裝を爲せて、頭は短く五分刈にし、帯は淺黄の唐縮緬のへこ帯を、長く後に垂らして居た。世の常の生れならば、今頃はお烟草盆か何か可愛らしく結つて、美しい紫の振袖か何か着て、のどかに遊んで居る事が出来るであらうに……と、思ふと、自分は堪らなく氣の毒な心地が爲た。ことに、眼は黒く、額は廣く、眉は氣高く、輪廓は正しく、何處と言つて、一つ缺點の打ちどころもない姿色であるのに……。

半日は三人して畫を描くやら、大字を作るやら、歌を詠むやらして、楽しく遊んだ。

「君は何う思ふ？」

繁子が歸つた後、友は突如にかう言つて、自分の顔を見た。

「何うつて……何を」

「繁子をさ」

「僕は……」かう言つたら嫌な顔をするであらうと思ひながらも、「僕は非常に氣の毒な心地が爲て仕方が無かつた。あの子の行末を思ふと、何だか悲しい心地がする」

「そんな風に君は思ふかね」

果して好い顔は爲なかつた。

「だけど、僕は」と友はすぐ言葉を續いで、「好奇心がある爲か、氣の毒と思ふどころか、却つて豪いと感心するね。けれど君の言ふのも意味はある。神童といふのも、好く考へて見ると、矢張一種の不具かも知れないからね。實際あの子なども、姉は馬鹿なのだから」

其夜枕を着けながら、風通り悪き一室の、暑苦しくて寝られぬ儘、いろ／＼とその神童の事を考へた。そして今年経つて、再びこの桐生に來て見たならば、その神童はどんな運命に支配されて、何んな風になつて居るであらうと悲しく思つた。

六

『僕の戀は終を告げたよ』

友の顔には、夕日の影の黒雲に反映したやうな慘澹たる色が現れて居た。

『何うして』

『何うしてと言ふ程の事も無いがね』

『結婚したのか』

『否』

厭な冷笑が友の顔を影のやうに掠めて行つた。

『歸く處が極つたのか』

『否』

『では何うしたんだ』

友は非常な苦しい顔を爲たが、それでも自分の問には答へた。

『別段これといふ事も無いんだ。抓んで言へば、今は僕と彼女との間柄が、仇敵のやうになつて了つたのさ』

『それは又何うして……』

『聞いて呉れ給ふな』

『打明けたのかえ、君は……』

『否』

二人は黙つた。

『では……』と暫くして、自分は口を開いて、『では畫水日記に書いたやうな愛は、もうすっかり無くなつて了つたのかい。かの女が人に嫁いで了つても、猶かの女を正しい心で戀ふる事が出来ると言つたが……』

『無論なくなつたさ』

と、寧ろ誇るやうにいふ。

自分は何となく口惜しい心地が爲たから、

『では何んな事があつても、この情は變るまい、假令かの女は自分を思つて呉れないでも、僕ばかりは一生屹度忘れないと言つた言葉も、花火線香と同じく消えて了つたのだね？』

『さうだ』

『何故だらう』

『それは僕は言はん』

『それで、君は満足して居られるか』

『居られんけれど、仕方が無い』

『けれど、君、それは餘り冷淡過ぎるぢや無いか。』これがこの友の弱點と、自分は殊更に烈しく出たのである。『君があの人を思つたのは、何様どなただつた。君は何んな事があつても、忘れないと斷言したぢやないか。今度どんな事があつたのかそれは知らん。けれど何んな事があつたにしても、戀人が一朝にして仇敵に變るといふのは、餘り情無いぢやないか』

友は低頭して居る。

『僕は経験が無いから、人間の弱點が、いざとなると、何んな風に人間を陥れて行くものであるかは、善くは知らん。が、我々が長い間、いろ／＼に煩悶したり、いろ／＼に研究したりしたのは、つまりその弱點に打勝つ爲めでは無からうか。かう言ふと、君は言ふかも知れん。それは嘗に経験なき者の理想にとまると。が、我々はその理想を實行しやうと思つて、もがくのではないか。だから僕は戀を爲れば……一度まことの戀を爲れば、僕は僕の理想として、假令何んな事が有らうと、假令仇敵のやうに先から仕向けられやうと、僕は一意その人を戀しやうと思ふね。それは、人間には弱點があるから、遺恨やら、嫉妬やら、憤怒やらの悪魔が出て来て、それを打壊さうとするのは、事實だ。けれど、僕は

人力で及ばなければ、神の前に祈つても、自分の理想を實行して、猶その人を誠意を以て戀しやうと思ふね。同じく情あり心ある人間ぢやないか。それまでにして動かないやうな木石は決して無い……。君、君、僕は君に今度どんな事があつたのか、それは知らん。けれど君は何故人力で及ばなければ、神に祈らうとは爲なかつたのだ……』

自分の激昂は一方で無かつた。

『君の議論はよく分つて居る。僕は實際君のその理想の清く堅いのに敬服して居るのだ』

『何故、それぢや君はそれを爲ない？』

『僕の性質には、情けないが、……それは出来ない……』

友の聲が微かであつた。低頭した眼には、涙が溢れんばかりに漲つて居た。

『そしてもう互に口などは聞かないのか』

『向ふで避けるやうにして居るからね』

『一體何ういふんだらう』

『それ丈は聞いて呉れ給ふな』

『何故かい』

『何故でも、それを思ふと、僕はむらく／＼と氣が狂ひさうになつて來るから』

自分は如何にかして、その祕密を聴かうとしたが、友は何うしてもそれは語らずに、やがて匆々に歸つて行つて了つた。これは自分が桐生を尋ねた年の十一月の事で、何故だか知らぬが、渠はこの月の始に、自ら職を辭して、飄然と小川町の舊邸に歸つて來た、その十日程後の事であつた。自分は、友の言葉によつて、いろ／＼と想像して見たが、何うも友の數年の戀が、こんな風に爲つたのが氣に懸つて、仕方が無いから、その翌日態々出懸けて訪問した。友は以前の薄暗い二階の一室に蹲踞つて、頻りに畫を彩色して居たが、戸を明けてぬつと入つて行く自分の顔を見て、『もう僕は、君は來て呉れないかと思つたよ』と言つた。

で、畫の事を一時間ほど話して、戀の事は爪の垢ほども語らずに別れた。二人逢へば、いかな時でも、戀を話さない事は無かつたのに。

七

それから半年程経つて、今年の春の末に、渠は漸く再び職をこの安中の尋常中學校に得たのだが……と、思ひ懸けて、長い／＼恍惚から覺めた時は、自分は丁度暗い杉並木の間を、向へひろ／＼と出やうとして居た。前には、青々とした畑が見ゆる限り連り渡つて、その右に白壁の土蔵が幾箇となく暑い日影にかざやいて見える。それは確かに自分の志して行く安中の驛と思ひながら、咽喉が渴したから、路の傍にちよろ／＼と美しく日に閃めく溪流を掬んで飲んだ。

首を擧げて、今一度一田畝向ふに畫のやうに浮出て居る安中の驛を見渡したが、あの町の中に、あの不幸福の友が住んで居るのだと思ふと、何だか變な心地が爲る。それにしても、友は何んな風にして生活して居るであらうか、この間の手簡では、漸く國の老婆を呼寄せて、桐生から頼まれたかの繁子と三人、極めて平和な生活を送つて居るから、安心して呉れ給へと書いてあつたが、何うしてあの繁子は、山縣の處に同居するやうになつたのであらうか。何うして繁子の父母が、山縣のやうな一書生に、最愛の娘を託したであらうか。それには何か深い意味でもあるのではあるまいか。友は自分の繁子を愛するのは、兄が妹に對し、師匠が門人に對すると一般であると言つたが、果してその言の通りであらうか。

兎に角に、祖母様おばあさんは此回一所になつて、嘸喜んだ事であらう。前から、孫が成長くなつたならばと、口癖のやうに樂みにして居たし、友も又至極の祖母様思ひで、(祖母様は自分の不幸福をつくり出した元だなどと言ふ事もあるが)祖母様が生きて居る中は、何んな事を爲ても、安樂を爲せなければならぬからと絶えず言つて居つたから、今の生活は、今までの中では、尤も幸福なものであらう。兎や角と思つて居る中に、自分はいつかその安中の驛に入つて、眼前には場末の倒れかけた長屋や、壁の落ちかけた家や、木蓮の咲て居る垣根などが現れて來た。養蠶の本場として、絲を繰る音は、到る處に聞えて、上州少女の繰絲の唄は、連る軒毎に面白く聞える。

『一寸お尋したいですが、安中の中學校といふのは？』かう自分の尋ねたのは、それから三四町行つて、とある曲り角の、若い娘子が四五人も白い手拭を頬冠りをして、頻りに歌を謡ひながら、絲を繰つて居る家であつた。娘等は一齊に唄をやめた。そして返事はせずに、じろくくと自分の顔を見詰めた。その中の一番年當らしいのが、それでも口を開いて、『中學校は正覺寺の中だから、そこを一町ばかり行つて、理髮肆の角を右に曲んなされ。そこが中學校だあ……』と教へて呉れた。

果して、右の角に汚い理髮肆があつた。それについて曲つて、たらくくと四五十間も下ると、前に俄然碓氷川がひろく現れて、對岸の桑畑の深緑の中に、汽車の烟が白く旗のやうに靡くのがよく見える。人家の盡頭はつちに廣場があつて、其處に高い鐘樓と立派な山門とが、ぬつとして立つて居て、その山門には、群馬縣尋常中學校碓氷分校と、一六風の字で書いた大きな札がかゝつて居た。

數學の教師が、 $A+B$ と頻りに代數を教へてゐる聲が、深く生茂つた庭樹の間を洩れて聞える。自分は山門を入つて、庭樹の青翠殆ど滴らんとする間を抜けて、桔槔はねつるべの桑畑にかゝつてゐる處を出ると、其處は事務所兼小使の居る處である。自分は案内を乞ふて、山縣靜雄に面會を求めた。

『やあ……』
と、少時して空の隅の戸の明い處から、その半面を出した友は、あまりの不意に驚いて、聲を擧げて

叫んだ。

『君か、僕は誰かと思つた』

さもく喜ばしうに、『一寸待ち給へ、僕は斷つて今すぐ来るから』

十分の後には、自分等はその學校の裏門の、古い槐の大樹の陰を通つて、暑い日影の斜にさし渡した桑畑の傍を、左の家の方へと歩いて居た。

『君が来やうとは、本當に思も懸けなかつたよ』

『僕もこんな處まで来て、君を尋ねやうとは思はなかつたが、木曾街道を出て、此處を通るやうになつたものだから』

『よく来て呉れた。僕はこの四五日、不平で不平で堪らんから、明日の日曜には、東京へでも行つて来やうかと思つて居た處だつた』

友の顔には、以前よりも猶慘澹たる色があらはれて、眼は凹み、鼻は高く、眉と額の間には、一種形容せられざる厭な氣色が秘んで居る。

『でも此頃は幸福だらう』

『どころか』

と、友は投げるやうに言つた。血色は非常に悪い。

『今に緩り話すけれど、僕は不平で不平で堪らんのだ。僕は人間といふものは、こんな降らん者とは知らなかつた』

『何故そんな事を言ふのだえ』

返事も爲ずに、友は右の小路に入つたので、自分も心付いてあたりを見ると、そこは柴垣を廣く取廻した、元は士族の邸でもあつたらうと思はれる處である。白い浴衣の夕風に翻る洗濯竿の下を潜つて、井戸端に水汲に出て居た痘痕だらけの五十ばかりの女房に一寸會釋して、その奥の芋畑の向ふの小さい葺屋根の中へと入つた。それは四疊半と八疊の狭い汚い家であつたが、自分は此時ふと風通しの好い椽側に後向になつて、白髮頭の猫脊の一人の老婆が、さもくぐ侘しさうに座つて居るのを認めた。繁子の姿は見えなかつた。

八

『本當に久し振で』

『これは、まあ、新さんかねえ。あんまりお久しいので、すっかりお見それ申して了つた。それに付けても、大くお成んなすつたものだ。婆なんぞがよくお目にかゝる時分は、まだほんに小兒こどもで御座つたのけが……』

『本當にあの頃は、まだ……』

『よくあの頃は、静雄とけへ遊びに來なすつて……惡戯ばかり爲て、仕方が無かつたつけが、それが此様に大くなるとは、考へると、久しいものさ』と少し途切れて、『それで、母様も皆様も達者かね』

『皆丈夫で居ます』

『それは何より結構、新さんの處では、兄様も新様も、皆な孝行者ばかりだから、お弓様(母の名)は幸福だつて、いつも噂して居るのです！』

『お婆様も御丈夫で結構ですね』

『なあに、はあ、生きて居るばかりですわ！ 長生すれば耻が多いつてね……。昔から言つてる通り……孫に世話ばかり焼かして、早く往生が出来るやうにと、佛様にお願申して居るけれど、何うも罪障者で、まだ往生する事が出来ないでねえ！』

『そんな事が有るものですか、今迄丈夫で長生を爲すつたればこそ、かうやつて、静雄さんにかゝつて、樂を爲る事も出来るのですもの』

『なあに、はあ、静雄にも愛憎を盡かされて居りますさ！』

不意に、

『婆様、何だえ、そんな事を言つて、お客様の前で』と、烈しく叱つた友の聲に、驚いて振返ると、

友は恐しい眼で、婆様を睨め付けて居た。自分は無限の不快を感じた。この友は、この上もない婆様思で、卒業した曉にはと、絶えず口癖のやうに言つて居たのに、今のこの言葉の慳食さ加減と言つたら……。

婆様はこの一喝に悄氣で、後向になつて、黙つて了つた。鼻涙をすゝり上げる音も微かに聞える。

一座可笑しく白けた。

『繁子は？』

自分はその寂寞を破らうと思つて、かう言ふと、『四五日前桐生に歸つた』と、木で鼻を摩るやうに友は答へる。

『直き歸つて来るんだらう』

『何うだか、分らない……。多分はもう歸つて来まいよ』

『何か、譯があるのか』

『唯』

後向になつて居る婆様は、此時不意に口を開いた。

『新様、御願だがね、靜雄ももう嫁を貰はなけりやならないんだから、何うか好いのが有つたら、心懸けて置いて……』

皆まで言はせず、

『年寄は口を出さずに黙つて居なさい』

と、友は又叱つた。

『好いだらうぢや無いか、新様に頼むんだから……』

『黙つて引込んで居なといふのに』

此聲は極めて鋭かつた。

『左様かい』と、婆様も少しは怒つたやうな調子で、

『それぢや黙つて引込んで居やう』と、また後向になつて了つた。

如何に友は偏癖な性質だからと言つて、意味も無しに、こんな残忍な言葉を吐くやうな男では無いがと思ひながら、二人の様子を見較べた自分は、これは何か互に感情を悪くした事があるのではないか、それが爲めに友はこのやうな反抗的残忍の言葉を吐くのではあるまいかとすぐ思つた。友は今の生活を、幸福どころでは無いといひ、不平で不平で仕方が無いと言つた。それから推しても、屹度何か意味が有るのに相違ない。もしやそれが、繁子の歸宅に關係して居るのではあるまいか。

『繁子は何故歸つたんだ……何か先の家に變つた事でもあつたのか』

『否』

と言つたが、

『それにはいろ／＼譯があるのさ、繁子が居たら、君が來たのを、何んなに喜ぶか知れなかつたが……本當に人間といふものは、降らん』と、今更に感じた如く嫌な顔を爲た。

『晝は少しは描けたかい』

殊更に話頭を變へやうとすると、

『晝かい、晝なんぞは』と、友は自分の顔をぢろり見て、『晝なんぞと言つては、餘り酷いけれど、本當に僕のやうな生活と境遇とに居ては、碌々晝なんぞは描いて居られやしないよ……。本當に僕は駄目だよ。僕は性質が駄目なんだから仕方が無い。僕は、いつも思ふがね、僕のやうな半分熱心で、半分冷淡な、可笑な性質では、とても眞面目の事など出來は爲ないのだ。君はいつでも、先天的性質が、運命を作るので、性質則ち運命だと言つたが、それは實際だと、僕は此頃漸く分つた。君も知る通り、僕は今迄何事に就ても不運にばかり出會したが、善く考へて見ると、それは皆な自分の性質から出て來てるからね、それを思ふと、僕はぞつとするよ。その位なら、今の中に首を縊るなり、藥を仰ぐなりして、死んで了ひたいとも思ふよ。現に、僕の婆様なんぞは、善い例だからな、あの年をして、孫に慳貪に取扱はれるのも、皆なその性質だからナ、僕は考へるとぞつとするよ』

酷い事と思つたが、それでも自分は黙つて居た。

すると、後向になつてゐた婆様がふと立上つて、『どれ／＼、年寄は御免を蒙つて、晝寝でも爲ませう』と、獨語のやうに呟いて、その儘箆の傍の、風通の好い處に、ごろりと遠慮なく横になつたが、十分も経ぬに、もう鼾の音が聞える。

友は折角言出さうとした話が、悉皆外れて了つたと言はぬばかりに、暫く手持不沙汰の様子であつたが、やがて大きな唐机の上の、立派な手風琴を取つて、それを悠々と弾き始めた。

『君……が……代は……千代に……八千代に……さよれ石の……』

その香氣さ加減と言つたら無い。

胸には嵐よりも烈しい感情が、絶間もなく往來して、自殺などといふ念が、一刻もその心頭を離れた事はない、この友が、こんな無邪氣な、こんな香氣な音を弾くかと思ふと、自分は堪へ難い心持がする。

『そんな者を習ひ始めたのかい』

『いや、これは繁子のだ、繁子が置いて行つたんだ。貴顯から恩賜のものださうだよ』

渠は更に俗曲譜といふ横綴の譜をひろけて、『梅が枝の手水鉢』といふ卑しい一曲を弾いた。

『そして一體何うしたんだ』

小聲で言つて、目配をすると、渠は黙つた儘、傍の手文庫から、半紙一面に書いた、もみくちやに爲れた一通の手紙を出して、『読んで見給へ、跡で詳しく話すけれど、これを見れば、大抵僕の不平は分る

から』

と渡した。

自分は黙つてそれをひろげる。友は平気で『私とお前は』といふのを弾いて居る。讀んで行く中に、自分は自分の想像が半ば中つて居たのを發見した。その手紙は、繁子から來たので、彼女の歸宅したのは、婆様と折合が附かなかつたからである事は、歴々とその文の上にはあらはれて居る。——お祖母様さへ居なければ、私は何時までも、兄様の傍に居たいのなれど、お祖母様が恐い眼で睨めて、妾の肌などを抓つて、いろ／＼折檻なさるから、妾は何うしても、兄様の側に居る事が出来ませぬ。けれど、兄様の側に居られぬのは、悲しくつて／＼、まだお祖母様が國からお出なされない頃、兄様と二人で居た事を思ふと、涙が出て／＼、兄様が歸つて行つた夜は、一夜泣明かしました。それに猶忘れられないのは、この間兄様が送つて來て下さつて、もう夜になるからつて、お歸りなさつた時、妾は窓から見送つてゐましたに、兄様は淋しさうにして、向ふの土手を歩いてお出なされた。それが見えなくなつた時、妾は悲しくつて、涙が出ました。何うか又元のやうに、兄様と唯二人で、兄様にいろんな事を教はつて、面白く遊んで暮したいものだけれど……十三歳の少女とは何うしても思はれぬ程、筆跡も見事に、文言も上手に、思想もませて、巧にその時の情が書れてある。

これが友の第二の戀ではあるまいかと思つて、自分はそつと友の顔を覗つた。友は一向平気で、俗調

極まる曲を弾いて居る。

實際まだ第二の戀といふ程の者には成つては居らぬかも知れぬ。けれど、いろ／＼な障礙やら、さまざまの反對やりに逢ふと、かういふ情は益々反抗心を逞うする者であるから、やがてはさういふ傾向を生じて來る事がないとも限らぬ。まして友の今の境遇は絶望も絶望の極、悲哀も悲哀の極に陥つて、満足に同情して呉れる人と言つては、一人とても無いやうな、佗しい淋しい有様である、その上、性質もあゝいふ性質を持つて居る事であるから、と思ひながら、その讀んだ手紙をもとの通りに丁寧に疊んで、封筒に入れて、黙つてそれを唐机の一隅の書籍の上に置いた。

友はそれとも知らぬ顔に、今しも疊の半面にさし入つて來た夕日の樹影を心ありけにじつと見たが、急に思ひ付いたやうに手風琴の手を留めて、『もう戸外も涼しくなつた。君、何うだい、これから、磯部の温泉まで行つて遊ばうぢやないか』

『磯部？ 遠いだらう』

『何に、そんなに遠い事は無い。一里に少し位なもんだ。僕は、いつでも月の好い晩などは、夕飯を食つてから、出かけて行くのだ』

『では、行かう』

と立上つた。自分は今日ももう十里近く歩いて、足は一方ならず勞れ切つては居るのだけれど、兼ね

てより名を聞いて、未だに行つて見る機会がなかつたその磯部の清い美しい温泉に浴して、涼しい二階の一室に、夕風に吹かれながら、二人楽しく一酌を催したならばと思つて、それで急に行かうと決心したのであつた。

『今夜は泊るんか』

老婆は二人が準備を整へて、家を出やうとする時、送つて来てかう尋ねた。すると、友は『泊るか何うだか分らない。出先の事は、神様ぢや無いから分らん』と又手厳しくきめ付けた。

暫くすると、自分等はいつか碓氷川に臨んだ絶壁の、右は桑島で、左は草原の、細い蛇のやうに曲りくねつた風情ある路を、辿るやうにして歩いて居た。草原の中には、鈴を鳴すやうな蟲の音が、あちこちに聞えて、もう穂を出し始めた赤い美しい薄の穂先には、涼しい夕風が、そよ／＼と吹渡つて居る。夕日は浅間の坊主山の、少し右の方の、低い山に沈まうとして居るが、その絶々な微かな光は、丘を越え、村を越え、藪を越え、林を越えて、最後に碓氷川の前岸の端の、遠い遠い激湍に閃いてゐる。瀬毎に鳴る水の音は、丁度遠い笛の音のやうだ。

五丁程上流に、一道の鐵橋が、弓のやうに架つて居る。自分等はあれを渡つて行くのださうだ。その橋の直ぐ向ふで、川は大曲に曲つて居るが、其岸はすっかり深い竹藪で包まれて、その大藪の上に、妙義の面白い姿は、夕鏡の赤く染つた空に、丁度捺したやうになつて、くつきりと美しく現れて見える。

對岸の田舎道を唄つて行く馬子唄も、殆ど手に取るやうに分明聞える。

この穏かな天然の景に對しては、友の心も大分静まつたやうな様子だ。

『僕は天然の景に向つた時ばかり、いつも大なる慰藉を感じるが、この平和な、この穏かな、この美しい天然の景でも無かつたなら、僕はとても今迄この世の中に生きては居られなかつたらうと思ふ。それにしても、人間は何故こんなに汚いのだらう』

『本當に……』

かう言つた限り、二人は黙つて歩いて行つたが、路はだら／＼と低い阪を下りて、杉の古樹の間を一寸抜けて、風情ある雑木山から、平かな低い丘を踰えて、桔槔はねつるべの高く夕日に顯れて居る百姓家の前を通つて、荷馬車や荷車の轍の縦横に付いて居る大道に出て、それから淡竹の藪を一つ越えんと、其處はもう遠くから望んだ釣橋の、弓のやうに架つて居る處だ。

橋の上で顧ると、碓氷川に閃いた夕日の影は、もうすっかり消えて了つた。

九

『譯と言つて、別に何でも無いけれど』

と、友が話し始めたのは、橋を渡り畢つて、向ふの淡竹の大藪を、ひろ／＼と桑畑の路に出やうとし

た處であつた。自分は二三歩先に進んで居たのを、立留つて、更に友と並ぶやうにして、しづかに友の語る所を聞いた。

『手紙でも君が見た通り、婆様が酷めて追出して遣つたのさ』と、言葉を續いで、『僕は實際人間と言ふものは、あんな降らん者ぢや無いと思つた。ことに七十以上にもなる老人が、あんな者だとは！それは婆様はいろく言ふけれど、實際約めて言へば、つまり僕が繁子をあまり愛するのを、妬ましく思つたから出た事だ。猶詳しく言へば、祖母様が昔僕の母を酷めて逐出したのと同じ筆法なんだからね。君、君も知つて居るだらうが、人間には誰でも、その分量の多い少いはあつても、愛するならば自分一人でその物の全體を占領しなければ満足しないといふ、極我儘な性質の無いものは無いが、僕の婆様なぞは、その我儘で成立つて居ると言つても好い位、厭な性質を持つて居るのだから……』

僕が今回あの繁子を伴れて来て、あれを教育するやうになつたのは、決して僕が強ひて連れて來た譯では無く、この安中に来るに就て、元の桐生の下宿に、荷物が少しばかり置いてあつたから、それを取りながら、一寸繁子の家に寄つて見ると、丁度繁子に漢學を教へて居た先生が、この春に歿くなつて了つて、何處にも教りに行く處が無いと、困つて居る處で、何うでせう、貴方ならば妾も安心してお頼申して置く事が出來ますが、安中ならばそんなに遠い所でも無いに、お邪魔で無ければ、世話をして、いろいろ教へて下さる譯には参りますまいかと、違つて其母から頼まれて、自分はとても其任に堪へないか

らと幾度も辭つたが、それでも違つてといふので、僕は仕方なしに、出來るか出來ないか、半年なり一年なり、御世話して見ませうと、受合つたので、決して僕はあの繁子を何うの彼うのと思つてなどは居りやしない。否、積つて見ても分るぢや無いか、まだ十二か十三の娘の子なんぞ……。それを何うだい。婆様はあの子が居ると、好い嫁も來ないなんて言ふぢやないか。人の口が煩いなんて言ふぢやないか。僕はそれにや愛憎が盡きて了つた。それから又、君、僕の身になつて考へて見て呉れ給へ。僕は随分はかない情ない境遇に居るものだ。それを、せめてはかの繁子の清い愛で慰めて貰はうと思つて、渠女を自分が預るとなつた時は、非常に嬉しくも思ひ、非常に勇氣づけられも爲たのだ。そして五月から六七月と三月の間は、二人であの家に住んで居たのだが、僕は水を汲んでやる、繁子は勝手元を爲る。そして整然と課程を極めて、毎日いろくものを教へて遣ると、あの子は一を聞いて十を知るといふ發明な性質だから、他の小兒ではとても覺えられぬやうな事も、ずんく覺えて行つて、僕はあんな楽しい事は無かつた。で、この三月の間は、僕の平生の不平も、一方ならず慰められて、畫を描いて見るやうな氣にもなり、將來にも、多少の光明を認めるやうな心地が爲た。だから、此上婆様でも呼んで、二人一緒に楽しく生活したならば、僕の枯野のやうな胸の中にも、春の草の芽が生えるであらうと、實は僕から進んで婆様を呼び寄せる事に爲たのだ。それが、如何だい、君、丸で正反對の結果を奏したのではな

いか。來て三日も経たないのに、婆はもう繁子を邪魔にし始めたぢや無いか』

友は肺病の人のするやうな長大息をした。

世の中に情ないものが多いと言つて、先天的性質の衝突ほど悲劇があらうかと、自分もつくづく同情を寄せた。路の傍に、石地藏が薄暮の薄暗くなりかゝつた中に、蕭然と意味ありさうに立つて居た。

「婆様は罪の無い嫁をいびり出す程の氣の勝つた性分だから、子供の癖に、繁子が生意氣な事を饒舌つて、僕を朋友のやうに取扱ふのが、非常に小癩に觸つたものと見えるよ。それからは絶えず繁子を酷めてばかり居て、僕が學校に出て居る留守には、繁子は可愛想に、いつも泣いて居つたとの事だ。そして加之に、年を取つては子供の世話は出来ないの、不經濟だの、人間が悪いのと、いろんな事を言懸けて、一日も早く歸して了へと迫る。そしてその意志通りに追歸して、今度は自分一人で孫を占領しやうと思ふのかも知れぬが、それは昔嫁を追出して、それと共に可愛い息子に捨てられたと同じやうに、矢張その孫にも愛想を盡されて了ふとは、少しも氣が附かないのだ。僕は昔から祖母の性質をよく知つて居て、僕一家の悲劇は、祖母が元で、祖母の難儀してゐるのも、自業自得だと言つたが、考へて見ると、祖母も可愛想で、有つて生れた性質が因果なのだから、寧ろ憐むとも憎むべき者では無いと、かう自分は思はぬ事も無いのであるが、どうも弱點を見せられると、祖母でも親でも厭になるのが僕の性分で……」

七十歳以上になつてもその先天的性質の爲めに不幸な境遇を出る事の出来ぬ老婆、明かに自分の性質

を知つて居ながら、それを改良する事の出来ぬ青年、自分は心から感じたのである。

まことに渠の言ふ如く、老婆の一生の不幸も友の半生の絶望も、皆その先天的性質から出たので。老婆が今少し犠牲の念に富んで居たならば、嫁を追出して息子を自暴自棄の境に陥らしめるやうな事も無く、それが無ければ、その息子は今時分は立派になつて、婆様も随分幸福な隠居様と立てられるやうな身分になつたかも知れぬ。只その我儘な性質が有つたばかりで、息子にも捨てられ、又今七十何歳の老人になつて、それと同じ理由で、孫にまで棄てられやうとは、何たる情ない事であらう。

お日様はもうすっかり山陰にお下んなすつて、夢のやうな夕の靄は、何處から來るともなく、茫と野、山、森、丘の上に暮のやうに棚引わたした。桑畝の向ふから、鋤を荷つた男が、唄を歌ひながら、ぬつとして出て來たが、自分等を一寸振返つて、そして竹藪の中の茅屋へと入つて了つた。二人は黙つて、薄暮の田畝道をとぼく歩いて行く。

「だから僕は思ふ……」と、とある村らしい處へ入らうとして、白壁造の土蔵が薄白く黒い森の中に見える、黒扉を取廻した家の前に來た時、友は不意に今迄の沈黙を破つて、「婆様のやうな我儘な性質の人は、自分一人で生活して居るのが何よりの幸福で、とても不平無しに人と一所に住んで居る事は出来ないのだから、僕は今一軒家を借りて、婆様を今の家に置いて、僕は繁子と二人で、元のやうな生活を爲やうと思つて居るんだ。……さうしたなら、國に居た時のやうに、甘味いものでも出來ると、持つて

来て呉れる位の事は爲るだらう』

婆様の我儘を攻撃して置きながら、却て自分の我儘を通さうとするとは、あまり矛盾した行爲ではないか。もう悉皆暮れて、今迄は微かに彼方此方に見えて居た黒い森や、白い土蔵なども、残なく闇黒の影の中に隠れて了つた。やがて路の兩側の深緑の中から、燈火の影が青く涼しく閃いて、巻煙草を並べた店や、鳩麥煎餅を鬻ぐ家などの前に、田舎には珍らしい白地の浴衣がちらほらと認められた。友に聞くと、此處はもう磯部温泉であつた。

10

薄ら寒い風に吹かれながら、箱洋燈の處々に眠むさうに點いて居る淋しい長廊下を通つて、東の棟から西の棟へと、虹のやうに懸つて居る長い橋を渡つて、それから薄暗い階梯を下ると、もう其處は浴場で、湯氣は霧のやうに四面を罩めて、二ヶ所に洋燈はつけられてあつても、浴場は茫として、丸で一間先も見えぬやうになつて居る。夜は森と更けて、只ねぢり忘れた水の鐵管から、ぼつ／＼水の滴る音が絶々に聞えて居るばかりである。自分は深夜の入浴を好める身の、眼が覺めるとすぐ手拭を抓んで蒸直まつすに此處に遣つて來たのであつた。

御影石で造られた湯殿に、美しく透つた湯が盛れて、洋燈の光が白い湯氣を透して、茫と夢のやうに

其上に匂ひ渡つて居た。自分は首きりもある、深い心地の好い湯の中にざんぶと身を沈めた。

まだ本當の眠氣の覺めない顔を、手拭で一撫でして、心地の好い大きな欠かを一つして、そしてじつと湯氣の中に白く現れて居る洋燈の光を見詰めたが、ふとむら／＼と胸に上つて來たのは、昨夜はよく騒いだといふ事であつた。あんなに酔つて、あんなに騒ぎ散した事は、近年例の無い事だ。ことに、まだ覺えて居るが、山縣は始めは大きな聲で詩を吟じて居たが、終には感極つて泣出した。それにしても、山縣は可哀想だ。初の戀に失敗した所以は話さないからよく知らぬが、戀人が一朝にして仇敵のやうに爲つたと言ふからには、何でも失戀の中の最も悪い結果に終つたに相違なからう。その上、その失望を纔かに慰めやうとした繁子といふはかない望すら、その祖母の我儘の爲に、全然破られて了ふとは、何たる情ない事であらう。ことに、友のやうな複雑な性質では……。

それにしても、他日自分が友とこの様にして磯部温泉に遊びに來て、このやうに騒ぎ散したといふ事が、悲しい紀念になるやうな事はありはせぬか。あの夜、湯舟の中で、友の半生に限りなき同情を表して、獨り泣いた事があつたつけなどと、追懐する事はありはせぬか。

自分には、何うしても友の一生が悲劇に終るやうに思はれて仕方が無かつた。

美しい湯はざぶ／＼と御影石の浴場へと溢れ出て、湯氣は風に逢つた朝霧のやうに、いよ／＼白くあたりを満ちた。夜はしんとして居る。

その翌朝の歸途、ふと思付いたから、『野中の處から、君が絶交状を贈つたといふ事を、此春言つて寄越したが、君はあれからまた仲直をして、尋ねて行つた事は一度も無いのか。妙義と此處とは、眼と鼻との間だのに……』

と尋ねた。

「此處に來た事も知らせて遣らんものを」

友の聲は沈み切つて居る。

『そして何故絶交状などを贈つたんだい。野中も君のあの事では、多少心配して居て呉れたぢやないか』

「本當にさう言はれるのも、當然さ。僕の絶交状を贈つた理由は、殆ど理由にも何にも爲りや爲ないのだから……。本當に僕は、丸で狂人だよ」

と、素氣無く言つた切りで、會話は此處に杜絶れて了ふ。

顧ると、その野中といふ友の住んで居る妙義山は、雲もなく高く青く晴れ渡つた大空に、黒く捺したやうに現れ出て、蠟燭岩のあたりに、朝日の美しく照り渡つて居るさまは、丸で支那畫の山水のやう

だ。この野中といふのは、同じく山縣の竹馬の友で、かの佐藤と三人は、小學校に居る頃から、非常に仲が好くつて、そして學問も出來たものだから、三秀才と評判を立てられた程の間柄であつたが、渠は群馬縣の尋常師範學校を卒業して、今は此處から直見える妙義山の小學校の校長に職を奉じて居るのである。

『そしてその絶交状は、何かあの事にでも關係して居るのか』

『何に、何でも有りやしない』

『でも……』

『でも、何でも無いのなもの。あの良子の事などは、僕はもう悉皆忘れて了つたんだもの。そんな事は、今考へると丸で夢を見たやうなものだから』

今でもその昔の傷痕に惱まされて居る癖に……と思ふと、氣の毒になつたから、自分はその會話を他に移して了つた。そして、稍暑くなり始めた桑島の間を、もと來た路を歸るよりはと、少し遠いけれど、原市の驛に出て、午前十時頃に安中へ歸つて來た。

驛の入口から、二三町來た右側に、田舎饅頭を並べた、見すばらしい菓子屋があつた。友は一寸とその店の中に入つたが、何か菓子でも買ふのかと思つたら、さうでも無い様子で、亭主が頻りに頭を下けて、座蒲團や煙草盆などを持つて來るから、自分も暑い日中に立つて居る譯にも行かず、その店頭の汚

い縁側に腰を掛けた。

亭主は頭を二つ三つ軽く下けて、『先方へ聞いて見やしたから、實は今日あたり、御宅へ申上げに行かうと思つて居た處で……。先方の申しやすには、どうせ空いて居るのだから、いつからでも御貸し申上げやせうと……』

『家賃は』

『この間仰しやつた位で』

『そいつは好い鹽梅だ』と、言つた友の顔には、さも喜ばしさうな色が顯れた。『あれは確か六疊が一間に、四疊半に、あとが臺所……』

『へえ、左様で』

此時、自分の頭に、これは昨夜言つた事——即ち繁子と一所に住む爲めに、態々家を借りるのだとすぐ浮んだ。

『一寸見せて貰ふ譯には行くまいか』

『御易い事です。オイ小僧』と、亭主は傍でせつせと菓子を撰り分けて居た、白雲頭の小僧を呼んだ。

『それぢや、貴様鍵を持つて行つて、旦那へ奥の家を案内して上げろ』

小僧は立上つたが、鍵を奥から出して來て、そして自分等の前に立つた。

『君、其處だから、一寸一所に行つて呉れ給へ』と友は自分に言つた。

で、自分等は一町程跡に戻つて、右側の、左は按摩鍼治術と、悪筆で書いた看板の下つて居る家、右は博勞の宿をする汚い不潔な旅人宿との間の、二尺ばかりの小徑を入つて、離れ雪隠の悪臭い臭氣のする所をやつと通り抜けると、一寸した草の生えて居る廣場があつて、その向ふに、乞食小屋とでも言はれさうな、小さな低い茅葺屋根が、一軒しよんぼり立つて居る。小僧はその前に行つて、錠を外して、立付の悪い戸を開放して、そして自分等を案内した。

入口が四疊半で、荒壁がところ／＼崩れ落ちて、疊も大分黒くなつて居る。そればかりなら好いが、天井は空虚として、只黒く煤けた垂木が、縦横に渡されてあるばかりであつた。六疊の方はそれでも疊やら建具やらが、少しは奇麗になつて居るが、景色もなく、眺望もなく、其上周圍が非常に不潔で、塵埃場、雪隠、養鶏場などが狭い處にひし／＼と詰つて居る。雨の降る日などは、糞も味憎も一所に、それは堪つたものではあるまい。

庭には鳳仙花があはれ氣に咲いて、隣の白萩が、低い垣根を越えて、二枝三枝さし出で、居た。

自分は其日の午後二時發の汽車で、恙なく東京に歸つた。けれど暫くは安中の友の事がいろ／＼と心

に懸つて、夜なども随分厭な不吉な夢に襲はれる事も度々あつた。

一一

一月ほど過ぎた。

或日、自分の机の上に、一通の手紙が載せられてあつたが、夫は安中の友から來たので。渠は今月の初旬から、愈老婆と別居して、あの不潔な家に、繁子と同居する事となつたさうだ。そして繁子と机を並べて、いろいろ學問を教へて遣るが、その楽しさは、誠に一方でないと書いてあつた。自分は思はず長嘆した。

一二

それから二十日程経つたある秋のよく晴れた日に、妙義山の野中俊造が、不意に自分の家に尋ねて來て、久しく祕密であつた友の事情が、始めて明かになつた。

『君は山縣から絶交狀を贈られたと、僕の處に言つて寄越したが、一體あれは何うしたんだい。渠の所謂神聖なる戀に關して抔と、君は冷かして書いて寄越したから、此間逢つた時に、山縣に聞いて見ただけれど……』

『山縣先生は、何と言つてました？』

『何でも無いよ、元は僕が悪いんだよ。丸で僕は狂人だからね……と言つたきり如何聞いても話さないから、僕には少しも分らないが一體あれは如何したんだい』

『何に、元は僕が伊勢崎に行つた時、貸りて來た二圓の金を、早く返せと言つて來たのを、僕は先生の爲には——先生の神聖の戀には、随分二圓どころの散財では無い。非常に盡力した揚句に、非常に感情を悪くした事がありますから、態と返事も出さずに黙つて居りましたのさ。すると、先生非常に怒つて汝畜生、野中の人面獸心、今日から斷然絶交するから、さう思へつて言つて來たのです。僕の妻などは、何うしたのですつて、頻に心配しましたけれど、僕はかまはんで捨て、置けと言つて黙つて居りましたきりです。……外に何も……』

その唇には、冷笑の色が明かに見えて居た。

『そして、一體その原因は何うしたんだい』

『先生の所謂神聖なる戀が原因です』

『何う……』

『君はまだ知らないですか。先生の戀が何んな結果になつたか、少しも御存知ないですか』

『知らん』

『それでは……』と言つたが、野中の顔には愈冷笑の影が深くなつた。『それでは分らん譯です。僕は實に、その衝に當つたですからな』

『詳しく話して呉れ給へ』

『面倒臭いすなあ』と、頭を搔いて、『僕は戀だの、神聖だのといふ事は、分りませんからナ。君や山縣のやうな、戀愛家には、僕は話が合はんです』

『關はんから、話し給へ』

『ぢや話ませう』と言つて、ヒーローの吸ひかけを一吹すつて、それを獅子のやうな鼻からすうと出して、『僕は戀愛などといふ事は、分らない方ですから、先生が三年も前から何だ彼だと言つて居た事は、耳にも留めや爲なかつたです。處が、二年前の春、前橋に用事が有つた次手に、あの桐生の二階に寄つたんです。すると、君、病氣に爲つて、瘦衰へて、涙ばかり滴して居るぢやありませんか。僕もかういふ様を見ると、竹馬の友ですから、非常に氣の毒になつて、眞面目に、その戀の所謂詩的戀であつて、自分の空想で楽しんだり悲しんだりして居るものであるか、それとも又、實際に其人を戀ふて、その人を得なければ、死生を意味するといふのであるかと、好く善く聞糺して見たです。すると、決してそんな空想的戀ではない。自分のかの人を得なければ、生きて居る望も無いと言ふではありませんか。それでは宜しい。僕も出来る丈、一臂の力を貸して上げやうと、堅く誓つて、幸ひ佐藤もあの同じ處に

居る事だから、態々東京に出て行つて、佐藤に打明けて、これこれと宜しく頼んで歸つて來たです。それで、佐藤は山縣に寫眞をおくつて遣つたり、いろ／＼な事を知らせて遣つたり爲たのです。けれど僕は遠く離れて居るから、それが何んな風に進行しつゝあるかは、少しも知らなかつた、處が、十一月に、先生は不意に職を辭して東京に歸つたといふ報があつた。これは何でも、かの事に關して、あらうと察したから、僕はいろ／＼用があるにも拘らず、直様その爲に出京して、神田の錦町に宿を取つて、使を遣つて、先生を呼んで、その様子を聞いたです。すると、先生厭な苦い顔をして、戀なんぞ僕は何うでも好い。そんな話は僕は厭だからよして呉れ給へと言ふではありませんか。僕が、これ程思つて態々それが爲に金を費つて出て來て居るのに、餘り我儘だとは思つたけれど、これには何か深い理由があるに相違ないと、蟲を殺して、別段不快な色を面には出さずに、これは佐藤に聞いたら分らうと、(佐藤は先月から横濱の〇〇會社に口が出來て、其處へ行つて居たです。厭だといふのを無理に誘ひ出して、汽車賃でも何でも、皆僕が散財して、一所に横濱に遊びに行つたです。けれど、山縣は非常に不快な様子で、始終碌々口も聞かずに、厭な顔ばかりして居たです。佐藤の下宿に行つて見ると、外に同國人で、水谷とか何とかいふ、頭を米國風に分けた男が來て居て、いろ／＼つまらない女の話か何か爲たです。山縣は黙つて、厭な顔をして、一言の言葉も發しなかつたが、不意に、僕の袂を取つて、オイ散歩に行かうと言ふではありませんか。丸で狂人です。今來たばかりで、散歩に行かうなどゝは……。けれど

ど、何か胸が懊惱して居るのであらうと思つて、言ふが儘に、一寸散歩して來るとて、戶外へ出て、埠頭場近所を其所とも無く逍遙しました、丁度天氣の悪い日で、雲が一面に蔽ひかゝつて、今にも降出しさうな空模様でした。すると、山縣は一寸買物して行くから、一足先に行つて居て呉れと言ふから、僕は何氣なく、一二丁先に行つて待つて居た。十五分程待つても、遣つて來ない。二十分三十分ほど待つても遣つて來ない。何うしたんだらうと、態々元に戻つて、其所等探して見ても、影も形も見えないではありませんか。先生又例の癖を出したなと、思つたですが、何に、その中佐藤の下宿に歸つて來るだらうと思つて、僕は一足先に戻つて、歸つて來るかゝと待つて居たです。日が暮れても歸つて來ない。七時頃になつても歸つて來ない。何うしたんだらう。まさか狐にも魅れは爲まいし、ぼん引に連れられて行きも爲まいがと、噂して居ると、八時頃になつて、端書が來た。そして、それには歸り度くなつたから、失敬して歸ると書いてあつた。僕は非常に不快でした。僕はこれ程心配して、盡力して居るのと思ふと一方ならず、腹が立つたです。されど、仕方が無いから、其晩は佐藤に泊つたです。そして、佐藤から詳しく聞いたです』

かう話して來て、野中は不意に言葉を留めたが、俄に少し笑ひ出して、

『つまり、餘り山縣がまご／＼して居たものだから、佐藤に取りられて了つたんですなあ！』と、極めて冷淡な調子で言つた。

『何に……佐藤が』

自分の驚愕は、一方でない。

『實は佐藤もあんまりなんです。奴は山縣のやうに、眞面目な男ではなし、娼妓も買ふし、藝妓も揚るし、其他いくらかもその艶話は山の如くあると、誇つてる身だから、何も山縣のやうな男が思つて居る女などを、横取しなくつても好いんですけれども……餘り山縣が深く思つて居るもんだから、ふと惡戯する氣に爲つたものと見えるです』

『惡黨！』

と、自分は思はず知らず一喝して、『そして君は何と言つて、それを聞いたんだい。さうかつて笑つて居たのか』

自分の聲は烈しかった。

『笑つて居たといふ譯でも無いですけど、濟んだ事を責めたつて……』

『それぢや、君は黙つて笑つて歸つて來たんだ。何故、君はそんな不徳な行爲を爲た佐藤に痰でも吐き懸けて遣らなかつた？』

『そんな事も……』

『出來ないと言ふのか……君考へて見給へ、山縣の身になつて見給へ、こんな情ない事が有るか。』

一時の悪戯に、友人一人駄目にしてしまった佐藤の行爲を、君は責める價値は無いと思ふのか。友人の爲に、仲に立つと言つて置いて、自分がそれを横取りしてしまふなどは、餘程の悪人でなくては出来ない業だ。僕なら黙つてそれを聞いて居や爲ない。痰を引懸けて、打撲つて、席を蹴立つて歸つて来る』

『……………』

自分は始めて知つた友の悲劇に、戰慄する程烈しく心を撲れたのである。あの性質で、そんな酷い目に逢つた友の其時の心は、果して何なであつたらう。赤く焼けた鉛を吞せられたより、未だ辛く苦しかつたであらう。それにしても、憎いのは佐藤だ。一時の戯に、ほんの一時の出來心に、一人のみならず、二人迄も身を誤らせて了ふとは、何たる残忍な性質であらう。そんな人間こそ肉を啖つても、猶飽き足らないといふものだ。不幸福なのは、そんな悪い友達を持つた山縣の身であると、思ふと、女も餘り節操が無いといふ事から、それとは知らずにあんなに山縣の變心を罵倒した事やら、安中の婆様やら、繁子やら、磯部の温泉に往く途中、いろ／＼と話を爲た事やら、深夜に湯の中で友を思つた事やら、さびしい友の顔やらが、巴渦のやうに亂れ合つて浮んで来る。

『それから何うしたね』

『それからですか、それからは、別に何も無かつたです。翌日僕は東京に歸つて、一週間ほどいろいろな用事を足して、山縣にも幾度も逢つたですけれど、別に其話は仕ませんでした。只山縣がそんな風

にして、絶望して居るのが、氣の毒でしたから、好い口があつたら、田舎へでも行つた方が好いだらうと言つて、二三軒知つてる所に頼んで遣つたです』

『君も随分思ひ遣りの無い人だね……考へても見給へ。山縣が怒るのも無理は無いぢやないか。山縣のやうな性質で、佐藤に打明けたのも君が始めてで、それが、そんな風な結果に爲つたのに、假令それを君が知らなかつたとはいへ、仇敵の様な佐藤の所へ引張つて行つて、そして君は其處に泊つて、いろんな事を聞いて、其次逢つた時から、もう一語もその戀の話を山縣に爲なかつたなんぞは、餘りに冷淡ぢやないか。そりや君も金を費つて居やうさ。君も盡力したらうさ。けれど僕は君が山縣に同情のし様が、淺く冷ではあるまいかと思ふ。そしておまけに、そんなに絶望して居ないで、何處か田舎へ行つたら何うだなどは、餘りに酷いぢやないか』

『左様ですか。僕はこれでも随分盡力した積りですが……』

友の心は如何であつたらうと、自分は又思ひ始めた。野中に引張られて、その横濱に行つて、佐藤の室に座つて居るのに堪へないで、散歩に行かうと言ひ出した時は、如何であつたらう。其夜一人で、孑然と夜汽車で歸つて來た時の心は、如何であつたらう。それとは少しも知らぬ故、自分は、あの時頻りに理想の戀といふ事を説いて、何故絶対の愛を爲ない。何故仇敵をも愛さないと言つたが、自分でも……こんな悪い結果に邂逅したら、果して平生の理想を實行して、猶その戀人を愛する事が出来るであ

らうか。まして友の晝水日記に書いてあつた戀は、非常に純潔で、神聖で、それはく一生をそれが爲に犠牲にしても、惜しく無いといふ程であつたのに……。女も女だ。あんな佐藤のやうな男に騙されて、山縣の眞の戀を認める事が出来なかつたとは……。

『そして今二人は、何んな間柄になつて居るんだね？』

突如に自分は問ふた。

『好くは知りませんが、今でも手紙の往來などして、随分深くなつて居るといふ話です』

自分は又思つた。友は身分が不相應だと、そればかりを苦にして居たが、渠より數等身分の悪い、性質の悪い、學問も無い男に、かの少女が身を任せやうとは……。

憎いくくのは、佐藤だ。肉を咬つても猶飽足りないのはさういふ人間だ。それにしても、女といふ者は、そんなに意志の弱い情ないものであらうか。あの令嬢などは、學問もあり、性質も鋭敏だと聞いて居つたのに……。否、殊更に女のすくやうなにやけ男があるとの事であるから……。

散々責められて、氣色を悪くして野中の歸つて行つたのは、未だ夕日の影が、向ふの丘の黒い林に残つて居る頃であつたが、いつか日は悉皆暮れて、星の光が閃々と闇の空にかゞやき渡つた。自分は長い秋の夜の更けるのも知らずに、机に凭りかゝつて、悲しい友の事を思つたが、遂に堪兼ねて、長い手紙を書き始めた。

戸外には烈しい木枯が立つて、四面の雨戸は、皆がたくくと鳴り始めた。こんな寒い夜に、友は何を爲て居るであらうか。

一四

翌日の午後、自分はいつもの散歩に出て、戸山の原の射的場の障壁の後の林を、てくくと歩いて居た。早稻田の自分の家から、此所まで來るのには、少くとも二三度立留つて、あゝ好い景色だなあ！と心から見惚れて、歌の一ツも考へるのが常であるが、今日は空の具合は殊に晴れやかで、をりく日影を隠す氣まぐれの雲もなく、尾花の末を渡つて行く、薄ら寒い風もなく、遠い天末の黒い林の上に、晝のやうに現れてゐる秩父の連山も、丸で手に取るやうに分明と見えて、それはく秋の日和の中でも、殊に珍らしい日和であつた。破れ懸けた戸山學校の竹垣に添つた、楢林の中の薄暗い小路を、晴れくと廣い野原に出ると、もう自分の心地は、丸で變つて、喧しい、忙しい、苦しい、煩さい都の俗事などは、頓と夢のやうに忘れて了ふ。そして、がらんと向ふの森の陰に轟きわたる車の音や、後の森の中に、私語のやうに囁り渡る鳥の聲や、何處とも知れぬ草刈唄の、微な調子などにすつかり耳を傾けて、身も心も丸で天地と一所に爲つて仕舞ふ……。それから又暫く經つと、又歩き出して、此回はだらくと戸山學校の廣場の方へ下りて、車井の傍を通つて、さびしさうに暮して居る野中の一軒家に向ふに上

ると、小松がずうと一直線に、東海道の並木のやうに連り渡つて居て、そして其上に、青い／＼空の色よりも猶青い富士が、悠然として聳えて居る。丁度よく來たな、今日はいつもより些と早いと言ひさうだ。この富士の色ほど、變化に富んで面白い趣を呈するものは他にはあるまいと、自分はいつも思ふのである。十分経つても、もう其色が違ふ。五分経つても、もうその趣が變る。自分は毎日のやうに散歩に來るが、ついぞその富士の色の同じなのを見た例が無い。或は雲の多い日には、その青い色の半面を現して居るとか、或は薄紫に夕日を彩つて居るとか、或は金泥のやうな夕陽の中に聳えて居るとか、或は黒く黒絹のやうになつて見えるとか、時の前後、空氣の具合で、いろ／＼様々の色彩を呈するのである。今日向つたのは、濃い紫の夕陽の色でもなく、薄白い曇り勝の日の色でもなく、寧ろ冴えわたつた冬の日の深碧極る色であつたが、自分は暫くの間、立留つて、それを眺めて、いつ見ても美しいなあ！と思つて、そしておまけに、自分がその富士の裾野を歩いた時の事など思出して、荊萱、尾花、女郎花などの路も狭しと生茂つて居る間を、眞直に射塚の方へと行つた。

それから赤土の土手に沿つて、旗竿の傍の射塚に突當つて、低い窪地へ下りて、又昇つて、そして一段高い杉と檜と交つて居る林の前に立つて、今歩いて來た方を振り返つて見た。原の南の一隅には、頻りに練兵してゐる一隊の兵士があつて、その所々に並んださまは、丸で豆人形のやうに見える。
自分はいつでも此處まで來ると、引返して大久保の方に行くか、でなければ高田の諏訪神社の方へと

行くのが例で、是から先に、林を透して行つて見やうと思つた事はないのである。であるのに、今日は何うしてか今少し先に行つて見やうと思つて、其儘疎な、ところ／＼美しい紅葉の交つた、矮樹の林を抜けて、一歩一歩向ふへ歩いて行つた。

林の盡きた所に、萱原が夕日の光を斜に受けて、がさ／＼と薄ら寒い夕暮の風に靡いて居た。細い路は、うね／＼と其中を横断して、それを少し下ると、眞直な鐵道線路が通じてあつて、電信柱がところ／＼に、一寸ばかりその頭を尾花の上に出して居る。

それを越えると、路は次第に草藪と深林の中へと入つて行く。草は半ば枯れて居るが、それでもまだ倒れ伏すまでには至らないから、深い所に行くと、殆ど肩も埋れて了ふばかりだ。栗の毬藁が口を開いて、今にも落ちさうにして居るのを、篠竹で二つ三つ落して、猶段々分けて行くと藪は愈深くなつて、盜賊草や荆棘などが、遠慮もなく自分の衣にへばり着く。でもかまはずに、篠や笹の繁つて居る間を分けて、一町程も行つたと思はれる頃、自分は傍に秋の残りの桔梗、女郎花などの美しく咲亂れて居る、一坪ばかりの芝地を認めた。

前も後も皆深い草藪である。

丸で大海の中の一孤島のやうだと思ひながら、自分はそこに腰を休めた。そして、後の林を透して來る夕日の微かな光を見詰めながら、いろ／＼な深い空想に耽り出した。四面には草や木の葉のざわ／＼

とざわつく音が、丁度波の寄せるやうに聞える。

不圖思出したのは、友の事。

すると、胸が旋風のやうに回轉し始めて、いろ／＼の事や、景や、場やが、走馬燈のやうに、ぐるぐると廻り出す……。そして友の顔、良子の顔、繁子の顔、老婆の顔などが、眼の前にちら／＼と見え始める……。あゝ氣の毒な男だなあ！と思ふと、それが直ぐ變つて、憎いのは佐藤だ。一時の戯に、人を二人迄身を誤らせるとは、何たる人畜生であらうか。あのやうな人間こそ、八裂にしても……。と思ふと、牛を八疋繋いで、罪人を刑罰に處した昔の有様が、あり／＼と眼に見える。そして、その罪人の悲鳴の聲が、腸をちぎるやうに悲しく聞えるか……。と思ふと、その罪人の顔が、いつか佐藤の顔に爲つて居る。

馬鹿な空想を……

と、氣が附いても、自分は猶それを止める事が出来なかつた。否、自分の性分として、かういふ空想に耽り始めると、それは限りは無いので、自分の感覺が、全く外物と觸れなくなつて了ふのがいつもの例であつた。まして、この一坪の平地は、のどかで、静かで、暖かで、このやうな空想に耽るのには、至極適して居たから、自分は愈深陥りを爲て了つた。

一時間は少くとも経つたに違ひない。

裏の川で情死したものがあるといふので、大騒をして、其所に行つて見ると、男は山縣で、女はかの神童の繁子である。やつと驚いて、そして又自分の空想に、はつとして氣が付くと、今迄林から射し込んで居た夕日の影は、全然消えて、空の色ももう薄鼠になり始めて居た。馬鹿な事を考へたものだと思つて、今回は傍に置いた竹の根の杖を取つて、がさ／＼と風に鳴る草叢を分けて向ふへ出た。

夕日は今林と林との間に沈まうとして、自分が急いで上つて行つた高い丘の上から見ると、右の野も左の野も、一面に淋しい物哀れな光を受けて、間近になつた冬の凄さが、何所ともなく現れて居た。鳥が一羽向ふの林から飛び出したが、二三度羽搏をして低く林の際を縫ひながら、夕日の色を掠めて、いつか見えなくなつた。自分は火の玉のやうな、見て居ると何となく氣が沈む、一種厭に赤く大きな夕日の影の、黒い／＼森の陰へ落ちて行くのを、ぢつと一心に見詰めながら、悲しく友の事を思つた。

涙は落つるともなく頬を傳つた。

暫くすると、日が落ちて、野には夕の靄が幕を引いたやうに一面に棚引渡つた。そして森も村も山も丘も、皆なその中に、一つ一つかくれて仕舞ふ……。

歸宅して、自分は驚いた。

机の上には手紙があつて、それには昨夜友が自殺したといふ事が報じてあつた。……先程友を思つた

時には、もう渠は此世には居なかつたのだ。

* * * * *

友は何故死んだか、何故自殺などを爲たか、その事情に就ては、久しい後まで、知る事が出来なかつた。友の父から寄越した手紙には、此様な譯になつて、何とも面目次第も無い。親の面汚し、友人の面汚し、こんな意氣地の無い子を有つた、親の心を察して下さいと書いてあるばかりで、その事情に就ては、少しもその祕密を語らなかつたが、二三ヶ月も経つと東京にも其話が段々傳つて、山縣は不倫の戀をして死んだのだと言ふものもあれば、絶望の極死んだのだといふものもあつて、その説は至極區々であつた。自分も大抵は……と想像は爲たが、何だかそれでは満足が出来ぬやうで、何うかしてこの祕密を知り度いと思つた。すると翌年の二月の十三日に、自分の名宛で、一箇の小さい紙包を、略封で送つたものがある。裏には、署名もなく、筆跡は女が一生懸命に男の手跡を眞似たといふやうな風である。そしてその中には、半紙を綴じた一冊の書冊があつて、それは——友が手づから書いた、その自殺前十日間の日記であつた。

この日記で、自分の疑はずつかり氷解した。そして自分の友の死に、涙を灑ぐことは一層の甚しさを加へた。つまり、自分の想像は九分まで中つたのであつた。けれど、その事情はあまり好い事でも無いから、自分は日記を此處に出して、それを公衆に讀ませるのに忍びない……。が、只一言、かの家に聞居してから老婆の反對は愈烈しく、繁子との間は愈深く、果ては人の噂にまでもものぼるやうになつたといふ事を、ほのめかしたらば、誰でも、その祕密は想像されるであらうと思ふ。

老婆は猶二三年の後までは、故郷に歸つて、乞食小屋のやうな所で、一人しがなく生活して居たと、見て來た人が自分に話した。繁子は友の死んだ翌年、召されて貴顯の邸に上つたとの事であつた。

(明治三十三年三月)

野
の
花

野の花

—

大學に居たころだから最早餘程以前の事だが……と、なにがしといふ男が話し出した。年齢は二十三で、學問が好く出来て、優に儕輩の上に一頭地を擢でゝ居て、平生詩や小説などばかり讀んで居ながら、いざ試験といふ時にはいつも優等を占めるといふほどの元氣な勢であつた。だから自分の才能や自分の天分などに随分自惚れて、世の中に望んで得られぬものは恐らくはあるまいと思つて居たので、決して運命などの儂ないものがあらうとは夢にも思つて居らなかつた。況して今迄穩に霞んで居た春の海が俄に烈しく暴れだして、波は高く、風は強く、蔽ひかゝる黒雲の見るも凄しい景色にならうなどは猶更思つて居らなかつた。唉！ 自分も今は覺め易いのは青年の夢といふあの厭な言葉を繰返さねばならぬ身となつたのだ、自分ばかりは何んな事があつても、彼様な厭な滅入りさうな言葉は、誓つてこの